

月下残影

琴乃つむぎ / WordsWeaver

## お読みになる前に

この作品は、とある小説の番外編として書いたものでした。

この作品の最後の方に思わせぶりの伏線がありますが、それはとある小説に繋がるものでした(その伏線自体は、この作品を読む上ではそれほど問題ないものだと思います)。

とある小説は未完成の未公開作品であり、これからも一般公開する予定はありません。

かといって、今更その伏線を修正するわけにもいきませんので、そのままにしてあります。

その点ご留意の上、お読みいただけると幸いです。

## 00.プロローグ

月が浮かんでる。

闇がかすんでる。

漆黒の闇をかすませる光が窓から入り込み、シャ  
ンデリアや壁に掛かった燭台の明かりをも侵食す  
る。

どうせなら、この身も侵食して欲しい、この場か  
ら消し去って欲しい——闇空にぽっかりとうがたれ  
た光の空虚に魅入られるようにして、ミルイヒはな  
んとはなしにそう思っていた。

それは強い願いではない。いや、願いですらな  
い。単なる想い。冴え冴えとした月を見ていたら、  
そんな想いがおぼろげに浮かんできただけなのだ。

しかし、その想いは、すぐさまかき消されてし  
まった。

「お父上のご加減はどうだね？」

愛想笑いを浮かべた何某卿が、ワイングラスを片  
手に話しかけてきたのである。

「……まあまあです」

ミルイヒはうわの空でぶっきらぼうに答えた。

「君は今年でいくつだったかな？」

「……十六です」

先ほどと同じく、感情のない口調で答えた。

「ほう、今年で士官学校卒業か」

「……」

「それではお父上もようやく安心できるな。学資金工面にだいぶ苦労したと……おっと、失礼」

何某卿ははにかんだ。目が笑っている。

「……いえ、本当のことですから」

ミルイヒは眉間にしわ一つ寄せることなく答えた。

その反応は何某卿の期待したものではなかったらしい。何某卿は眉をひそめ、顎を軽く引いた会釈をして、きらびやかな人々の林の中へと紛れていった。

ミルイヒは密かにため息をついた。これは今日で何回目だろうか？ どうして貴族たちは同じようなことばかり訊いてくるのだろうか。しかも、わかりきっているだろうことさえも！

高い襟と袖口に金の刺繍のある黒い制服は、ミルイヒが士官学校最上級生であることを示しているし、二年前から、病床の父の代理で公私に渡る催し物に出席していることは周知の事実であったし、セイデーズ公爵家は使用人に満足に食事を与えてやれぬほどに落ちぶれていることは、百年も前から知ら

れていることだった。

だが、今さら憤ったりはしない。他愛ない、くだらない会話も、貴族の仕事の一つだということを知っているからである。

しかし、ミルイヒはおよそ社交的な人間ではなかったから、こちらから話しかけるようなことは絶対になかったし、応えは簡潔で無愛想だった。

そのようであったから、いつしかミルイヒは、「鉄仮面卿」の異名——まだ、「騎士」の称号さえももらっていないというのに——で密かに呼ばれるようになっていた。夜会で、誰がその鉄仮面をはずさせることができるか、というちょっとした賭けの対象になっていることは、ミルイヒの知る由もない。

楽士の奏でる舞曲が一区切りした。広間の中央で踊っていた男女は各々一礼し、次の相手を求めて散っていった。

ミルイヒはその様子をいつも通り、なんとはなしに眺めていた。どうせ、わたしと踊りたいという者はいない。それには羨望も怨恨もない。あるのは諦観だけだ。

貴族のたしなみである舞踏が得意でないというわけではなかった。しかし、誘いを受けたことは今までに一度もない。近寄りがたい雰囲気はずいぶん

ろうということはなんとなく気づいていたが、それはどうすることもできないことであつたし、こちらから誘う気にもならなかつた。舞踏の練習相手である使用人のシャラ以外の者と、たまには踊ってみたいとは思っているが。

広間の端の方がざわめき始めた。どうやら、今夜の主賓が現れたらしい。

今夜の舞踏会は、アルヴァ国第五王女、エルネラ・レイ・アルヴァーノの社交界初お目見えなのである。エルネラは身分の低い妾妃の娘であるが、六人の王女の中で一番美しいと噂されている。

——そう、それは噂。

その姿を実際に見た者は、数えるほどしかいないという。真偽のほどを確かめようというのか、今夜の舞踏会の出席者はいつもの二倍はいるかと思われる。

だが、ミルイヒはなんの関心も持っていなかつた。招待状が来たから、いつも通り、ちょっとうんざりしながら、のこのこやってきただけなのである。

色鮮やかなリボン、レースやフリルのごたごたとしたドレスを着た人々に囲まれて、エルネラはごくシンプルな、身体にぴったりとした白いドレスで広間の中央に現れた。

ミルイヒはその姿を人波からちらりとかいま見た。

やはり、まだ十二歳だけあって、その顔にはあどけなさがありありだが、あと数年したら国一番の——いや、近隣諸国においても稀なる美姫になるであろうに違いない片鱗があった。

金の髪は月の光に侵食されることなく、いや、むしろその光を吸い込んで、ほのかに輝いている。卵形の顔は白い陶器のようで、触れたらたちまち壊れてしまいそうだ。目はさほど大きいわけではないのだが、新緑の瞳はつややかで実に印象的だ。また、すらりとした肢体を包む、これといった意匠のほどこされていないドレスが、エルネラの美しさを損なわず、むしろ際立たせている。

我が盟友のランディ・フェイスならば、人々をかきわけて姫の手を取り、いの一番に舞踏の誘いをするだろう、と思って、ミルイヒは小さく笑った。唇の端を少しだけ上げた、人知れない笑い。

その一瞬、エルネラと目があった。

ミルイヒの瞳に、鮮やかな緑が焼き付く。

しまった！ と我に返り、すぐに目をそらした。

なぜ、そのような動揺を感じたのかはわからな

かったが、それはまずいことのように感じられた。まるで、ずっと秘密にしていたものを見られてしまったかのような。

恐る恐る目を上げ、エルネラを見た。たくさんの人々に囲まれているのにも関わらず、気後れした風もなく、かといって威圧的でもなく、控えめな気品をもって受け答えをしている。

ほっとした。あれは本当にたまたま目があっただけで、彼女はその身を囲んでいるその他大勢と同じように、自分に目を向けたのに過ぎないのだ、と。

舞曲が流れ出した。遅いテンポの曲だ。エルネラは主催者である何某侯爵に手を取られて踊り始めた。ステップは確実に優美である。

ミルイヒはエルネラに注目する人々をさけて、ひとり、バルコニーに出た。まだ生暖かさの残る夜風が金髪をなでる。満月は中天にあり、ミルイヒの血色の悪い顔をさらに青白くさせ、消え入りそうなほどに侵食した。

それから二日後、ミルイヒの父は病死した。

母親はミルイヒが小さい時にすでにないため、ミルイヒが公爵の爵位を継ぐこととなった。



## 01.婚約

月が半分だけ青白い顔を出していた。世界は不気味な明るさに照らし出され、人外のものが現れても何の不思議もないよう。

ミルイヒは王城の裏手門警備の仕事を終え、家に帰るところだった。

周りに立ち並ぶ貴族たちの壮麗な家々に、舗道を蹴る馬の蹄の音だけが虚しく響いている。どの家にも明かりがともされておらず、人が住んでいる区域とは思われない静けさがあたりを覆い尽くしていた。

もう少し早い時間ならば夜会から帰る貴族たちの馬車も通っていようし、もう少し遅い時間ならば朝帰りの貴族が歩いていよう。今はその間の時間であった。

秋を運ぶ冷たい風がにわかにかいた。

ミルイヒは肩をすくめ、その身体に馴染んで二年となる、近衛隊の白い外套を胸元に寄せようとした。その途端、留めボタンが飛び、白い外套は青白く輝きながら、建物の間に舞うように落ちた。

ミルイヒはため息をつき、馬から下りて外套を拾いに行った。身をかがめて外套を取り上げようとしたとき、

すべてが闇に包まれた。

しかし、その一瞬前、白刃がきらめくのをミルイヒは見逃さなかった。

甲高い音が夜のしじまを引き裂いた。ミルイヒが辛うじて白刃を受けたのである。闇の中で相手を失わぬよう必死に剣を合わせ、左手で短剣を抜く。

相手も同じ事を考えたらしい。剣を抜く鞘ずれの音がし、次の間には空気を引き裂く鋭い音がした。

ミルイヒは合わせた剣を押し、その反動で一気に後退した。空振った音が虚しくあとを引く。

闇にようやく目が慣れてきた。相手の姿ははっきりしないが、白刃は浮き上がって見える。

ふたりは数合剣を合わせた。息もつかせぬ勢いで、突然の襲撃者は剣を繰り出してくる。

ミルイヒの額から汗が流れる。冷たい汗だ。

——手強い！

受けるだけで精一杯だった。

襲撃者は両手の長剣と短剣をうまく組み合わせて使う。ミルイヒが長剣を受けた次の瞬間には、短剣が脇腹を狙っている。長剣の間合いのはずなのに、いつの間にか懐に詰め寄られているのである。

ミルイヒは短剣を軽く放って逆手に持ち替えた。受けにまわらなければ防ぎきれない。しかし、それ

でも徐々に後退させられ、遂には壁に追い込まれた。

それが狙いだった。

迫り来る長剣をはねのけ、続く短剣を……

激痛が左の小手を襲った。

短剣が深々と腕を貫いている。手の感覚が麻痺し、握っていた短剣が落ちた。

受け損ねたわけでない。襲撃者の動きを一瞬でもよいから止めたかったのだ。

案の定、襲撃者はミルイヒの捨て鉢ともいえる受けにひるんだ。反射的に引き抜こうとする。しかし、ミルイヒは抜かせぬよう、引きに逆らわなかった。

襲撃者が短剣を諦め、長剣を使うための間合いを取ろうとしたときにはもう遅い。ミルイヒは襲撃者のみぞおちに鋭い膝蹴りを放ち、よろめいて後退したところを剣で突いた――が、左肩をかすっただけだった。ミルイヒは舌打ちした。

襲撃者は身を翻し、走った。ミルイヒもそのあとを追ったが、すぐに諦めざるを得なかった。馬を奪われたのだ。

ようやく現れた月の下、襲撃者の風になびく黒髪

と、ほっそりとした背中では遠ざかり消えゆく。そのあとには、月光にかすむ闇が残るばかりである。

闇と青白さだけが世界を作っている。先ほどの出来事が嘘のように、幻想的な静けさがそこにあった。しかし、ミルイヒの腕から滴る赤黒い血が、夢でなかったことを主張している。

突き刺さったままの短剣と、血に汚れた白い隊服を見て、ミルイヒは深々とため息をつかざるを得なかった。

執事にまた何か言われる……。

今年の残暑はさほど厳しくはない。暑すぎず、寒すぎず、外で昼寝をするにはもってこいの天気が続いている。

まだ青々とした草木は柔らかな日差しに黄緑色に輝き、その狭間からわずかにこぼれ出た光は、木にもたれたミルイヒの、投げ出された足をまだら模様にした。

ミルイヒは眠りと覚醒の間をさまよい、鳥のさえずりと木々のざわめきを聴いていた。

と、そこへ、がさがさと下生えを踏む騒々しい足音が聞こえてきた。足音の正体はあの男に違いない。

至福の時を害されて、少しばかりむっとして、ミ

ルイヒは重いまぶたを上げた。案の定、近衛隊の白い制服姿のランディが、あきれ顔でこちらにやって来るのが見えた。

「やっぱり、ここにいたか。非番とはいえ、こんなところで昼寝してたら、また班長にどやされるぞ」

そう言われても、王宮の中庭が一番寝心地がよいのだから仕方がない。友人の助言でもそれは譲れない。また、ランディもミルイヒの頑固さを知っているだろうから、それはからかい口調だった。

ランディは短く刈り込まれた芝生の上に座り込んだ。碧の瞳が奇妙なきらめきを帯び、唇の両端がきゅっと釣り上がっている。この男がこんな顔をする時はろくなことがない。

「聞いたぞ、聞いたぞ。おまえも隅に置けない奴だなあ。親友である俺にひとつことも言わないなんてなあ」

ランディは端から見れば悪友であるかもしれないが、ミルイヒにとっては士官学校時代からの唯一無二の親友であった。

「何のことだ？」

ミルイヒは気だるげに身体を起こした。

「何のことだ、じゃないだろう？ 皆、噂してるぞ」

ミルイヒは首を傾げた。

「噂？ 何の噂だ？」

ランディはこれ見よがしにため息をついた。ミルイヒが周りのことに非常に無頓着であることを思い出したのだろう。

気を取り直した様子で、

「昨夜の、エルネラ殿下十六回目の誕生日会で……ああ、そうか、おまえは裏手門警備だったからな。話が届いていなかったか。エルネラ殿下とおまえが婚約してるってことさ」

「ああ、そのこと」

どうでもよいことのように淡々と答える。

事実、どうでもよかった。昨夜のことは、あの襲撃者のことと、執事がうるさかったことしか覚えていない。怪我のことを言いくるめるのが大変だった。

問題の怪我はそれほど大事ではないと思っていたのだが、そうでもなかった。家に帰り着いた途端、脂汗が流れるほどに痛み出し、そのため、よく眠れもしなかった。

いまだ、じくじくと痛む。昨日の今日のなのだから仕方がないが、他によい方法があったんじゃないかと後悔した。

もっともそれは、生きて今ここにいるから思えることである。

「どうりで、今日は皆の視線をやけに感じると思った。……なんだ、婚約の話って本当だったんだな」

「なーに、他人事のように言ってるんだ。当事者はおまえだろ？ 真相を聞かせろよ」

ミルイヒは、興味深げに目を輝かせているランディをまじまじと見つめたが、すぐにさっと目をそらした。

「真相と言っても……ちょうど四年前、死ぬ間際の父の口から初めてそのことを聞かされたんだ。てっきり、ほらかと思っていたんだが……」

「死ぬ間際にほらなんか言う奴はいないぜ。それに、おまえの父親と国王陛下は仲が良かったそうじゃないか。そんな話が出ていてもおかしくはない」

「……」

確かにランディの言う通りかもしれない。

父と国王は乳兄弟であり、親友であった。国王はいつもセイデーズ家の家計を案じており、なにかしらの理由をつけては様々な物を送りつけてきた。だが、父はどのような物が送られてこようとも決して受け取らなかった。さほど厳しい人ではなかったが、公私をわきまえ、清貧を尊ぶ人だった。

幼いミルイヒに、よくこう言ったものだ。

「ミルイヒ、虚飾に溺れてはならんぞ。あのよう

墮落した、名ばかりの貴族となってはならぬ。忠誠、公正、勇気、武芸、慈愛、寛容、礼節、奉仕を忘れず、誇り高き貴族たれ」

「父上、それではまるで騎士ではないですか」

「貴族は本をただせば騎士なのだよ。貴族たちは長い虚飾の生活の中で騎士の精神を忘れ、または取り違えてしまったのだ」

そんな父だったから、他の貴族からは煙たがられていたし、国王の父への寵愛ぶりを嫉妬されていた。だが、意に介してはいないようだった。

父はあまり自分のことを話さなかった。だから、死ぬ間際の告白も、

「実は、おまえはエルネラ殿下と婚約していることになっている」

という、至って簡潔なものだった。詳細を問いただそうにも、父は告白の直後に亡くなってしまった。

「花嫁なら受け取るだろうと思われたのかもしれない。だが、わたしは陛下からそんな話は一切聞いてはいない」

「事後承諾ってやつだな。おまえたち貴族には珍しくないことだろう」

その言葉には皮肉が込められている。ランディが貴族のことを口にするといつもこうだ。



ランディは元々は貴族ではない。大豪商の次男なのだ。跡継ぎではないことをよいことに遊び歩いている不良息子だったのだが、それを見かねたランディの父が、性根を叩き直してこいとばかりに士官学校にぶち込んだのだった。——大して成果はなかったようだが。

庶民が士官学校に入ることは非常に珍しいことである。士官学校は、貴族息子たちが騎士になるべく用意されているようなものだった。

だから、貴族の群の中に一人放り込まれた庶民のランディは、士官学校に庶民がいることを快く思わぬ者たちから様々な嫌がらせにあった。

だが、ランディはそのようなことであって黙っているような人間ではない。二倍、いや、三倍ぐらいにしてお返ししてやった。それが恐れられて、士官学校に入って半年後には嫌がらせはぴたりとなくなっていた。

ランディいわく、

「まったく、根性のない奴らだぜ。集団でなきゃ何にもできないんだ。こっちはいつでも正々堂々サシで勝負してやるってのによ。『騎士』らしく、な！」

だが、生来人好きのする彼である。庶民だ何だと蔑まれていた彼であったが、次第にその気っ風の良

さで貴族息子たちを引きつけていった。今ではどれくらい友人がいるのか、ミルイヒにはわからない。

そんな彼がどうして、こんな面白みも愛想もない自分の親友たるを望んだのだろう、と時々思う。それは、自分がこの男を好きである理由と同じくらい、わからないことである。

賭博、喧嘩、女遊び……およそためになるようなことを教わったためしはない。それが悪友と呼ばれる所以であろう。

「事後承諾……だとしても、なぜ今頃そんな話が？」

「それはやっぱり、エルネラ殿下が成人なさったからだろうよ。俺はご拝顔にあずかったことはないが、たいそう美しい方だそうじゃないか。群がる男どもは数知れず」

「それでは、わたしは殿下の防虫剤ということか？」

ランディは眉をひそめ、ため息をついた。

「どうしておまえはそううがった考え方をするかなあ」

「うがっている？ ……そう考えざるを得ないだろう。わたしは殿下と面識はない」

四年前のあの夜、ただ一度目を合わせたきりだ。

「殿下から婚約の話を出したということはないと言

うんだな？ やはり、陛下のご意向というわけか」

「真相は陛下に伺わなければわからないが……」

おそらくそうに違いない。陛下はセイデーズ家の窮状を何とかしたいと思っているのだ。余計なお世話といったところだが、忠臣たるミルイヒはそのようなことをおくびにも出さない。

「それで、婚約の話が本当だとしてだ。おまえはどうするんだ？」

ランディはミルイヒの鉄面皮をちらりと窺った。

「何も」

ランディは忌々しそうに芝生をむしった。

「結婚相手を勝手に決められて、何とも思わないのか？」

「陛下がお決めになったことなら、逆らう理由はない。幸い、心に決めた相手はない——いや、いたとしてもわたしは陛下の御意に従うだろう。それに、わたしはセイデーズ家の当主としてその血統を絶やすわけにはいかない。いずれは結婚しなければならない身だ」

ランディは不愉快そうに目を細めて、ミルイヒを見た。

「誰でもいいってわけだな。……おい、そのこと他の奴の前で言うんじゃないぞ」

ミルイヒは眉をひそめた。

「なぜだ？」

「刺される」

ミルイヒは目をしばたかせた。

「それほどの魅力がある人なんだろうよ、エルネラ殿下は」

と、何か含みのある様子で付け加えると、ランディは立ち上がり、純白のマントに付いた埃をはたき落とした。

「さあて、陛下に謁見たまわりに行こうぜ、相棒！」

鱗雲に覆われた黄昏空に、威勢の良いかけ声と、木と木がぶつかり合う乾いた音が響き渡っている。

「えいっ、やあっ、たあっ!!」

白金の髪を三つ編みにし、男物の服を着た少女は木剣で果敢に打ち込んだ。

それを受ける黒髪の青年は、男にしてはやけにほっそりとしていてる。だが、少女の激しい打ち込みに気圧される様子はない。優雅と言っていいほどの動作で、軽く受け流している。

「今日はやけに気合いが入っているんだね」

日焼けのあとが全く見られない青年は、白く整った顔をほころばせた。

「……気合いも……入る……わよ！」

青年の涼しい顔に反して、少女のそれは汗と埃にまみれ、紅潮している。

「やあっ！」

少女は上段に斬り込んだ。青年はさっとそれをかわし、勢いによろめいた少女の背を押した。少女は地面に倒れ込んだ。すぐに立ち上がって身を翻したが、

「今日はここまで」

少女の額に剣先が突きつけられた。

少女は一瞬ひるみ、柳眉をひそめて青年をにらんだ。

「まだ始めたばかりよ」

青年は木剣を下ろし、少女に背を向けて歩き始めた。

「雑念が多すぎる。これじゃあ修練にならないよ」

「修練にならなくたっていいわよ。とにかく鬱憤晴らしがしたいの！ わたし、昨日の夜からずっとむしゃくしゃしてるんだから」

青年はいつもの優しげな顔から一転して、神妙な面持ちで踵を返した。

「鬱憤晴らしに剣を使ってほしくないな」

少女はその迫力に気圧されたが、拳を固めて負けじと声を張り上げた。

「相手をしてくれないって言うならいいわよ。下町

にでも行って喧嘩を吹っ掛けてくるから！」

少女はずんずんと大股で、森と言っていいほどの広い庭の出口へと歩いた。

青年は慌てて追いかけて、

「待ちなさい！ エルネラ！」

と、少女の細い腕をつかんで引きとめた。

「いたたたっ！ そんなに強くつかまさないでよ」

エルネラは眉間にしわをよせ、自分の腕を乱暴に取り戻した。まったく、どこからあんな馬鹿力が出てくるのかしら。青年のか細く、長い指を見ながらそう思った。

青年はエルネラの非難を無視してため息をついた。

「下町へ行って喧嘩するだなんて……仮にも君はお姫様なんだから」

エルネラはむっつりとした顔で青年を見上げた。

「お姫様、お姫様！ もう聞きたくないわ、そんな言葉」

がくりと肩を落としてうつむく。

「あーあ。どうしてわたしは『お姫様』なのかしらね。男だったら……いえ、何の肩書きもない女でさえあったら、どんなによかったことかしら……」

青年は首を振り、ため息をついた。

「いつも言う答えだけど、『何の肩書きもない女』

にだってそれなりの苦勞はあるんだ。君には隣のバラがより赤く見えているだけだよ。望んでもどうにもならないことはこの世にはたくさんある。君は『お姫様』として生まれてきたんだ。だから、『お姫様』として生きなくちゃならない」

エルネラは顔を上げ、青年の黒い瞳を毅然と見つめた。

「そんなのは嫌！ わたしはわたしの生きたいように生きるわ。『お姫様』として生まれたからって… …そんなの……納得いかないわ!!」

青年は目を細めて微笑んだ。

「うん。わたしもあまり納得してない。だから、こうやって君に剣を教える」

エルネラは満面の笑みを浮かべ、青年に勢いよく抱きついた。青年は驚いてよろめいた。

「だから大好きよ！」

「おいおい、エルネラ」

青年は困った声を出したが、その整った顔はほころんでいた。エルネラの頭をいとしげに撫でてやる。

「——で、何があったんだい？」

エルネラはひとしきり青年の胸に頬ずりしてから、名残惜しそうに青年から離れた。

そして、躊躇いがちに話し出した。

「昨日の夜、父上がね……」

「そうか、ジェラルドはおぬしに何も言わなんだか。あやつらしいな」

ミルイヒは国王の彫りの深い厳格な顔を見つめた。茶色の髪に幾本か白いものが混じっている。

国王はベルベットのソファから立ち上がり、紫の外衣の裾を引きずって、接客室の中をゆっくりと歩き回り始めた。

壁には細かな意匠のタペストリが掛けられ、サイドボードには花と金銀の小物が飾られている。その反対側の壁にはがっしりとした煉瓦造りの暖炉があるが、まだ火はおこされておらず、灰もきれいにならされたままである。部屋の中央には大理石の巨大なテーブルが置かれ、その模様に合わせて柄のソファに、ミルイヒは背筋を伸ばして座っていた。

広い部屋には、国王とミルイヒしかいない。

深紅のふかふかの絨毯は国王の足音を吸収したが、つぶやきまで消すことはできなかった。

「まったく、嫌なことを押しつけていきおった……」

国王は密やかにため息をつき、やにわにミルイヒを振り返った。

「この婚約は六年前、おぬしの父親と決めたもの



だ。しかし、その時はジェラルドはたいそう渋ってな」

ミルイヒはその様子が手に取るようにわかった。父は国王に敬意を示さないことはなかったが、否を否と言える人だった。また、国王はその権限をもって無理強いしたりはしなかった。

「わしらは一つの賭けをしたのだ」

ミルイヒは目をしばたかせ、国王の青い瞳を見つめた。いつも自信に満ちているその瞳は、今は揺らいでいる。

「この婚約は当事者が、つまりおぬしとエルネラが成人するまでわしらの胸にしまっておく。だが、成人する前にどちらか片方に想い人ができた場合、この婚約を破棄する、とな」

ミルイヒは驚いた風もなく、平然と聞いていた。

「おそらく、ジェラルドには自信があったのだろうよ」

確かにそうだろう。父はランディとの付き合いを喜んでいる節があった。今思えば、ランディがミルイヒに誰かを引き合わせてくれるだろうとの推測があったに違いない。当ては外れてしまったが。

「陛下、わたしには異論はありません。陛下の御意のままに、わたしはエルネラ殿下と結婚しましょう」

国王は当然のようにならずいた。だが、すぐに目を他へさまよわせた。

「だがな、エルネラはたいそう反発してな。恥ずかしい限りだが、わしはエルネラに弱い。もしエルネラがあまりにも嫌がるようなら、破棄せねばならないやもしれん」

「わかりました。陛下はエルネラ殿下をわたしに振り向かせろとおっしゃるんですね」

「有り体に言えば」

「かしこまりました。それでは失礼致します」

ミルイヒは国王に敬礼すると、接客室を辞した。

ぴかぴかに磨かれた廊下を歩きながら、ミルイヒは奇妙な感情を抱いていた。それはどのようなものか、はっきりとはわからない。心をうずかせ、いつになくそわそわさせる。

国王にああは言ったものの、女性を口説いたことなどない。無論、生まれてこの方、付き合ったこともない——一夜限りを除いて。とても難しいことのように思えた。

しかし、陛下の期待には応えたい。ならば、やはりランディに力を借りねばなるまい。

大広間に通ずる大廊下に出ると、大人三人がようやく抱えられるほどの柱の下で、ランディが腕組みをして待っていた。

「どうだった？」

ミルイヒは深刻な面持ちでランディをじっと見つめた。

「わたしに女性の口説き方を教えてくれ」

ランディは目を丸くした。

「……それで、父上はこうも言ったのよ。わしはあれほど夜会に出ろと言ったのに、聞かなかったおまえが悪い、ってさ。そんなの卑怯よね。『賭け』なんてわたしの知ったことではないわ。夜会なんて大嫌いだし、結婚なんて考えたこともないわ」

黒髪の青年はため息をついた。

陽の残滓が、白亜のベンチに座った二人の影を、大きく引き延ばしている。肌寒い風が吹き始め、庭の木々はざわめいた。

「結婚しないわけにはいかないだろう。特に王族とあっては。君はまだ恵まれていると言っていい。他の国へ嫁ぐわけじゃないんだから」

エルネラは頬を膨らませた。

「仮に結婚するとしてもよ。あんな人は嫌」

青年はため息混じりに微笑んだ。

「君も好き嫌いが多いね」

「わがままだって言いたいんでしょ。わかっているわよ」

「君は婚約者を見たことがあるのかい？ 行事に全く参加しない、深窓の姫君たる君が」

からかい口調である。

「一度だけね」

エルネラは不機嫌な声を出した。

「一度……初お目見えの時よ。わたしを見て、小馬鹿にしたように笑ったのよ、あの人。そして、さっさと姿を消しちゃったわ。不健康そうな青白い顔、ひよろひよろして頼りなさげな身体つきをしてた」

「それだったらわたしだってさして変わらないよ。彼よりも背は低いだろうし」

「あなたのは表面だけよ。頼りなく見えて、内実、随一の剣士じゃないの」

「お褒めにあずかり光栄です」

青年はおどけて最敬礼した。

エルネラはそれを無視して続けた。

「影薄い感じだったわね。武勇伝なんか聞いたことがないわ。事実、侍女の他愛ない噂話にも上らないし」

「何が言いたいの、君は？ 影が薄くとも家柄はいいよ」

「そんなことはどうでもいいわ。わたしは弱い人が嫌いなの。わたしより弱い人なんて問題外！」

青年は困ったように苦笑いした。

「そいつは難しいな。君より強い人はそうそういないかもしれない。なにせ、わたしが手ずから教えているんだから」

そこには幾分の謙遜も含まれてはいない。

「でも、なんであれ、結婚しなくちゃならないよ」

「結婚してないあなたに、そんなこと言う権利はなくてよ」

青年は痛いところを突かれたとばかりに肩をすくめた。

「それを言われるとつらいな。でも、わたしは男だし、末っ子だから、あまり重要じゃない。今さら結婚しても厄介に思われるだけさ」

居座っている方が厄介じゃないかしら、とは思ったが、エルネラの本心は彼に結婚してもらいたくなかったので、思うにとどめた。

「どんな男か確かめてからでも遅くはないと思うよ。第一印象だけで決められては、あんまりというものだ」

「どうせろくでもない男よ。――ディアンだわ」

すっかり暗くなってしまった庭の木陰から、ランタンの明かりがちらちらと見えた。

「暗くなるのが早くなってきたな。さあ、行きなさい。君の侍女はたいそう気をもんでいるはずだ」

青年はエルネラを立ち上がらせ、エルネラが手に

している木剣を取り上げた。エルネラはそれを名残惜しそうに見た。

「明日も来てくれる？」

「たぶん……」

エルネラは振り返りもせず、一目散に明かりが揺れ動いているところへ向かった。

青年はその後ろ姿をじっと見つめ、木陰の中にそれが消えてしまうと、踵を返して反対方向に歩き出した。深緑のチュニックとズボン姿の彼は、闇の中にとけ込むように消えていった。

あとには、秋の虫の鳴き声が虚しく響くのみである。

ランディはため息をついて言ったものだった。

「口説き方と言ってもな、女性にもよるし、一概にこうとは言えないな。おまえ、話したこともないんだろう？ おまえのことだ。どんな人かもわからないんだろう？ 相手のことがわからないとなると難しいな——あいにく、俺も知らない。あまり人前に出ない人らしいからな。こういうのには下調べも必要だ。侍女から話を聞くのがいいだろう。そんな不安そうな顔をするなよ。なに、俺がうまく侍女と接触して聞き出してやるから。一番大事なものはな、相手を不快にさせないことだ。その無愛想な顔はや

めた方がいいぞ。もっとにこやかに。……おい、にこやかとにやけるのは違うぞ。もっと愛想のいい顔はできないのか？ ……ああ、もういい。いつも通り無愛想でいる。そっちの方がマシだ」

ミルイヒはお馴染みの木にもたれかかり、ランディとの昨日のやりとりを思い出していた。そんなにわたしは愛想がないのだろうか？ と、顔を撫でる。

ランディはやけに張り切っている風だった。思えば、恋愛に関する頼み事や相談はこれが初めてだ。

ランディの方からは、そのような話を持ち出すことはない。せいぜいが、付き合っている女性の家柄——どういうわけか、貴族のお嬢さん方やご夫人方にも受けがいいらしい——を聞いてくるくらいのものだ。ミルイヒもランディの恋愛事情——それはかなり華麗にして危険なものであるらしい——には興味がなく、問いただすことも戒めることもなかった。

エルネラ・レイ・アルヴァーノ——いったい、どのような女性なのだろうか？

四年前の記憶を何とか引きずり出そうとしたが、思い出されるのは、一瞬目が合ったあの新緑の瞳だけだった。

ミルイヒは目を細く開け、頭のずっと上の方でち

らちらと日の光に輝く葉っぱを見た。

「秋の陽の落ちるがごとく

草木のしおれるがごとく

君の顔は憂い」

「そして

愛せし人の名を呼ぶ」

ミルイヒは後ろから聞こえた詩に応えた。

顔をあおのかせて見上げると、もたれていた木の後ろから現れた顔があった。凛々しく釣り上がった眉に反して、その黒い瞳は女性のようになまめかしく、厚めの唇はかすかに笑みを浮かべ、白く繊細な顔立ちを包む髪は漆黒だった。

——美男子だ。

ランディもそれに属するが、この男には貴族的な倒錯じみた美しさがある。

「貴殿がミルイヒ・セイデーズ公爵？」

声を出せずにならずくと、黒髪の青年——二十五、六といったところだろう——は、いつのまにかミルイヒの隣に腰を下ろしていた。

若草色のチュニックを着、同じ色のズボンを茶色のブーツの中にたくしこんでいる。

ミルイヒは起き上がり、目をしばたかせた。

——見覚えがある。

だが、この地方では黒髪の者はとても珍しいにも



関わらず、思い出すことができなかった。

「あなたは？」

青年は一瞬目を丸くしたが、すぐに微笑んだ。

「デュー」

ミルイヒはその名を反芻し、小首を傾げた。聞いたことのない名前だ。

青年はミルイヒの疑問に頓着する様子ではなかった。

「エルネラ……殿下と婚約しているそうだね」

ミルイヒははっとして青年を見つめた。もしかして、ランディが言っていたエルネラ信奉者だろうか？

青年はくすくすと笑った。屈託のない無邪気な笑いである。

「そんな怖い顔をしないでくれよ。わたしはなんにも、殿下を賭けて決闘を申し込もうとしているわけじゃない」

見透かされて、ミルイヒはどのような顔をしてよいかわからなかった。

「……」

「貴殿はこの婚約をどう思っているの？」

「どうって……何も——いえ、光栄なことだと思っています」

ランディの言葉を思い出し、言い直した。この男

がエルネラに好意を持っているのは間違いないはずだ。

「本当に？」

好奇に満ちた黒い瞳が、ミルイヒの灰色の瞳をのぞき込んだ。

「殿下とは会ったことがないんだろう？」

ミルイヒは眉をひそめた。この男は何が知りたいたらうか？ 終始微笑みを浮かべている顔からは、何も読みとることはできない。

「だからどうだと言うんです？ 結婚式の日初めて顔を合わせるなんて、珍しいことではないでしょう」

「確かに」

ミルイヒは立ち上がり、白マントの埃をはいた。

「公爵？」

青年はミルイヒの不意の行動に驚いた様子で、つられて立ち上がった。

「そのように呼ばないで下さい。今は一介の騎士に過ぎません。そろそろ勤務に戻ります」

「不快に思ったのなら許してくれ、えーと、ミルイヒ殿」

「いえ、不快には思っていない、デュー卿」

「わたしもそのように呼んでほしくないな」

青年は黒髪を掻き上げ、微笑んだ。

「それでは、デュー殿。失礼します」

ミルイヒは素っ気なく軽く会釈をすると、足早に立ち去りかけた。しかし、青年の涼しげな声が一瞬それを引き留めた。

「わたしはただ、貴殿のことが知りたかっただけだよ。エルネラ……殿下のために」

生ぬるい風が吹き荒れ、木々がざわめき、ミルイヒの金の髪を輝かせながらなぶった。早くも力尽きた葉がはらはらと空に舞い、ミルイヒはその中を颯爽と歩いた。

「おい、これは見込みがあるかもしれん」

ランディはゴブレットを傾けながら言った。

「ほう？」

酔客の罵声や哄笑、給仕女の叫声が上がる中、その大衆酒場の奥まった角の席は、それとは隔離された空間のようであった。ミルイヒとランディは周りの喧噪には慣れていている様子で、静かに話をしている。

彼らの格好といえば、下町の若者たちが着るような、シャツと半ズボンといった簡素なものだった。無論、ランディには馴染んだ格好なのだが、ミルイヒの貴族的な顔にはたいそう似合わない服装であ

る。いかにもお忍びの王子様といった風なのだ。そのことで最初のうちは酔客たちからかわれたものだったが、今は皆、慣れっこで、意識する様子はなかった――ミルイヒの身分を推し量るように見る以外は。

ミルイヒはレモン汁が少々入った水を一口飲んだ。

「どのように？」

「殿下の侍女はディアンと言ってな、それはまた可愛らしい女性だった」

ランディは彼女のことを思い出した様子で、うっとりとした――いや、スケベったらしい顔をしていた。すでにほろ酔い状態でもあり、ほのかに顔を赤らめている。

「貴婦人の繊細な手で大切に育てられた、一輪の白く小さな花。まさしくそれだ。はかなげで、触れるとあっという間に散ってしまいそうな……」

ランディは芝居がかった様子で言う。

ミルイヒは、お馴染みの病気が始まったかとばかりにため息をつき、

「それで、おまえは手折ってしまったのか、その花を？」

「失礼な！」

ランディはゴブレットをドンと木のテーブルに置

いた。その勢いで中に入っていた赤ワインがこぼれ、テーブルに黒い染みを作った。

「いくら俺でも、後宮でそんなことする勇氣はないぞ」

「後宮!？」

ミルイヒは目を丸くした。

「男子禁制だぞ、あそこは！ どうやって入り込んだんだ!？」

ランディは得意げに笑った。

「んっふっふ。秘密」

それから少し真顔に戻って、

「やっぱり、お姫さんを直接見といた方がいいかなあ、と思ったんだ——言っとくが、他意はないぞ。ホントにホント！ だが、それはかなわなかった。仕方なく、当初の予定通り、ディアンから聞き出してきたぞお」

ミルイヒはうなずいて先を促した。前置きが長くてうんざりだ。

「一言で言うと、深窓の姫君だな。ディアンと同じタイプ。疑うことを知らない清純な乙女。こういうのは簡単だ。押し倒してしまえばこっちのもの——あくまで優しくな」

ミルイヒは頭を抱えた。

「おいおい、結婚前に押し倒すわけにはいかんだろ

う」

「なーにをおっしゃる。今日日、結婚前に何かあるのは当然だろ？」

「却下だ。却下、却下！」

ミルイヒは手を振った。

ランディは口を尖らせた。

「おまえは人の好意を無にするのか？」

「好意も何も、好きでやってるくせに。それはともかく、本当に『疑うことを知らない清純な乙女』なのか？ それならすんなり婚約を認めているはずだ。陛下の話では違うようだったぞ。手を焼いているわがまま娘のような……」

「愛しのディアンが嘘をついているとでも？ 何のために？」

ランディは疑いの眼差しを相棒に送った。

「さあな。おまえの働きには感謝している。ご苦労様。あとは自分で何とかするよ」

ランディはうろんな目つきでミルイヒを見ながら、ゴブレットにワインをつぎ足し、小声で言った。

「なあんか、あまり感謝しているようには聞こえないなあ」

## 02.決闘

王城はいつもと変わらぬ優麗と荘厳に満ちていた。

広大な王都の外からさえ見え、旅人の目印ともなっている、王城の白い三つの尖塔。今朝はその尖塔の先に薄く靄がかかっている。ミルイヒは王城への道すがら尖塔を見上げ、一雨来るかもしれないと思った。

馬を厩舎に預けると、勤務先へと向かった。

近衛隊第六班に籍を置くミルイヒの通常勤務は、今のところ、国王の執務室の警備である。それは昼少し前に終わり、昼の休憩をおいたあと、次に練兵が始まる。それで一汗流したら、ミルイヒの王城での一日は終わりとなるのであった。

ミルイヒは王城の中に入ってもうわの空だった。今日こそエルネラと会おうと思っているのだが、どうにも決意しかねている。

国王にああは言ったものの、自信などない。はなから、ミルイヒと会ってもみないうちから、エルネラは拒否している。そんな彼女が、果たして自分と会ってなどくれるのだろうか？

また、彼女は後宮の奥深くに住まい、ほとんどその外に出ることはないという。となると、またして

もランディの協力を乞わなければならない。だが、昨夜、自力で何とかするといった手前、言い出せないことであった。

ミルイヒはため息をつき、その時になって初めて、執務室への通路を通り過ぎていたことに気づいた。

「セイデーズ公爵様」

足早に戻るミルイヒに話しかける男がいた。従者のようである。男はかしこまって手紙を差し出した。

「我が主人、ワイズ伯爵からの書状です」

ミルイヒはその名を聞いてわずかに眉をひそめた。

ミルイヒほどではないにしても、若い伯爵である。たいそうな金持ちらしいと聞く。だが、面識はさほどなく、手紙をもらうようなことはなおさらだった。

不可解ながらも手紙を受け取った。上質の大理石模様の紙、封蝋印はアマリリス。間違いなくワイズ伯爵からのものだ。親指で封を破り、中の紙を取り出して広げた。

ミルイヒは目を見張った。

——挑戦状



貴公、ミルイヒ・セイデーズ公爵殿はエルネラ・レイ・アルヴァーノ殿下と婚約されたとうかがう。聞くとところによると、それは殿下の意の染まぬものであるという。ならば、婚約しているとはいえ、我らの立場は対等であるといえよう。

我、グラディス・ワイズは殿下をお慕い申し上げている。貴公より殿下を幸せにする自信はある。

そこで、貴公が身を引く気がないというのなら、決闘を申し出る。

期日はルシエラの月十日、十七の刻、場所はフォボスの庭。

立会人はエルネラ殿下本人。

貴公の勇気と賢明を信ずる。

グラディス・ワイズ伯爵

と、神経質な字で書かれていた。

――ばかげた話だ。

こんなのは屁理屈に過ぎない。本人たちの意志を無視した婚約など山ほどある。しかも、これは国王自らが決めたことなのだ。どうしてそれに第三者が立ち入ることができよう？

だが、立会人にエルネラということは、彼女はこれを認めたのだ。何やら言いようのない思いが、ミルイヒの心をかすめた。

手紙から目はずすと、従者はすでにいなかった。

ミルイヒはため息をついた。期日は今日の夕方だ。グラディスのところまで行って断る暇はない。否応もなく応じろというのか。

ミルイヒは手紙を懐に入れると、執務室へ急いだ。

「グラディス・ワイズがおもしろいことを言って来たわ」

いつになく楽しそうなエルネラを、黒髪の青年は不思議そうに見た。

「グラディス・ワイズ……誕生会で君にプロポーズした男か？」

「そう。派手好きで悪趣味で鬱陶しいあの男。ミルイヒと決闘するそうよ」

青年の目が丸くなった。だが、黒い瞳には好奇の光が輝いている。

「決闘！ おもしろそうだなあ」

「わたしは立会人になったわ。ふふ、間近で見ることがができる。ミルイヒがどれほどの腕をもっているのか。……ああ、どうせならわたしがミルイヒと決闘したかったわ」

エルネラは本当に残念そうに柳眉をひそめた。

「またそういうことを言う。ミルイヒが負けたらどうするつもりだい？ 決闘は神聖なものだ。いくら君でも、誓いを破るといようなわがままは通らないよ。どちらかと必ず結婚しなきゃならなくなる」

「わかってる。でも、まだ婚約止まりよ」

エルネラは何か考えがあるとでもいう風に微笑んだ。青年はその微笑みの正体がわかったかのようにため息をついた。

「そろそろ十七の刻だわ。あなたはどうするの？」

「もちろん、見に行くさ。こっそりとね」

二人はベンチから立ち上がり、いつもの庭をあとにした。

ミルイヒは決闘になど応じる気はさらさらなかった。だから、断るためにフォボスの庭——別名「決闘の庭」へと向かった。それは王城の敷地の奥まったところにある。

実のところ、騎士間の決闘は禁止されているのだが、今となってはなきに等しいものだった。憲兵たちでさえも見て見ぬ振りをする。決闘は今や、貴族たちのゲームの一つとなりつつある。だから、決闘と小耳に挟めば、誰もがこの「決闘の庭」に集まるのだ。

「決闘の庭」にたどり着いて、ミルイヒは肩を落

とした。ミルイヒとしては事はすべて秘密裏に行うつもりだったのだが、お祭り好きの悪友に口を滑らしたのがまずかったようだ。

決闘の庭は中央をあけて、貴族はもちろんのこと、騎士や侍従、馬丁までもが、広大な庭を埋め尽くさんばかりにごちゃごちゃと集まっていた。中央から遠い者たちは、背伸びをしたり、近くの木に登ったりしている。あちこちで賭けをする声、罵声叫声が上がっている。

これでは断るに断れなくなってしまった。断ろうものならどのような目に遭うかわかったものではない。

決闘の場としてあけられてあるところに、赤と黄色の縞模様の長衣を着、首からは金銀のネックレスを垂らし、両の手指に様々な宝石を身につけた男が現れた。

——グラディス・ワイズだ。

ミルイヒも決闘の場に進み出、グラディスと対峙した。

観客たちは主役の登場にどよめいた。

「こいつは近年まれにみるすごい決闘だな」

「国一番の美姫をかけて、宮廷一の金持ち貴族と貧乏名門貴族との対決！」

「殿下にとってどちらが幸せなのやら……」

ふたりはさらに中央に進み出た。

「ごきげんよう、セイデーズ公爵」

グラディスはふっくらした顔を少し傾げて、愛想良く挨拶した。

「ごきげんよう、ワイズ伯爵」

ミルイヒは無愛想に返した。しかし、ミルイヒの無愛想ぶりは広く知られていることなので、グラディスは気を悪くした風ではなかった。

「いったいどういうことなのですか？」

「手紙に書いてあった通りのことです」

グラディスは目を細めて微笑んだ。貴族特有の、なにか含みのある笑みだ。

「この婚約は陛下がお決めになったことです。それには何人たりとも口出しできません」

「貴公はエルネラ殿下を愛しておられるか？」

ミルイヒは眉をひそめた。

「わたしは……殿下と面識がありません。いえ、そのようなことはどうでもいいことです」

グラディスのお愛想顔が消え、ミルイヒをにらむような目つきになった。

「よくない。わたしは殿下を愛しています。心から！」

「だからといって、殿下もあなたを愛しているというわけではないんでしょう？」

図星だったらしい。グラディスは顔を赤く染めた。

「しかし、殿下を全く愛していない人間よりかはいいでしょう？ 殿下もこの決闘を認めておられる」

「しかし……」

ミルイヒが反駁しようとしたとき、ざわめきがひととき大きくなり、ミルイヒの言葉をうち消した。

人々の波が左右に割れ、侍女を引き連れたエルネラが姿を現した。

エルネラは薄ピンクのドレスを身にまとい、金の髪には何もつけず、風に吹き流されるままにしている。一步一步ゆっくりと歩いてくる。人々に囲まれて、ともすればエルネラは押しつぶされ、はかなく消えてしまいそうだった。

エルネラが決闘の場にたどり着くと、ミルイヒとグラディスは片膝をつき、右手を左肩の下に当てて礼をした。

「おふたりとも立って下さい」

か細い、優しい声で言われて、二人はすぐに立ち上がった。

ミルイヒはエルネラの顔を見て目を見張った。女性の顔とはこうまで変わるものなのか。四年前のそれとはだいぶ大人び、輝きはいや増していた。

新緑の瞳を縁取る金の睫毛が、憂いを含んだよう

に白い頬に影を落とし、薄桃色の紅をはいた小さな唇は、優しい笑みを浮かべている。しかし、どこかしら辞令的な感じのする笑みだ。また、濡れた青葉のような瞳の奥に、そのはかなげな振る舞いと優しい眼差しとは不似合いな、強い意志のきらめきを感じた。

——何かが違う。

しかし、それが何であるのか、突き止めることはできなかった。

ミルイヒはいまだかつてない——いや、前にもあったような気がする、不思議な想いに囚われていた。

「殿下、わたしは代理人を立てます」

グラディスの声でミルイヒは我に返った。

貴族同士の決闘の場合、本人たちが直接戦うようなことはあまりない。昔ならいざ知らず、騎士階級を除く今の貴族たちは、教養程度にしか剣を習っていないし、その身が傷つくことを嫌った。そこで、自らが雇った代理人に代わりに戦ってもらうのである。

エルネラは優雅に微笑みと共にうなずき、幾分冷めた目つきでミルイヒを見た——ようにミルイヒには見えた。

「セイデーズ公爵は？」

「いえ、わたしは自分で」

グラディスは勝ち誇ったように鼻で笑った。

「金がかからなくて良いことですな。——代理人、前へ」

グラディスが指を鳴らすと、群衆の中から背の高い、茶色い髪の男が出てきた。

ミルイヒは目を見開き、その男の名を叫ばずにいられなかった。

「ランディ！」

「よっ」

ランディはさわやかな笑みを浮かべて手を挙げ、堂々と三人のところにやってきた。

観客の中で、ランディとミルイヒを知るものたちは——多くは近衛隊の者たちだったが——ざわめき、事情を知らぬ者たちに口々に話した。

「なぜ、おまえが……」

「どうした？ 青い顔をさらに青くさせて」

たじろいでいるミルイヒを楽しんでいるかのよう  
に、ランディは人の悪い笑みを浮かべた。

「青くならずにいられるか」

「何？ もう負ける気しているのか？」

「……」

ミルイヒは唇を噛んだ。

そこに、グラディスが二人を見比べるようにして



間に入った。

「知り合いなのか……？」

「知り合いもなにも、相思相愛の親友です」

ランディは軽い口調で言っただけ。

「親友だと!? まさか貴殿……！」

グラディスは凄まじい剣幕でランディに詰め寄った。ランディはそれに微笑みで応じた。

「ご心配なく。親友とはいえ、手加減などしません。騎士の名にかけて！」

「しかし……」

グラディスは疑う目つきである。

「あなたはわたしの腕を見込んだ。わたしはその期待に応えるだけの働きをします。騎士の名にかけて」

ランディが真面目な顔できっぱりと言うと、グラディスはたじろぎ、不承不承うなずいた。

「それでは始めましょうか」

エルネラは何事もなかったかのように言った。

ミルイヒとランディは立会人であるエルネラに剣を渡した。剣を持つ手は白くほっそりとしていて、剣の重みに耐えかねぬようだった。エルネラは剣に仕掛けがされてないかをよく調べ、ふたりに返した。

そして、決闘を始める前の恒例の言葉を述べる。

「この決闘はエルネラ・レイ・アルヴァーノの婚約者たるにふさわしい者を決めるものである。

ランディ・フェイス、ミルイヒ・セイデーズ、ここに裁きの神ジェイダに誓え。

一つ、相手を殺さぬこと。

一つ、禍根なきこと。

以上」

本来、決闘とは生死をかけた勝負である。

しかし、戦争がなくなって久しい現在、生死をかけた戦いなど、まったくもって馬鹿らしいこととなった。安穩とした平和の中で、大儀よりも、人命の方が重要となったのである。

——騎士道は地に堕ちた。

かつての栄光も名誉もかすみ、今はただ、陽炎のように地の上をゆらゆらと漂うのみである。

生死と名誉をかけた神聖な決闘は、騎士道のなんたるかを知らぬ者たちの娯楽となって汚された。

ミルイヒとランディが声高らかに宣誓すると、グラディスとエルネラはふたりから離れ、それぞれの従者と侍女が待つところに戻り、いつの間にか用意された簡易椅子に腰を下ろした。

エルネラが始めの合図をすると、二人は剣を鞘走らせた。

歓声がどっと上がった。

「何を考えているんだ、ランディ？」

軽く剣先を合わせて、ミルイヒは小声で訊いた。

「楽しいこと」

ランディはきゅっと唇の両端をつり上げ、その剣先を弾く。

「楽しい？ 馬鹿げたことだ。この婚約はおまえには関係ないはずだろう？」

「ああ、そうだ。だから手加減なんて一切しないで。俺は本気だ。ディアンに格好悪いところは見せたく、ないっ！」

ランディの鋭い突きを、ミルイヒは唇を噛んで受け流す。金属と金属の擦過音が耳に痛い。

「この婚約を破棄にはしたくないだろ？ それなら本気を出すんだ」

「わたしはいつでも本気だ！」

ミルイヒは真横に薙ぎ払った。ランディは後ろに飛んでかわし、剣を構え直してにやりと笑った。ミルイヒはその様子を忌々しく見た。

そうだ、ランディの言う通り、こんなことで婚約を破棄したくはない。陛下と約束したのだから。

だが、わたしはこの男に勝つことができるのだろうか？ 試合では一度も勝ったことのない、この男に。

「ランディ・フェイス……おもしろい男が出てきたものね」

「姫様……」

後ろに控えるディアンが、悲しげな声を出した。

「そんな声出さないで、ディアン。わたしは楽しいのよ、ものすごく。あなたはランディ・フェイスを知っている？」

「お噂はかねがね……。昨日、直接お話しをしました」

「まあ、ディアン！ あんな男に引かかかっては駄目よ。でも、剣の腕が立つことは確かよね」

ディアンは顔を赤らめ、こくりとうなずいた。

「近衛隊で今一番力を付けてきているのは彼らしいわ。ミルイヒは勝つことができるのかしら？」

剣と剣がぶつかる音がエルネラを高揚させていた。だが、貴婦人らしく扇子で顔を覆っているため、紅潮したそれは他の者には見えない。扇子を握る手が汗ばみ始めていた。

あっという間に勝負がつくと思っていたが、ミルイヒは意外とよく戦っている。ランディと比べてだいたい細身の彼は、辛うじてランディの剣を受けているように見えた。

先ほど間近で見たとき、この人は本当に騎士なのかしら、と思った。およそ日の下で生活していると

は思われぬ血色の悪い顔、こけた頬、薄い唇、そして何よりもあの灰色の瞳！ 覇気のない、虚ろな瞳。

しかし、無愛想な顔から受ける冷たさとは別のものを、エルネラは感じていた。この人はわたしに好意を持っている……？ 四年前、誰もがわたしを見ている中、ひとり背を向けたこの人が？

観客のざわめきが変わった。物思いから返ると、状況が一転していた。終始押し気味だったランディが、防戦一方にまわっている。

エルネラは我が目を疑った。先ほどまで躊躇いがちに受けるだけの剣だったミルイヒのそれは、鋭く正確に急所を狙うものとなっていた。また、見事な足捌きであった。じりじりとランディを追いつめていく。

エルネラは華麗とも言えるミルイヒの剣技に魅入られていた。知らぬ間に、彼の一拳一動に目が行っている。滴り落ちる汗のきらめき、空気を求めてあえぐ口、剣を振るう腕、立ち止まることなく動き続ける脚。あの人の方がずっと華麗だし、うまいのに、どうしてこの人の目は離せないのかしら？

これほどの剣技を持つにも関わらず、話題にすら上らなかつたのは妙な話である。しかし、それはなぜかうれしいことのように思えた。こんなにたくさ

んの観客がいなければもっといい。

ついに決着はついた。

観客はどよめいた。

ミルイヒがランディの剣をからめ取ったのである。

「勝負あり！ 勝者、ミルイヒ・セイデーズ」

と、エルネラは立ち上がり、二人がたたずむところへ向かった。なぜか、足取りは軽かった。

「やっぱり……やればできるじゃないか」

ランディは額の汗を拭い、肩で息をしながら言った。

「やっぱり？」

ランディ以上に汗を流し、息も絶え絶えなミルイヒはようやく声を発した。

ランディはにやりと笑い、独り言のように言った。

「推測に過ぎなかったんだが、当たりだったようだな」

ミルイヒはその言葉の意味するところをはかりかねて、眉をひそめた。

「……俺はおまえの本気が見たかったんだ。おまえは剣の才がある。だがおそらく、おまえの自信のなさがそれを抑圧しているんだ。おまえって、いつも

自分に自信がないんだよな」

その言葉を聞いて、ミルイヒは未完成のパズルをようやく完成させたような気分だった。しかし、それは完成させてはならないパズルのように思えた。わたしの自信のなさ——それはたぶん、おまえのせいだ、ランディ。そこにはどこか、悲しみとも恨みともつかぬ暗い想念がある。

ミルイヒは無理矢理それを振り払った。紅潮していた顔が、いくぶん青ざめる。

「いつだって自信なんかないさ……。それがどうして今突然、自信を持つことができるんだ？」

ランディはまたにやりと笑う。

「恋する男の強みというやつさ。本当に俺は本気でやったんだからな」

「恋？」

意外な言葉に、ミルイヒは目を丸くした。

「セイデーズ公爵」

気づくと、エルネラが側までやってきていた。

ミルイヒとランディは片膝をついた。

エルネラはミルイヒの方に寄り、手を伸ばしてミルイヒの顔を上げさせた。

ミルイヒは、エルネラが手を触れている部分に異様な熱さを感じた。急激な火照りが一瞬にして全身を襲う。動揺した。——先ほどの決闘での熱が収

まっていけないのだ……おそらく。

エルネラが、真っ赤になっているであろう自分の顔を間近で見てる。そう思うと、エルネラの顔を直視できず、ぎゅっと目をつぶらなければならなかった。意識すればするほどに、顔が熱くなる。呼吸が乱れる。――先ほどの決闘での疲労が残っているのだ……おそらく。

エルネラはミルイヒの額に軽くキスした。さわやかなレイエンの花の香が、ミルイヒの鼻孔をくすぐり、頭の中をくらくらさせた。

なんなのだろう、これは？ 先ほどから、わたしはいったいどうしたんだ？ ——激しい動揺と動悸を感じた。

「エルネラ殿下！」

グラディスが青ざめた顔でやってきた。

「ワイズ伯爵、ご覧の通りセイデーズ公爵の勝利に終わりましたわ。金輪際、わたしに私的な贈り物をしたり、面会を求めたりしないで下さい。わたしはセイデーズ公爵の婚約者なのですから」

伏し目がちに、戸惑うような声音で言うと、エルネラはグラディスに背を向けた。

「殿下、お待ち下さい！」

泣き出しそうな顔でグラディスはエルネラに追いつがり、そのほっそりとした腕をつかんだ。



エルネラは小さく悲鳴を上げた。その目は怯えに潤んでいる。

「殿下、お慕いしております！ わたしはこんなにもあなたを愛している。それなのに、なぜ、愛してもいない者が婚約者なのですか!?!」

グラディスは無様に取り乱した。必死にその手から逃れようとするエルネラの腕をさらに強くつかみ、抱いて頬ずりせんばかりである。

観客たちは困惑顔でざわめき、近衛隊とおぼしき者たちは決闘場へ進み出ようとした。しかし、それより一步早くミルイヒが動き、グラディスの腕を払ってエルネラから放した。

一足遅れたランディは、驚いたようにミルイヒを見た。

グラディスは一瞬何が起こったかわからない様子だったが、すぐさま非難の目でミルイヒをにらんだ。

「あなたから言い出した決闘はもう終わったのです。わたしの勝利でね。言ったでしょう、愛は関係ないのだと」

エルネラは一瞬、驚いたような顔をした。それから、腕をさすりながら、グラディスに残酷とも言える笑みを向けた。先ほどまでの、聖女のような笑みとは対照的なものだ。ミルイヒは、エルネラの隠れ

た一端を見た気がした。

「そう、愛は関係ないの。本人の意思とは関係ないのよ、この婚約は」

その言葉には明確な意志があった。今までの消え入りそうな声でもなかった。

呆然と立ちつくすグラディスを無視して、エルネラはミルイヒに顔を向けた。ミルイヒはたじろいだ。エルネラは冷たい眼差しでミルイヒを見ている。笑みすら浮かんでいない。

やはり、この方はわたしが嫌いなのだな……。ミルイヒは決闘に勝利したことをひどい罪悪のように感じた。

「セイデーズ公爵、こちらへ」

言い捨てるように言うと、ミルイヒに背を向けて歩き出した。

ミルイヒは動けずに立ちつくしていた。それに気づいたエルネラは、不機嫌な顔つきで振り返った。ミルイヒが自分についてくるのは当たり前という様子である。

「公爵？」

エルネラの不機嫌な顔もよいものだと、ひそめられた形のよい柳眉を眺めていたミルイヒは我に返った。

「は、はい……何かご用ですか？」

エルネラの顔はさらに不機嫌になったように思えた。

「……腕から血が出ています。治療して差し上げますわ」

はっとして、ミルイヒは自分の腕を見た。純白の袖に血がにじんでいる。傷口が開いたのだ。ミルイヒは傷を隠すように、手で覆った。

「いえ、大した傷ではありません。殿下のお手を煩わすだなんて……」

「わたしはあなたの婚約者です。それくらい、させて下さい」

「婚約者」という言葉が不自然に強調されていた。また、有無を言わせぬ口調だった。

「……はい」

ミルイヒはエルネラのあとに従った。

ふたりのやり取りに気づいた者はいなかった。観客たちは決闘の勝負がつくやいなや、決闘の内容を吟味したり、悲喜こもごもに金銭のやり取りをしたり、久々に楽しいものを見れたと足取りも軽く仕事場に帰って行ったりした。一方、グラディスは、従者にもたれかかるようにして、すでにその場を去っていた。

当事者たちのその後の様子に興味を抱く者はいない。――いや、意味ありげな笑みを浮かべるラン

ディと、人目をはばかりの様子黒髪の青年を除いては。

遠雷が鳴った。まもなくしてぽつりぽつりと雨が降り始め、人々は大急ぎで「決闘の庭」をあとにした。

「ちょっと寒くなってきたわね。ディアン、暖炉に火を」

エルネラの侍女、ディアンはすぐさま火をおこす準備をし始めた。

雨で暗くなったため、すでに燭台の火はともされており、ぼんやりと部屋の中を映し出している。

ミルイヒが連れてこられた部屋は、後宮にほど近い控え室のようであった。国王の接客室ほどの規模も装飾もないが、ミルイヒの私室以上のものであることは確かである。

「さあ、腕を出してご覧なさい」

エルネラはミルイヒの向かいの肘掛け椅子に座った。木の目の美しいテーブルには、救急箱が置かれている。

エルネラは救急箱を開き、塗り薬や真新しい包帯を取り出した。ミルイヒは袖をまくり、急いで血に染まった包帯をほどき始める。しかし、片手であるし、血が固まって包帯同士がくっついているので、

うまくいかない。

悪戦苦闘していると、エルネラに腕を取られた。ミルイヒはどきりとした。細くあたたかな指が、自分の腕に触れている……。

「で、殿下……こういうのは、女性には見せられません」

自分の腕を取り戻そうとするミルイヒの言葉を無視して、エルネラは包帯をほどき始めた。

「決闘での傷ではなかったのね。それに、どこが大したことないですって？ ひどい傷だわ。練習か何かで？」

エルネラは眉をひそめて、赤く口を開いている傷を見ている。

「……ええ、まあ」

「あなたにこんな傷を負わせるなんて、相手は相当なものね」

消毒液で傷口を拭き、塗り薬をたっぷり塗ったガーゼをあて、包帯を巻く。なかなか手つきがよい。

手当てが終わると、そっと腕を押し戻された。ようやく腕を取り戻したミルイヒだったが、いまだエルネラの指が触れているような、腕のまわりに妖精でもまとわりついているような、奇妙な錯覚を覚えた。

その頃合いを見計らったかのように、ディアンがやってきて、テーブルに紅茶を置いていった。

「わたしに話があるのでしょうか？」

ミルイヒは驚いてエルネラを見た。

エルネラは紅茶を一口飲み、立ちのぼる湯気から透かし見るようにミルイヒを見ている。

「ないの？ 仮にも婚約者に何か質問はないのかしら？ それともどうでもいい？ わたしは単なる婚約者で、たかが政略結婚の相手で、血脈をつなぐ道具？」

「いえ！」

エルネラのあからさまな物言いに、ミルイヒは戸惑った。

嫌われている？ それはそうだろう。見ず知らずの男と無理矢理結婚させられるのだ——別段、世間一般では珍しくもないことだが。

だいたい、エルネラは自分に対して冷たい感じがする。他の者にはやさしい微笑みを向けるのに。その微笑みは上辺だけのものかもしれないが、どうして自分には向けてくれないのだろうか？ 取り繕うことなく、不機嫌をぶつけてくる。決闘場に現れたときの、はかなげな雰囲気すらかけらもない。

ランディならば、どうやってこういう女性を落とすのだろうか？ と、思いかけて、ランディは気の

強い女性が苦手であることを思い出した。

話をしたかったのは事実である。だが、何を話したらよいのかわからず、紅茶に目を落とした。琥珀色の液体は、燭台の淡い光をわずかに反射させている。

「……」

「どうしたの？ はっきりしないのね。ワイズ伯爵に啖呵を切った、さっきのあなたはどうしたの？」

ミルイヒはその言葉で、先ほどの自分を思い出した。あの時は我にもあらず熱くなっていた。あれはきっと、婚約者たる使命感からだったはずだ。

ミルイヒは目を伏せた。

「……すみません」

エルネラは眉をひそめた。

「なぜ、謝るの？」

「殿下はわたしを愛しておられない。それなのに結婚を……」

エルネラの瞳が揺れ動いた。

「それはあなたも同じでしょう？ 愛してもいないのに結婚するなんて、わたしたちには当たり前のことだわ。ええ、当たり前のことよ。ワイズ伯爵が言っていることがおかしいのよ」

投げやりな言い方である。

「しかし、殿下とわたしとは違います。わたしは

この結婚をけっして拒否しません。ですが、殿下は……」

エルネラはその先を奪った。

「結婚したくなんかないわよ。誰とも」

きっぱりとした口調であるが、どこか悲しげでもある。それから躊躇いがちに付け加えた。

「……あなたはそれを変だと思う？」

ミルイヒは小さく笑みを浮かべた。

「いえ、失礼ながら、殿下は仮面をかぶっておられるようにわたしには見えます」

エルネラはにらむように目を細めた。

「あなたもそうではなくて？」

「わたしが？」

ミルイヒは目を見開いた。それは思ってもみないことだ。

「どのような？」

「冷たい、何もかにもに無関心な仮面。あれだけの剣の技量を持っていて、どこか自分に自信がなさそうなものね」

「仮面じゃありませんよ。わたしはその通りの男です。何にも関心がありませんし、自分に自信もありません」

エルネラは不敵に笑った。

「それじゃあ、あなたは仮面をかぶっていることを



忘れてしまっているのね。でも、わたしにはわかるわ。本当に冷徹で無関心な人を知っているから。その人は自信過剰だけど」

ミルイヒは再び紅茶に目を落とした。ほとんど湯気が出なくなっている。

「殿下はやはり、思った通りの人ですね」

「どのような？」

「おとなしげな面立ちと振る舞いとは裏腹に……」

「粗野でわがまま」

「いえ……ただ、意志の強い方だと」

エルネラは感心したようにうなずいた。

「わかっているじゃないの。父上に何を言われたかは知らないけど、だいたい想像はつくわ。でも、わたしに結婚を認めさせることは絶対に無理ね。特にあなたでは！」

もう話すことはないといった体でエルネラは立ち上がり、ミルイヒをかえりみることなく部屋をあとにした。

一人部屋に取り残されて、ミルイヒは大きく息を吐き出した。何か悪いことでも言ってしまったのだろうか？ エルネラはえらく不機嫌だった。

相手を不快にさせないこと——ランディの助言を守れなかった。このようでは、エルネラが言う通り、結婚を認めさせるなどということは、どこか遠

くの話のように思えた。

エルネラは思わず叫び声を上げるところだった。

「驚かせないでよ！　こんな暗いところからのっそり現れて」

廊下の曲がり角から現れた黒髪の青年は、目をしばたかせた。

「やあ、何を怒っているんだい？」

「怒ってなんかいないわ！」

だが、自分でも心の内の不可解な怒りを感じていた。本当に、わたしはいったい何に怒りを感じているの？

「なかなかの腕前だったじゃないの、彼」

足早に後宮へと向かうエルネラのあとを追いながら、青年は話しかける。

「わたしほどじゃないわ」

「うーん、それはどうかな？」

「やってみればわかるわよ」

「彼は応じないと思うよ。騎士道精神篤そうな男だもの。――ね、話してみてもどんな男だったの？」

「意気地なし」

考えるまもなくその言葉が出ていた。

ミルイヒは馬に拍車を当て、吹きすさぶ風雨や、

蹄が跳ね上げる泥水にも気にならず、ライジェック公爵邸へと急いだ。

エルネラと話をした王宮の一室で、エルネラのことを考えているうちにそのまま寝てしまい、気が付いたらとっぴりと日が暮れていたのだ。今夜、ライジェック公爵の夜会に招待されているにもかかわらず。

招待されたといってもライジェック公爵とは特に親しいわけではなく、社交辞令としてのものである。だが、律儀な彼は招待されれば断ることはほとんどなかった。断るとしても、仕事のことではない。

王城の三つの尖塔の真ん中の塔には、巨大な釣り鐘が付いている。その鐘が重々しい音で鳴り始めた。二十三の刻を知らせている。いつもの彼ならば、夜会から切り上げている時間だ。

最後の鐘が鳴り終わったとき、ミルイヒはライジェック公爵邸にたどり着いた。すぐさま馬を馬丁に預け、屋敷の中へと入る。玄関で召使いにずぶぬれ的外套を渡し、タオルを受け取って髪を拭きながら、案内の従者のあとを追う。

ミルイヒの身長の一・五倍はある、重々しい櫺の扉が開けられた。案内の従者がミルイヒの名を上げ、ミルイヒはいつもの通り会場に入ろうとしたの

だが、その一歩が踏み出せなかった。

——驚きのあまり。

会場内のすべての人が、ミルイヒに注目していた。

先ほどまで談話していただろう紳士淑女、ダンスをしていただろう男女、果ては給仕の者までが、まるで時が止まったかのように動きを止め、楽師が奏でるワルツだけが虚しく流れている。

いつにないことだ。いつもならば、ミルイヒの入退席に人々は道端の石ころほどにも気を止めない。また、ミルイヒとしてもその方が気が楽だった。

たじろぎを顔に表すことなく、恐る恐る会場に足を踏み入れると、時は再び流れ出した。談話していた者たちはミルイヒの方をちらちら見ながら会話に戻り、ダンスをしていた者たちは流れる曲に身を任せ、給仕はそれぞれの仕事に戻った。

ミルイヒは三歩と歩かぬうちにきらびやかなドレスに三方を囲まれ、立ち止まることを余儀なくさせた。

初めてのことに目をしばたかせていると、目の前の黄緑のドレスを着た金髪の女性が、微笑みを浮かべて話しかけてきた。

「ミルイヒ様、聞きましてよ、今日の決闘のこと」

ミルイヒはこの女性の名を思い出すことができない

かった。

夜会に顔を出す貴族の名はたいてい覚えているのだが、顔と一致させることはなかなか難しい。話をしたことがなければなおさらである。

左隣のピンクのドレスの女性も口を開いた。

「あら、わたくしはこの目で見ましてよ」

黄緑のドレスの女性に自慢するように言う。

「剛の剣で知られるランディ・フェイス殿をいとも簡単にあしらわれたのよ。——素敵でしたわ」

「本当に、まるで舞踏のようでしたわ。さぞかしダンスの方もお得意なんでしょうね」

右隣の青いドレスの女性が言った。

「ええ、まあ、たしなみ程度には……」

「わたくしと踊って下さる？」

黄緑とピンクのドレスの女性たちは、抜け駆けされたとばかりに青いドレスの女性をにらんだ。

ミルイヒは心臓が飛び跳ねるのを感じた。「ええ、喜んで」

青いドレスの女性の手を取り、中央へ進み出た。

「おい、聞いたぞ聞いたぞ」

ミルイヒは何も話したくはないという風に、ランディに背を向けて寝返りをうった。湿り気を帯びた芝生がちくちくと頬に当たる。

「眠いんだ。あとにしてくれ」

「お、朝帰りか？」

ランディはミルイヒの不機嫌にもかかわらず、横に腰を下ろしてひやかした。

「婚約してる身でそんなことできるか」

「昨夜のライジェック公爵邸ではすごかったらしいじゃないか。ダンスに引っ張りだこだったとか」

ミルイヒは密かにため息をついた。誰から聞いてきたのか……。ランディの耳は早い。

「なんだ、あれはやはり本当だったんだな。夢かと思っていた」

「おまえがダンスも得意とは知らなかったよ」

「舞踏は剣と通じるところがあるからな。剣舞っていうのがあるくらいだ。だが、わたしだって自分が得意であるなんて知らなかった。いつも同じ人として踊っていなかったから」

ランディは納得したようにうなずいた。

ミルイヒは続けた。

「しかし、皆、現金なものだな。決闘に勝った途端これだ。一度も話したことがない者すら話しかけてくる。わたしは何も変わってはいないのに」

ランディはその最後の言葉に含み笑いをした。

「そういうものさ。人は表面でしか他人を見ない。おまえは特に人を寄せ付けないオーラを発している

からな。……昨日、殿下と何かあったのか？」

ミルイヒはランディをちらりと見、それから再び背を向けた。

「嫌われた……。誰とも結婚したくないんだとさ。——そうそう、おまえが言っていたような人じゃなかったぞ。自分をしっかり持っている方だ。そういうのって何かうらやましく思える。わたしは何かに動かされないと生きていけない」

ランディはため息をついた。

「おまえも……自分の思う通りに動いてみたらどうなんだ？」

「……さあ、自分が何を思っているかなんてわからないよ」

ミルイヒは目を伏せ、そのまま眠りについた。

「何かと話題に上るようになったんじゃないの、彼」

「それがどうしたというの？」

エルネラは汗と埃にまみれた顔をタオルで拭きながら、冷たく言った。

黒髪の青年は髪を掻き上げ、木剣を地面に突き立てて寄りかかった。

「気にならないの？」

「なぜ？」

「好きなんだろう、彼のこと」

エルネラは口をぽかんと開け、タオルを落とした。間をおいて、どきどきと心臓が高鳴るのを感じた。

「な……」

声が出なかった。先ほどの剣の修練の時の熱がよみがえってきたように、顔が火照るのがわかった。

青年はあっけらかんと笑った。

「正直だなあ」

「ど、どうして？ わたし、彼のことなんか……好きだなんて……」

「どうしてわかったかって？ そんなのは君の振る舞いを見れば明白だよ。ワイズ伯爵を始めとするその他の貴族たちには君はやさしすぎるのだもの。やさしい社交辞令の仮面。その下には何の感情もない。けれど、彼には冷たい。何の関心もない風だ」

「その通り。彼には関心を持ってないわ」

エルネラはできるだけ平静を保って言った。だが、嘘だ、と頭の奥で声がある。青年の指摘は正しい。ミルイヒへの自分の感情は好意以上のものだ。しかし、認めたくはない。あんな……

「あんな……自分を偽っているような人なんて」

青年は微笑んだ。

「同族嫌悪ってやつだね」



それには反論できなかった。

「そうね。わたしは彼が嫌いだわ。それ以外の何でもないの」

「はいはい、ひねくれ者のお姫様。無関心と嫌悪はまるで違うけど、好意と嫌悪は表裏一体なんだよ」

エルネラはその言葉を無視し、青年が腰に下げている真剣を奪った。青年はすぐさま奪い返し、口を尖らせた。

「剣士の命に勝手に触れないでほしいな」

「だって、あなた、わたしに練習剣フルーレすら触らせてくれないんですもの」

「何か企んでいるような人に真剣は渡せません」

エルネラが頬を膨らませて再び木剣を手にしたとき、庭の入り口のところからディアンの叫び声が聞こえてきた。

「姫様一、セイデーズ公爵様が面会を求めておいでです！」

昨日、ミルイヒと話をした部屋に入ると、ミルイヒは肘掛け椅子から立ち上がり、会釈した。

エルネラはミルイヒを見た途端、息苦しさを感じた。妙に意識している。あの人があんな事を言うから……。

動揺と顔の火照りを抑えようと、必死に心を落ち

着けようとした。だから、その顔は非常に不機嫌そうに見えた。

「まだ、怒っておいでですか？」

ミルイヒは恐る恐る言った。

「怒ってなんかいないわ」

エルネラは眉をひそめてそのように言いかけたが、

「——いえ、そうね、怒っているわ」

ミルイヒは床に目を落とした。

「何かお気に触るようなことを言ったのならお許し下さい」

エルネラはその言葉を押し量るようにしばらく沈黙した。この人はわたしが何に怒っているのか、わかっているのかしら？

今日のミルイヒの仮面は強固だった。何かを読みとることができない。エルネラの怒りに心痛めているのか、それとも、単なる形式でそのように言ったのか。何もわからないのがもどかしい。

「……まあ、お座りなさい」

二人が椅子に座ると、ディアンが紅茶を運んできた。エルネラはディアンが紅茶の用意を済ませて部屋を立ち去ってから、おもむろに言い出した。

「あなた、わたしのことをどう思っているの？」

言ってしまうってから後悔した。わたしはこの人に

何を望んでいるのかしら？

ミルイヒは突然の質問に驚いたように目をしばたかせた。

「……前に、わたしは殿下を愛していないと言いました。訂正しましょう。わたしは殿下を愛します」

思ってもみない言葉に衝撃を受けたが、エルネラは嘲笑った。

「これから愛する努力をするというの？」

ミルイヒはわずかに首を傾げた。

「努力によって愛が生まれるかはわかりません。けれど、全くないよりはいいのではないのでしょうか」

エルネラは怒りがこみ上げてくるのがわかった。椅子の肘掛けをぎゅっと握った。

「無理しなくていいのよ。あなたもこの婚約に乗り気ではないのでしょうか。だったら破棄すればいいわ！」

ミルイヒはエルネラの語気に気圧されたようだった。

「乗り気でないからといって破棄することはできません。これはそのような問題でないことぐらい、殿下にもわかっておられるはずです」

「そうね。あなたにとっては、傾いている家を立て直すのに必要な婚約ですものね」

ミルイヒの灰色の瞳が暗く淀んだ。何とも言えぬ

哀愁があった。エルネラはその瞳に胸が締めつけられる思いだった。

ミルイヒは目を伏せた。

「わたしは……富が欲しくて結婚したいわけではありません。家のことはどうでもいいことです。わたしは……」

ミルイヒは何かを言いかけたが、すぐに口を閉ざした。

エルネラはミルイヒを見続けることができず、立ち上がって身を翻し、扉に向かった。

それからノブに手をかけ、背を向けたまま、

「あなたなんか嫌いよ」

と、限りなく冷たい声で言い放つと、控え室をあとにした。

エルネラは扉を閉めるとため息をついた。

ミルイヒが富のために結婚を望んでいるのではないことくらいわかっている。そのような人でないくらいわかっている。彼はただ、国王の言葉に従順たらんとしているだけなのだ。それが許せなかった。決闘の前に見せた好意の素振りは嘘だったのか、それとも、自分の思い違いだったのか。

ミルイヒの言動に振り回されている自分に気づき、エルネラは首を振った。わたしはいったい何を考えているのかしら？ わたしは彼が嫌いなはず

よ。彼が何を思っていようとどうだっていいはずよ。それなのになぜ、こんなに胸が苦しいのかしら？

その理由がわからぬエルネラではなかった。だが、認めたくはなかった。

ミルイヒは漆喰の塗られた天井を見上げ、ため息をついた。また怒らせてしまった。昨日怒らせてしまったこと——その理由はいまだわからないが——を謝りに来たというのに。

しかし、自分が結婚するのは富のためだと思われていたのはショックなことだった。お金なんて今さら欲しいとは思わない。自分は国王に従うまでだ。国王がエルネラとの婚約を決めた。そして、結婚を望んでいる。逆らう理由はない。そのようなことは考えたこともない。

だが、ミルイヒの心は揺らいでいた。エルネラがああまで自分のことを嫌っているのに、無理強いするのはどうか？ 彼女の心を考えていなかった。彼女のことを思うなら、この婚約は破棄した方がいい。

「彼女のことを思うなら」——自分は彼女のことをどう思っているのだろう。「愛する」とは言った。結婚したらあかの他人ではないのだから、それ

は当然だろう。しかし、今現在の自分の気持ちは？

ミルイヒはまぶたを閉じかけてすぐに開いた。このままではまた寝てしまう。どうもここは居心地が良すぎる。

廊下に出て、後宮とは反対方向に歩いた。

そろそろ練兵の時間である。練兵場へと向かう道すがら、ランディと出会った。

「おい、捜したぞ」

「何か用か？」

「何かじゃないだろう。第六班は王城周りの警備になったじゃないか」

ミルイヒは目をしばたかせた。

「聞いてない」

ランディはあきれた顔をした。

「殿下に嫌われたのがよっぽどショックだったようだな。——今朝、班長が言ってたじゃないか。切り裂き魔の厳重警戒令が出されたって。それで、練兵の時間も警備にあたるって」

ミルイヒは眉をひそめた。

「切り裂き魔？」

ランディは疑うように半眼になり、恐る恐る訊いた。

「まさか、今話題の切り裂き魔を知らないとは言わないよな？」

「知らない」

ランディはため息をついた。

「もう少し周りに目を向けろよな。――昨今、王都を騒がせている人斬りだよ。貴賤を問わずに手当たり次第に人を殺している。本来、王都のことは王都警備隊の管轄だが、切り裂き魔はかなり腕の立つ者らしい。王都警備隊だけではお手上げなんだとさ。それで我が近衛隊も狩り出されたわけだ」

「ふーん、つゆ知らなかったな。それで、どれくらいの規模なんだ？ 近衛隊が出るくらいだ。かなりのものなんだろう？」

「それが驚いたことに、たった一人らしい」

ミルイヒは我が耳を疑った。

「一人？ たった一人に王都警備隊五千人が手こずっているのか？ 今さら近衛隊五百人が増えたとして大して変わらんだろうに」

「まあそうだろうけど、切り裂き魔は神出鬼没だ。陛下をお守りする我らとしては、がっちりと王城の守りを固めていないと」

ミルイヒはうなずきかけ、小首を傾げた。そして、傷のまだ癒えぬ左腕をさすった。

「……まさか、あれが……まさかな」

「どうかしたのか？」

ミルイヒは何でもないという風に手を振った。

二、三日前、自分を襲った人物が切り裂き魔と同一の者と裏付けるものは何もないし、同一人物だからといってどうということもない。だが、あれだけの技量を持つのなら、王都警備隊が手こずるのもうなずける。

「急ごうぜ。まーた班長に怒られちまう」



### 03.破棄

最後にエルネラと会ってから二週間が経とうとしていた。

近衛隊が王城警備を厳重にしても切り裂き魔はいっこうに捕まらず、二、三日前にまた一人殺された。だが、貴族たちにさほどの危機感を与えているようには思えなかった。毎夜、夜会はどこかの貴族の屋敷で繰り広げられる。だが、ミルイヒはこの二週間、夜会に出席することはなかった。

秋色はいよいよ濃くなり、雲一つない空は高く、草木は色を変え始めた。澄んだ秋風は昼とはいえ肌寒さを帯びている。

ミルイヒはぶるっと身体を震わせて目覚めた。外套を身体に巻き付けていても、外で昼寝をするには寒くなってきた。

「そろそろこんなところで昼寝をするのはやめた方がいいぞ。風邪を引く。まったく、公爵様の姿には見えねえな」

ミルイヒは目をこすり、腕組みをして自分を見下ろしているランディを見上げた。例の、何か企んでいる笑みを浮かべている。

「まだ、落ち込んでいるのか？」

「落ち込んでいる？ 別に落ち込んでいやしない」

ランディはため息をつきながら何度もうなずいた。

「ああ、わかってるさ。おまえは自分をわかってない奴だ。しかし、気づいたときには遅いときもある。それをよーく覚えておくんだな」

ミルイヒは眉をひそめた。この男は時々、訳のわからないことを言う。

「ほれ、愛しの想い人からのラヴ・レターだ」

ランディは懐から手紙を取り出し、無造作にミルイヒに投げ渡した。ミルイヒは慌てて受け取り、ランディをにらんだ。ランディはその様子を面白がるように鼻で笑った。

「そう怖い顔するなよ。なんにもしてないって」

「……わかってる。ディアンだろう？」

ため息をつきながら手紙に目を落とした。羽のような模様が散っている紙に、レイエンの花の封蝋印。封を切り、開くと、レイエンの花の甘酸っぱい香りがふわりと流れ出た。なんだか、せつない気分にさせる香りだ。

手紙を読み終わり、丁寧にたたんで封筒に戻した。それからしばらく封蝋を見つめていたが、意を決したように立ち上がった。

「なんだ、なんの反応もなし？」

ランディは不服そうに口を尖らせた。

「何を期待しているのかわからないが、殿下が望んでおられるんだ」

ランディはため息をついた。

「時には反抗心を持つのもいいもんだぜ？ おまえ、反抗期を知らないだろ？」

ミルイヒはその言葉を無視して歩き出した。殿下が望むなら殿下の望むままに、わたしは決闘するし、婚約を破棄しよう。それでいいんだ。それはどこか投げやりな感情だった。

心の底にわだかまるもやもやが足取りを重くさせていた。知らず手に汗を握っている。明るい日差しにも関わらず、世界が暗くなったように思えた。

「後宮に忍び込むのは結構簡単なんだ。王城内にある五つの庭がすべてつながっていることは意外と知られていない事実だ」

「つながっている？ すべて離れたところにあるじゃないか。接点はないぞ」

ミルイヒはいつもの昼寝の庭を出ようとしてランディに止められ、庭の中央にある噴水に連れてこられた。

「これだ」

ランディは足で指し示した。それは、噴水に水を送っているポンプと下水道があるところへの入り口

だった。鉄でできた入り口の蓋は、ところどころ錆と苔が付いていた。

ミルイヒは眉をひそめ、不審そうにランディを振り返った。

「この中に入るのか？」

ランディは片目をつぶり、不敵に笑った。

「へへ、なかなかの盲点だろう？ おきれいな貴族さん方は入ろうだなんて思いもよらないだろうな」

ランディは鉄の板に埋め込まれている取っ手を持ち上げ、一息に引き上げた。ぽっかりと暗い穴が口を開ける。横の壁に、昇降のための簡易の取っ手が付いている。降りるときに取れたりしないだろうな、とミルイヒは心なしか不安になった。

ランディはミルイヒの不安をよそに、慣れた様子で飛び降りるようにして降りていった。ミルイヒはため息をつき、人目をはばかりのように周りを見回してから、思い切って飛び込んだ。

底について、ミルイヒはあまりの異臭にすぐさま外套で鼻を覆った。辺りを照らす明かりは、今入ってきた入り口からの頼りない光しかない。一歩先は淀んだ細い川が緩やかに流れている。左右に延びる通路の先は真っ暗で何も見えやしない。

「ちょっと待てよ。今、カンテラに火をつけるから」

おそらく、ここに置きっぱなしにしてあるものだろう。ランディは昇降取っ手の脇にしゃがみ込み、カンテラに火をつけ始めた。

「しょっちゅう来ているようだな」

「まあな。けど、入るのはここからだけだ。あとの三つは人目に付くからな」

王城にある五つの庭のうち、ランディの言うところの「昼寝の庭」が一番人気がない。昼寝に最適なのにほとんど人が寄りつかないのはどういうことか、ミルイヒには不思議だった。

ようやく火がともされ、ミルイヒはランディの案内で歩を進めた。

二人のブーツの音が、高らかに下水道内に響き渡る。時折、ネズミと思しきものが足元を走り抜けていく音、天井に付いている水滴が下水に落ちる音がある。通路はほとんど一本道で、分かれていることはあまりなかったが、ランディは迷うことなく進んだ。

「こうやって、幾度となく危ない橋を渡ってきたのだな。おまえが今まで生きてるのが不思議だよ」

ミルイヒはあきれ果てたように言った。

「命に関わるほど危ないことはしてないって。あまり知られていないことだが、俺は堅実派なの。冒険はしない主義なの」

「どうだか」

ミルイヒの聞こえよがしのため息は大きく響き渡った。この分では後宮の半分の女性が餌食になっているに違いない。

「そろそろだぜ。本当にいいんだな？ 覚悟はできてるのか？」

「なんの覚悟だ？」

その問いに、ランディはにやにや笑いを返すだけだった。

エルネラは噴水の縁に腰掛け、いつもの練習着姿で鉄の蓋が開くのをじっと待っていた。

この二週間考えた結果がこれだった。やはりこれしかなかった。

——ミルイヒとの決闘。

これだけが婚約を破棄できる唯一の手段。父王を泣き落とす手もなくはない。だが、それは卑怯な手だ。父王はエルネラの言うことなら何でも聞くのだから。

自らの手でミルイヒに婚約の破棄を言わせたい。忠誠心篤い彼に何を言っても無駄だということはわかった。それならばその騎士道精神を逆手にとってやればいい。

すなわち、決闘だ。

しかし、もしそれに応じなければ？

エルネラは首を振った。――いや、彼はきっと応じる。婦女子に剣を向けることは騎士道精神に反することだが、今はエルネラは騎士だ。剣を持つ騎士なのだ！

エルネラは重みを確かめるように今一度剣を抜き、天にかざした。中天より傾いた太陽が剣先にかかっている。銀の剣身は発光し、白い輝きでエルネラの目を射る。エルネラは目をすがめてその剣身の美しさに見惚れ、慎重に鞘に戻した。

この二週間、必死に剣の修練をした。一朝一夕でどうなるものではないが、何かに打ち込んでいないと心が萎えてしまいそうだった。

――ミルイヒへの想いで。

それが好意であれ、嫌悪であれ、心に迷いを生じさせるには十分なものだった。

正直言って、ミルイヒと自分の技量を比べるなら、ミルイヒの方が間違いなく上だ。相手の技量を正確に推し量れないほど愚かではない。だからこそ、神経を研ぎ澄ませ、無心になる必要がある。そこに一つの活路がある。

鉄の蓋がカタカタと動いた。

エルネラは吹き流しの髪を無造作に一つにまとめて立ち上がり、近くに寄った。

鉄の蓋が開き、まず、ランディの気取った顔が現れた。

「殿下、お連れ致しました」

ランディは首尾よくいったとのウィンクを送ってきた。

エルネラは目を細めて微笑んだ。

「ご苦労様」

ミルイヒは頭上の光に目を細め、手をかざした。下水道の散策はとても長く感じられたが、実際はさほど経ってはいないようだった。

ランディのあとを追って縦穴を上り、ランディの手を借りて外に顔を出すと、目の前にエルネラが立っていた。

いつもの彼女とは違う。腰まである美しい金髪を首の後ろで束ね、薄茶の男物のチュニックを着、編み上げのブーツに少し大きめのズボンの裾をたくしこみ、いささか彼女には長すぎると思える細身剣<sup>レイピア</sup>を佩いている。そのレイピアにはなぜか見覚えがあった。

まさか、殿下自身が決闘するだなんて言わないだろうな。しかし、そうとしか思えない格好だ。

「お久しぶりです」

ミルイヒは会釈した。



エルネラはそれに応えず、いつになく厳しい顔でレイピアをおもむろに抜き、ミルイヒに鞘を投げつけた。

それは古来からある、決闘の申し出の合図だった。

ミルイヒはそれを受け止めた。漆塗りに銀細工を細かくあしらった鞘——ランディの鞘に似ている。ちらりと横目でランディを見ると、丸腰だった。

ミルイヒは密かにため息をついた。何を考えているのやら……。

「まさか、代理人を立てないとは言わないでしょうね？」

「わたし自ら決闘します」

エルネラは有無を言わせぬ口調できっぱりと言った。新緑の瞳が鮮やかに輝く。

「からかわないで下さい」

ミルイヒは鞘を地面に放り投げた。乾いた音を立てて転がる。

「わたしは真面目よ。遊びではなく、きちんと剣を習ったし、毎日の修練も欠かしてはいないわ」

「ミルイヒ、それは本当のことだ」

疑う目つきのミルイヒに、ランディは鞘を拾いながら言った。それから、はにかんで付け加えた。

「……おそらく、な」

「あまり甘く見ないことね。わたしは最高の剣士から習ったのよ」

「しかし、女性に刃を向けることはできません。しかも、王家の方にだなんてなおさらです」

エルネラはレイピアをひゅっと振り、切っ先をミルイヒに向けた。さまにはなっている。

「忘れなさい。わたしは今、騎士だわ」

きゅっと口を引き結び、眉間に一本しわが入った厳しい顔は、普段の彼女にあらぬ峻烈な美しさがあった。はかなさはどこにもない。

ミルイヒはその顔をじっと見つめた。もしかしたら見とれていたのかもしれない。

——これが本来の彼女の姿だ。

「……できません」

エルネラはきつとミルイヒをにらみ、ミルイヒの胸元でレイピアを振るった。ミルイヒは動かなかった——いや、動けなかったのだ。エルネラの気迫がミルイヒを立ち尽くさせた。

ぴっとボタンが一つ弾け飛び、ミルイヒの白い外套は無造作に地面に落ちた。

ミルイヒは息を吐き出すことができなかった。

「……」

エルネラはレイピアの先で落ちた外套をついと拾い上げ、そのまま空に大きく放り上げた。外套は限

りなく青い空にひらと舞い、エルネラの目の前まで落ちてくると、エルネラの鋭い一突きによって串刺された。その切っ先はミルイヒの首を指している。

「わたしと決闘しなさい。これは……」

エルネラは一瞬言い淀み、

「命令よ」

「わかりました」

ミルイヒは目を伏せた。一つ深呼吸をすると腰のレイピアの柄に手をかけ、一気に抜き放った。そして、黒い無地の鞘をエルネラにほうった。

エルネラは喜びをあらわにそれを受け取った。ミルイヒはその様子を苦々しく思った。

「それで、ここで行うんですか？」

ミルイヒは辺りを見回した。

この「後宮の庭」は非常に広いようだった。辺りは一面草木に覆われ、庭と言うより森であった。木々の合間から後宮の建物と思しきものが見えなければ、樹上高くにそびえる三つの尖塔がなければ、ここが王都であるということを疑ってしまう。

だが、なんであれここは後宮なのだ。国王以外の成人男子禁制の場所。そこに二人も男がいることが見つければ、決闘どころの騒ぎではない。

昼日中の噴水のそばでは人も来ようし、剣と剣がぶつかり合う音は、この場所では人がいるところま

で届いてしまいそうだった。

「いえ、もっと奥の方よ。――安心して。ここの人間は庭の入り口付近からそうそう中に入ったりしないわ。薄気味悪がってね。この通り、入り口付近はともかく、荒れ放題だから。この庭は王城にある他の四つの庭を合わせたよりも広いのよ。ずっと昔はこの広大な庭を管理していた庭師がいたらしいんだけど、奇妙な事件が……いえ、そのような話はどうでもいいわね」

エルネラは先に立って、庭の奥深くへと進んでいった。進むごとにいよいよもって森の様相を呈し、辺りは昼間とは思えないほど暗くなった。小鳥や様々な虫の鳴き声が辺りを埋め尽くし、時折、小動物が丈高い草の中を走っていくような音も聞こえた。

「この辺でいいでしょう」

エルネラは、突如ぽっかりとひらけた場所に来て、立ち止まった。

日がさんさんと何にも遮られることなく差し、下生えはさほど生えてはおらず――いや、もとは生えていたのだろうが、踏みにじられて徐々になくなったという感じの、裸の地面が見えている。その端に、白亜のベンチがうち捨てられるようにしてある。

「さて、始めましょうか」

立会人であるランディが、中央に進み出て言った。

エルネラとミルイヒは、ランディにレイピアを渡した。

ランディがレイピアを調べる間、ミルイヒは徐々に心臓が高鳴るのを感じていた。なぜこんなにも落ち着かないのだろうか？ 何を迷っているのだろうか？ 殿下と決闘することか、それとも婚約の破棄か、それとも……。

ミルイヒはすべてを心の外に閉め出そうとした。何も考えるな。しかし、その意思とは裏腹に、ミルイヒの心をかき乱すものがあった。その正体はわからない。だが、心なしかせつなかった。

ランディはふたりにレイピアを返した。

「この決闘はエルネラ・レイ・アルヴァーノとミルイヒ・セイデーズの婚約を破棄するか否かを決めるものである。エルネラ・レイ・アルヴァーノが勝てば破棄、ミルイヒ・セイデーズが勝てば継続となる。

エルネラ・レイ・アルヴァーノ、ミルイヒ・セイデーズ、ここに裁きの神ジェイダに誓え。

一つ、相手に殺さぬこと。

一つ、禍根なきこと。

以上」

ミルイヒは復唱しながら、もう決して後戻りはできないのだと思った。これは絶対の宣誓。これを破ることは騎士の称号を剥奪されるよりも不名誉なこと。

もう迷うな。剣がすべてを決めてくれるはずだ。それが正しい道なのだ。

エルネラとミルイヒはレイピアを構えて向かい合った。

エルネラにはつゆの迷いもなかった。心は夜の湖面のごとく静かだった。

身も心も剣と一体になっていた。修練の時ですえ、これほどの一体感を感じたことはない。

二人は初動の構えのままぴくりとも動かなかった。風が吹いてもその存在を知らぬかのように。張りつめたまま見つめ合い、幾ほどの時が流れただろうか。

ランディは業を煮やし、金のコインを二人の間に空高くほうった。コインは陽光にきらめき、くると回りながら二人が見つめ合う視線の間を通り、乾いた音を立てて地面に落ちるかに見えた。

——その一瞬！

コインが地面にあたった音の代わりに、レ

イピアは鋭い音を立てて重なり合った。

そのあとは凄まじいものだった。

互いに必殺の突きの体勢に持ち込ませぬよう、牽制の突きを次々と繰り返した。しかし、その突きだとして軽いものではない。受け損ねればたちまち致命的なものとなる。突きを繰り返しつつ、相手の隙を見計らう。しかし、今のところ互いに隙はなかった。

エルネラはミルイヒの剣技に辛うじてついていった。ミルイヒの手首の返し、足捌きは想像以上に速く、驚嘆に値する。しかし、エルネラも負けてはいなかった。風に舞う羽毛のごとく柔軟に動き、ミルイヒがこれぞと思う攻撃を受け流し、すり抜けた。

エルネラは早く決着をつけたかった。今、辛うじてミルイヒの剣を受けていることすら驚異に思える。自分がこれほどまでできるとは思ってもみなかった。

しかし、エルネラは女でミルイヒは男であるというどうしようもない事実が、大きな壁となって立ちはだかっている。体力的にはどうやったってエルネラに勝ち目はない。

早く決めなければ！　しかし、その隙はまるでない。

エルネラに徐々に焦りが募り始めた。その焦りが

心・技・体の一体を崩した。その三位一体がエルネラの実力を遺憾なく発揮させていたのに。そして、三位一体の崩れは無駄な動きを生じさせ、体力は急速に奪われていった。

エルネラの額に汗が玉のように浮かんでいた。呼吸は荒々しくなり、剣の切れには精彩がない。

それなのに、どうしてわたしはまだこの人の剣を受けていられるのだろうか？ わたしはこんなにも隙だらけなのに、どうしてこの人は……。

その疑問の答えを探すように、エルネラはミルイヒを見た。

エルネラは驚いた。

ミルイヒの剣にも精彩がなく、舞うような足捌きはすっかりなりを潜めていた。だからこそ、エルネラはその剣を受けることができていたのだ。剣を受けるだけで精一杯で、今まで気づかなかった。突然、どうしたというの？

一つの答えがエルネラの脳裏をかすめた。しかし、それはあってはならないことだし、許せないことだった。

まさか、負ける気でいるの？

エルネラはかっと顔を赤くした。怒りにわなわなと唇が震える。あなたはこの婚約を破棄したいの？ 婚約の破棄はエルネラが望んだことだ。だが、ミル



イヒがそれを望むことは許せない——いや、許さない。絶対に！

いいわ。それなら決着をつけてやる。

エルネラは自暴自棄となり、まっすぐにミルイヒに突っ込んだ。案の定、ミルイヒはそれを好機とは取らず、身を引いた。エルネラはそこへ渾身の突きを入れた。ミルイヒはそれを受けることができなかった——いや、できただろうが、エルネラが思うに受けなかったのだ。

エルネラはミルイヒの胸に切っ先が触れるか触れないかのところで剣を止めた。

「勝負あり。勝者、エルネラ・レイ・アルヴァーノ！」

ランディのよくとおる低い声が、神への荘厳な宣誓のように響き渡った。

エルネラはレイピアをのろのろとした動作で収め、天を仰いで目をつぶった。動きを止めた身体は急激に火照り、それを癒す涼風が心地よかった。

だが、心の瞋恚は癒されなかった。勝ったというのに、婚約は破棄されたというのに、ちっともうれしくなどなかった。

ミルイヒもレイピアを収め、一息つくとエルネラのそばに寄ってきた。エルネラはにらんだ。だが、ミルイヒはそれに気づかぬ様子で握手を求める手を

差し出してきた。

「見事でした」

汗一つない涼しい顔で、ミルイヒは言っていた。  
た。

「……」

エルネラはミルイヒをにらんだまま、勢いよくその手をはたいた。ランディは驚いて目を丸くしたが、ミルイヒはなんの反応も表さなかった。

「もう……もう二度とわたしの前に現れないで」

できるだけ平静に言おうとしたが、うまくいかなかった。その声は怒りに震え、途切れ途切れにしか口から出なかった。

エルネラはさっと踵を返し、走るようにしてその場を去った。

ミルイヒはうなだれ、ため息をついた。エルネラはかなり怒っている様子だった。婚約が破棄できたというのに、何をそんなに憤っているのだろうか？

しかし、彼女の剣技はすばらしかった。女でなければさぞかしすばらしい剣士となり、彼女の兄にして近衛隊隊長であるヴァルアのように、王国の一軍を任せられたらう。

「おい」

声をかけられて振り向くと、不機嫌な顔をした者

がもうひとりいた。

「どうしてこんなバカなことをしたんだ？」

ランディはいつになく真剣な顔をしていた。

「バカなこと？」

ランディは苛立ちもあらわに舌打ちし、脳髓に響くような低い声で言った。

「手を抜いただろう」

ミルイヒは目を丸くし、勢いよく首を振った。

「嘘をつくな！ 最初はともかく、そのあとはどうだ!? まるで初めて剣を握った見習い騎士のようだったぞ！ 型は滅茶苦茶、足はふらふらと定まらない。そのようじゃ近衛にはいられないぞ」

それはいくら何でも誇張が過ぎるのではないか？

ミルイヒは眉をひそめた。

だが、身体が思うように動かなかったのは事実だった。なぜかレイピアがとてつもなく重く感じられ、振るうのがやっとだった。

「わたしは真剣にやった。これがわたしの実力なんだ。殿下の剣技はすばらしかった」

「確かにすばらしかったさ。しかし、俺とやったときのおまえはもっとすばらしかったはずだ」

ミルイヒは力なく首を振った。あれは何かの間違いだったんだ。

「なんであれ、すべてはもう終わった。グラスから

こぼれたワインは元には戻らない」

「そして、絨毯に染みが残る」

「わたしは後悔などしていない。——いいじゃないか。殿下は婚約を嫌がっておられたし、わたしだとて自ら望んだわけじゃない。誰も困ることはない。……まあ、陛下は残念がられるだろうが」

ランディは疑うような目つきでミルイヒを見、それから諦めたようにため息をついた。

「おまえがいろいろ言うならいいさ。今はいい。そのうちわかる。そのうち、な。そして、それを知ったとき、おまえは……」

と、独り言のようにつぶやき、踵を返した。

「そろそろ勤務時間だ。戻るぞ」

その背中が無言の圧力をかけてくるようだった。

ミルイヒは苦々しく唇を噛んだ。何が不満なんだ、ランディ。おまえはいつも肝心なところをはっきり言わない。

——婚約は破棄された。

ミルイヒはそれで憑き物が落ちるような気がしていた。エルネラを初めて見た時に目覚めさせられ、初めて会った時から自分をとらえ続けている想い。その訳のわからぬ、自分を悩ませてやまない想いから解放されるだろうと思っていた。

しかし、それどころか、その想いはいや増した。

抑えようのない、激しく熱い風がミルイヒの心の中に吹き荒れていた。その風は行き場のないまま、ミルイヒを苛ませた。

どうしたらこの風を解放できるのだろうか？

エルネラはいつのまにか庭の中を闇雲に走っていた。視界はかすんでよく見えない。嗚咽しながら走るのは苦しかった。しかし、どこでもいい、どこか遠くへと行きたかった。呼吸にあえぎ、想いにつぶれる——こんな心は張り裂けてしまえばいい！

エルネラは下草に足を取られ、見事に転んだ。そしてそのまま、大の字になって叫ぶように泣いた。今は何も考えたくない。泣き叫ぶわけを。ミルイヒのことを。

ひとしきり泣き叫ぶと、顔を上げた。その顔はひどいものだった。汗と涙と土埃が混ざり合い、金の髪の毛のほつれが顔に張り付いていた。目は真っ赤に充血している。

目の前にはあの忌まわしい決闘の場があった。闇雲に走るうちに一回りしてきたらしい。

エルネラは嗚咽しながらよろよろと立ち上がり、そのひらけた場所に歩を進めた。

こんな時、あの人がいてくれたら……。

黒髪の青年は神出鬼没。気まぐれに現れては何も

告げずに去っていく。だが、たとえいたとしても、青年は本当に慰めてなどくれないだろう。いつも何もかもわかった振りをして、なにかれと手をかけてくれるが、その実、何の関心も持ってはいないのだから。

エルネラはベンチにくずおれるように腰掛けた。涙はまだ止めどなくあふれる。だが、拭いもせずにそのまま流れるに任せた。

空は変わらず青く、涼風はエルネラの髪を乱し、小鳥は何事もなかったかのようにさえずっている。自分がひどく愚かに思え、笑いがこみ上げてきた。

「豪毅な方かと思っていたら、意外とかわいらしいところもお持ちなんですね」

エルネラは突然の声に飛び上がらんばかりに驚いた。振り向くと、そこには人の悪い微笑みを浮かべたランディがたたずんでいた。

ランディはエルネラの顔を見ると、はにかんで肩をすくめた。

「これは失礼。お邪魔するつもりはなかったんです」

ランディは懐からハンカチを取り出し、差し出そうと近寄ったが、

「近寄らないで！」

エルネラの鋭い声に気圧されるように立ち止まっ

た。

エルネラは顔を袖で拭いながらランディをにらんだ。ランディはたじろぎ、無抵抗を示すように両手を上げた。

「別にとって食いはしませんよ。俺にも好みというものがあります。顔だけならあなたは好みなんですがね」

「何の用？」

エルネラはランディの言葉を無視して冷たく言った。ランディは困ったような笑みを浮かべた。

「商売道具を忘れていったものですから」

エルネラは鼻を鳴らし、腰に佩いているレイピアを取り、無造作に投げてやった。それから、もう用はないとばかりに背を向けた。

「もうあんな事はなさらないで下さい」

「決闘のこと？」

「いえ、人の寝込みを襲うことです」

「後宮で女性を襲っている男とは思えない言葉ね」

「しかし、ディアンを使うなんて卑怯です」

「彼女はあなたのものではないのよ。わたしの侍女なんだから」

エルネラは昨日の夜の事を思い出した。ディアンがランディと数日前から付き合っている事は知っていたが、その情事のあとを見るのはショックだっ

た。たとえ、ランディのレイピアを奪って脅迫し、立会人として認めさせるためであっても。

だけど、ランディのあの驚きようたらなかったわ。エルネラは含み笑いした。

ランディは恐る恐る言いだした。

「なぜ……皆を欺いているのですか？ ディアンは殿下のことを、『たおやかで、おやさしい方』と俺に言いました。ワイズ伯爵の決闘の時もあなたはそうのように振る舞っていた。決闘をするにもこのような人気のないところで……」

「それが『お姫様』としての正しい姿だから」

と言って、エルネラは吹き出した。バカげている。

「——なんてね。ディアンにも言ってないことを、あなたに言うと思うの？」

ランディはため息をついた。

「もう、何も言いますまい。——ただ、最後に一つ言わせてください。あまり、ミルイヒを責めないでやって下さい。あいつはあいつで自分の心もわからない、哀れな奴なんです。それから、弄ぶのもやめて下さい。あいつは見た目よりもずっと傷つきやすいんです」

「……」

ランディはエルネラの言葉を待つように、じっと



エルネラの背中を見つめていた。だが、それを得られないと知ると、静かに去っていった。

エルネラは目を伏せた。もうすでに涙は乾き、その跡がくっきりと目尻や頬に残っている。

わたしだって傷ついているわ。そう、傷ついているのよ。でも、どちらかを選ばなければならない…。どちらも選ぶ事なんてできないの。

エルネラとミルイヒの婚約破棄は、二日後には宮中で知らぬ者はほとんどいなかった。だが、その婚約破棄の詳細を知る者は、当事者たち以外にはいなかった。

これは得たりとばかりに、エルネラに求婚を求める貴族たちは引きも切らなかった。しかし、エルネラは後宮から一步も出ることも、その貴族たちに会うこともなかった。

「婚約したままなら静かで良かったのに、どうしてわざわざ破棄するの？」

エルネラが素振りをする姿を眺めながら、黒髪の青年は言った。

「決まってるじゃない。結婚したくないもの」

「本当に良かったのかい？ 彼、他の人と結婚してしまうよ。婚約破棄になった今、引く手はあまただ。ランディ・フェイスとの決闘以来、何かともて

ていると聞くし」

「それが何？ わたしには関係ないわ。ミルイヒが誰と結婚しようと」

青年は肩をすくめた。

「彼が結婚したときが見物だなあ」

その様子を想像するように青年は微笑んだ。

「それはともかく」

突然、青年の顔が陰しくなった。エルネラは驚いて素振りの手を止めた。

「婚約破棄に決闘をしたらどう？」

エルネラは青年の顔を直視できず、あらぬ方を見やり、何かを言おうと唇を何度もなめた。

「それも、わたしがいない時を見計らって」「それは……違うわ。だって、あなたはいつも予告もなく現れるのだもの。見計らうなんて……」

舌が回らない。

「わ、悪かったわ。でも、あなた、わたしに真剣を振るわせてくれないんですもの。いつもこんな木剣で。もうそろそろ真剣を振るわせてくれてもいいんじゃないの？」

青年は何かを考えるような顔でじっとエルネラを見つめ、仕方ないという風にため息をついた。

「真剣を振るって見てどうだった？」

エルネラはほっと胸をなで下ろした。青年はいつ

もやさしく滅多なことでは怒らないが、一度怒れば  
そら恐ろしいのだ。

「そうね。やはり木剣とは重さが違うし、風切り具  
合が違ったわ」

「他には……何か、気分が変わったとか……」

「？ 何も……あ、そういえば、いつもより剣と一  
体になれた感じがしたわ」

「ま、いいだろう。明日から練習剣フルーレを使うことを許  
そう」

エルネラはぱっと顔を輝かせた。

「本当？」

青年は微笑んだ。

「ああ。ミルイヒを打ち負かしたご褒美だ」

その言葉で、エルネラの顔は急に不機嫌になっ  
た。

「どうしたんだい？」

「……彼、手を抜いたのよ」

エルネラは忌々しげにつぶやいた。

「まさか。彼は君のことが好きだったんだらう？」

「そう思ってたけど、わからなくなってしまった  
わ。本当は、そんな素振りを見せてわたしをから  
かったのかもしれない」

エルネラはまた涙がこみ上げてくるのを感じた。  
それは腹立たしいことだったが、自分の意志ではど

うにもならなかった。

「そういう人間には見えなかったなあ。——あんまり君がひねくれた態度をとるからだよ。君の言動を真に受けたんだ。君が嫌がるなら、負けて婚約破棄にした方がいいと思ったんじゃないの？　なんていうか、物事を後ろ向きに考えるタイプだね、彼は」

「でも、決闘なのよ！　神聖なものなのよ。それに自分の感情を持ち込んで、あろうことかわざと負けるなんて！」

エルネラは吐き捨てるように言った。

「それは唾棄すべき行為だけど、いいじゃない。結果的には君の思い通りになったんだからさ」

エルネラは唇を噛んだ。青年の言う通りだが……

「こんな無様な結果をわたしは望んでいなかったわ」

「ミルイヒが勝って、表面上は嫌々だけど、心はうきうきで結婚するのを望んだの？」

エルネラはおもしろがる様子の青年をにらんだが、否定しなかった。それが自分の心の中になかったとはいえない。

けれど、絶対に認めたくはなかった。あんな根性なしを自分が好きであるなんて思いたくもない。いったい彼のどこが好きだというのかしら？　不可解なことである。

自分は迷っていて、決闘でどちらかを選びたかった——いや、選んでもらいたかったのだ。それは一つの賭けだった。それなのに、わざとらしく負けられては決心が鈍るではないか。

「ともかく！ もう彼のことは考えたくも、口に出したくもないわ」

エルネラは剣の素振りに戻った。その風切り音は鋭く、周りの虫たちの鳴き声と競うかのようだった。

青年は微笑んだ。

「はいはい。恋を捨て、結婚も捨て、修道院にでも入るつもり？」

「聞きましたわ。エルネラ様との婚約を破棄なされたんですって？」

ベランダに出て月を見上げるミルイヒに、声をかける貴婦人がいた。

ミルイヒが振り向くと、空色のドレスの裾を軽くつまみ、なまめかしい笑みを浮かべて近づいてきた。亜麻色の髪はきっちりとまとめられ、あらわになった白いうなじが実に色っぽい女性だ。おそらく、ミルイヒより十近く年上だろう。

先日、一緒に踊ったたくさんの女性のうちの一人だ。確か、グレンダール男爵夫人アレーナ。

「踊り疲れましたの？ 憔悴しきった顔をなさって。それとも、婚約破棄に心を痛めておられるのかしら？」

アレーナは小首を傾げて言った。

ミルイヒはアレーナの青い瞳を見つめた。

「わたしはそんなにひどい顔をしてるんですか？ 友人にも言われました。——婚約破棄については何も思ってはいません。殿下がそのように望まれるのならいいんです。……ただ、行き場のない想いがあるんです。どうしたらいいのか……」

ミルイヒは常ならぬせつない顔をした。夜会でははずしたことのない——いや、それだけではなく、親しい者たちだけにしかはずしたことのない鉄仮面がはずれてしまったことに、ミルイヒは気づかなかった。

アレーナは目を細めて微笑み、ミルイヒの頬を、レースの手袋をはめた両の手で包み込んだ。

「おかわいそうな方……」

そしてそのまま、ミルイヒの唇に口づけた。

ミルイヒは一瞬驚いたが、抵抗しなかった。甘くやわらかな唇に、心の中でくすぶっている何かが溶けていくのを感じていた。それは立っていることができないほどの心地良さがあった。

ミルイヒはアレーナの細腰を引き寄せ、肩を抱い

た。あたたかく、やわらかい。今は人肌のぬくもりが欲しかった。それだけがこの想いをどうにかしてくれるにちがいない。ミルイヒはむさぼるように口を吸った。

二人の熱く長い接吻を見ているのは、満天を照らす満月だけだった。ベランダのタイルに落ちているのは、二人が一つとなった影と、時折かさかさ動く落ち葉。壁一つ向こうの、人声のさざめきや舞曲が遠くに聞こえる。

二人はほうっと熱いため息をつき、名残惜しそうに離れた。

アレーナはほんのり紅潮した顔で、妖艶な笑みをミルイヒに向けた。

「意外と情熱的なんですね」

ミルイヒは陶然としていたが、はたと我に返った。

今、自分はいったい何をした？ 男爵夫人と、夫のある方とキスを!? しかも、あのような……。

ミルイヒは目眩がし、顔が急激に火照るのを感じた。

「も、申し訳ありませんっ！ ……あ、あの、なんと申したらっ……」

舌がうまく回らない。消えてしまいたい気分だった。アレーナが戯れにしたであろうキスに、あのよ

うに淫らに応えてしまった。どうにも弁解しようがない。

アリーナは鈴を転がすように笑った。

「そのようにお顔を赤くさって……。こんなにもかわいらしい方だったとは存じませんでした。あら、殿方にかわいいだなんて……。失礼しました」

「いえ……。こちらこそ」

夜風に冷えた手で頬を押さえるが、顔の火照りはまだ収まらない。

その手にアリーナが手を重ねた。ミルイヒはどきりとして、間近にあるアリーナの美しい顔を見た。そして、先ほど塞いだその赤い唇を。

「今夜、主人は帰りませんの。いらして下さる？」

アリーナはミルイヒの耳にささやいた。その吐息がくすぐったく、またしても立ってられないような気分になった。

その意味するところがわからないわけではない。だが、ミルイヒはうなずいていた。



## 04.満たされぬ想い

ミルイヒはカボチャのスープを木匙ですくい取り、優雅にすすった。おいしい。騎士専用食堂のカボチャスープはひと味違う。

彼のここ一ヶ月の昼食は、このスープとパン一切れだった。いつもならば、それを見たランディが、

「なんだ、それっぽっちしか食わないのか？小鳥の餌ほどもないじゃないか。もっと食わないとやっていけないぞ。そのひよろい身体にちっとは肉を付けるよ。ほれ、俺のを分けてやる」

と、いらぬお節介を焼くのだが、幸い今はいない。エルネラとの決闘のあと、田舎で<sup>ラヴィエ式</sup>法事があるとかで一ヶ月の休暇を取ったのだ。

そういえばそろそろ戻ってくる頃だなあ、と思っていたと、噂をすれば何とやらで、ミルイヒの名を呼ばわりながら騒々しくやってきた。

昼食を取るには少し遅い頃合いの食堂は人もまばらだった。ランディはすぐにミルイヒを見つけた。なぜか不機嫌そうな顔で、足早に近づいてくる。ランディの知り合いと思しき騎士が声をかけるが、気づいていないらしく、そのまま通り過ぎた。

ランディはミルイヒの前にやってくると両手で木のテーブルを叩いた。テーブルが悲鳴を上げてきし

み、カボチャスープの容器が一瞬浮き上がった。周りの者たちは驚き、食事の手を止めてふたりを見た。

「おい、どういうことだ？ 俺のお株を奪うつもりか？」

ランディは限りなく冷たく、低い声で言った。

ミルイヒは目をしばたいた。ランディは自分に対して怒っている。それは珍しくはないことだが、顔がこのようにどす黒くなるまで怒るのはついぞない。わたしはいったい何をした？ 思い当たる節はない。

「久しぶりに会ったのに、開口一番何だい？」

ミルイヒは穏やかに言い、カボチャスープをすすった。

「表に出ろ」

ランディは顎で出口を示した。

「話ならここで聞くよ。物騒なことは嫌だ」

ランディは唇を噛んでミルイヒをにらんだ。ミルイヒは意に介さず、再びスープをすすった。

ランディは周りを威圧的に見回した。ふたりの様子を窺っていた者たちは知らぬ振りで見目をそらし、必死に残りの食事をしたたり、急いで食堂をあとにしたりした。

ランディは舌打ちひとつして、ミルイヒの向かい

に乱暴に腰を下ろした。

「この一ヶ月の話を聞いた」

ランディはぶっきらぼうに切り出した。

「ああ、それでお株を奪ったと？ 別にそんなつもりはなかった。わたしから誘った覚えはない。あちらが望んだんだ。わたしはそれに応えただけだ」

「それで、何人と寝た？」

「そんなの覚えちゃいないよ。……そうだな。おまえとは義兄弟になったかもしれないな」

「おまえの冗談なんか聞きたくもない！」

ランディは苛立たしげに言った。

ミルイヒは眉をひそめた。

「何を怒っているんだ？ 言うておくが、ディアンには何もしてないぞ」

「してたらぶち殺してる」

ミルイヒはため息をついた。

「……こういうことはいつもおまえがしていることだろうに。どうしてわたしがおまえに責められなければならないんだ？」

ランディは何かを言い返そうと口を開けて息を吸い込んだが、すぐに口を閉ざし、それから躊躇いがちに言った。

「おまえが人の愛し方を知らないからさ」

ランディはまっすぐな眼差しでミルイヒを見た。

ミルイヒは驚いたようにランディを見た。わたしが人の愛し方を知らないだって？　だが、だからといって何だと言うのだ。

「愛と快楽は必ずしも一致しないと教えてくれたのはおまえだろう？」

ランディは目を見張り、それからおもしろくもなさそうに笑った。

「おまえは優秀な生徒だな。快楽のために寝たのか」

ミルイヒはランディの理不尽な物言いに怒りを感じ始めた。

「彼女たちだって求めるものは同じだろうに」

「そいつは違う」

「どう違うのかわからないな。そういうおまえはどうなんだ？」

「俺？　無論、皆愛しているさ。俺はおまえと違って愛なくして抱くことはできない」

「所詮、遊びじゃないか」

「俺は遊んでいるつもりはない」

ミルイヒは嘲るように鼻で笑った。

「本気でそう思っているなら、おまえは本当におめでたい奴だな。おまえが相手にした貴婦人たちは単なる恋愛ゲームでしかないと思っている。おまえの愛は独りよがりなものさ」

「そんなことはない」

と、つゆもその言葉を疑っていない顔でランディは言う。

ミルイヒはその顔から目をそらし、軽く唇を噛んだ。ランディは、自分は誰からも愛されていると思っている。事実そうなのだが、それを自覚しているところが鼻につく。

「わたしは……わたしなりに彼女たちを愛している」

ミルイヒは消え入りそうな声で言った。本当にそうなのか？

「おまえが彼女らを愛しているというのなら、そいつは偽りだな。最中はよくても、そのあとは虚しいだけだったろう？ おまえには複数の相手を愛するなんて器用なことはできない。おまえの心にはたったひとりしかいないはずだ」

ミルイヒは眉をひそめた。誰のことを言っているんだ？

「おまえは彼女たちを代用してるに過ぎないんだよ。そんなかわいそうな事はやめろ。慰めてもらいたいなら商売女を相手にしろ」

「代用って……誰の代わりだと言うんだ？」

これ以上ないくらい真剣な面持ちのミルイヒを、ランディはじっと見つめ、唇を噛み、不意に顔の緊

張を弛めた。

「……言わなければならないか？」

疲れたような声だった。

ミルイヒはなんと答えて良いかわからなかった。

「……そうだな。ここで言わなければおまえは一生気づかないかもしれない」

ランディはため息をつき、決心したようにミルイヒを見た。

「エルネラ殿下」

その言葉はミルイヒの心の奥底に不思議な響きをもって受け止められた。もしかしたら予期していたのかもしれない。しかし、不可解な感情をも再び巻き起こし、いてもたってもいられない気分になった。心地よいような、泣き叫びたいような、バカみたく笑いたいような、吐き気を催すような、我を忘れて怒鳴り散らしたいような……

——すべての感情がない混ざったような。

しかし、ミルイヒは驚いたように目をしばたかせただけだった。

「わたしがエルネラ殿下を愛している、と？」

ランディはうなずいた。

「どうして……あ、いや……そうだったな……」

ミルイヒは思い出した。

「わたしは殿下に言ったんだ。殿下を愛する、と。」

殿下を愛してみせる、と」

ランディは天を仰ぎ、深いため息をついた。何かを言いかけて首を振り、改めて声を出した。

「……それで、それを聞いた殿下はなんと答えたんだ？」

その声には何かが抑制されていた。

「無理して愛する必要はない、と。乗り気でないなら婚約を破棄すればいい、と。怒った風に言っていた」

ランディはおもむろにテーブルに肘をつき、額に手をあて、肩を震わせて静かに笑った。

ミルイヒはいぶかしんで眉をひそめた。

「おまえのことだ。カボチャスープを頼むように淡々と言ったのだろう。……まあ、それはいいさ。それで、おまえはエルネラ殿下を愛しているんだな？」

ミルイヒはランディの反応を恐れるように小さく首を振った。

「正しくは愛する努力をしていた、だ。今は何も」

すでに婚約は破棄されたのだ。今さら何を思えと  
いうのだ？ もはや一介の臣従に過ぎないのに。

「そうか」

ランディは深いため息をついた。

「もし、エルネラ殿下がおまえのことを……あ、いや——」

と、言いかけて首を一振りし、

「……たまには家に帰れよ。執事さんにまたにらまれちゃったじゃないか」

ランディはそう言い残すと、食堂をあとにした。ミルイヒはその背中を不思議そうに見た。あいつ、わたしの家にわざわざ来ていたのか。本当に物好きな奴だ。

ランディの世話好きには時折辟易させられる。だが、不快なものではなかった。ミルイヒは小さく微笑んだ。自分を思ってくれる存在がこの上もなく頼もしく、愛おしく思う。……本当にかわいい奴。

ミルイヒはカボチャスープの最後の一すくいをすすった。

「家に帰れと言ったのはおまえじゃないか」

ミルイヒは眉をひそめ、ため息をついた。

「別に帰るなどは言ってないだろう？ ちょっとくらい帰るのが遅くなったってかまいやしない。だいたい、おまえんとこの執事は俺の顔を見る度にゴミでも見るような顔をしゃがる。俺が何をしたって言うんだ！」

ランディは言い捨てるのと再びエールをあおった。



お馴染みの居酒屋は今日も人々でにぎわっている。酒の飲めないミルイヒは、ランディとの付き合いでしかここに来ることはない。酔っぱらって騒ぐ者たちを見ると、なんとなくうらやましく思える。

「悪かったな。ヘイデンに伝えておく」

ヘイデンは祖父の代からセイデーズ家に仕えている老執事だ。幼くして母親を亡くしたランディは、彼によって育てられたと言っても過言ではない。ヘイデンはランディを悪友であると見なし、ことあるごとに付き合いをやめるように言うてくる。

「ぼっちゃん——いえ、旦那様、由緒正しい貴族たるセイデーズ公爵が、あのようなどこの骨ともわからぬたわけた者と付き合うなど、言語道断ですぞ。幸い、ぼっちゃん——いえ、旦那様は彼の者の毒気にあてられずに立派に騎士の務めを果たしておられる。しかしですな、周りの者の目もあります。いくらぼっちゃんが立派であっても、その友人があれでは正当に評価されずまい。ああ、おいたわしや。神々の園におわす、お父上、お母上も嘆いていることでしょう」

と、涙ながらに言うのだからたまったものではない。

今夜はいつものように聞き流し、あいまいに相槌を打つことはできないだろう。ここ一ヶ月の噂はへ

イデンの耳に届いていることは間違いない。愛しい旦那様は悪友の毒気についてあてられてしまったのだ。

何を言われるやら。そう思うと、家に帰りたくなくなってしまった。

「しかし、休暇から帰ってきて早々、なぜいきなり飲むんだ？ 十分楽しんできたんじゃないのか？」

「そうでもないぜ。なにせ、一族では俺は嫌われもんで通ってるから」

「日頃の素行が悪いからだ」

「悪いかな……俺は正直に生きてるだけだぜ」

軽く言ったのに、真面目に返されてしまった。ミルイヒは何となくその言葉が心に刺さったような気がした。目を細め、特製のレモン水を一口飲む。

「……なあ、なぜ、わたしがエルネラ殿下を……愛していると思うんだ？」

ランディは上目遣いにミルイヒを見た。大人の反応を見る子供みたいだ。

「なぜって……う……ん、まあいいじゃないか。おまえが殿下を好いてないってんならさ」

珍しく歯切れが悪い。

「別に、嫌いだとは言っていないだろう？ 何とも思っていないというだけで」

「相手にとってはどちらも同じだろ？　——俺、ちょっと深入りしすぎたわ。昼のことは謝る。言い過ぎた」

珍しく殊勝な態度だ。こんな酔い方をする奴だったか？

「深入りって？」

「う……おまえも本当にわからない男だな」

ランディは辟易した様子で言った。

「俺、本来は他人の恋愛については口出ししない主義なの。だけど今回は、おまえがあまりに齒がゆかったし、殿下のあんなところ見てしまって……」

声がだんだん小さくなり、最後の方は聞き取れなかった。ランディは口直しのようにエールを飲んだ。

「ああ、もう、はっきりしない奴だな。何が言いたい？」

ミルイヒは苛立ち、額をこすりつけんばかりにランディに詰め寄った。

ランディは間近にあるミルイヒの顔を見つめ、やにわにその唇に口づけた。

「んん!？」

ミルイヒは驚いて離れようとしたが、ランディに頭を両手でがっちり捕まれていたので逃げることはできなかった。口の中に液体が入り込み、思わず飲

んでしまった。それからようやくミルイヒは解放された。

「ひっく」

しゃっくり一つ、ミルイヒの瞳がとろりと半眼になった。ランディはその様子を固唾を呑んで見守った。

いきなり、ミルイヒの瞳が危険な輝きを帯び、かっと見開かれた。

「なにすんだ、こんちくしょー!!」

ミルイヒは常ならぬ下品な言葉を吐いた。

ランディは繰り出された拳をよけることができず、左頬にもろにくらい、椅子から転げ落ちた。

その音は盛大に酒場中に響き渡った。

酒場は静まり返った。皆、恐れるようにふたりをうかがう。

「お、おい、ランディ、まさかオージサマに酒飲ませたんじゃないだろうな？」

酔いがすっかり醒めた様子で、近くの席に座っていた男が訊いた。

ミルイヒはきっとその男をにらんだ。男は貧相な叫びを上げた。

「やっぱり、そうだ！」

その一声で、酒場にいる者たちはミルイヒとラン

ディのそばからあたふたとできるだけ離れた。

ランディはよろめきながら、ようやく立ち上がった。左頬は腫れ上がり、唇の端が切れて血が流れている。

「いてて……ご挨拶だな。久しぶりだったのに」

ミルイヒは人がよいとは決して言えぬ笑みを浮かべ、赤くなった右手を軽く振った。

「いつから宗旨替えしたんだ、おまえ」

「失礼な。俺はいつでもおとなしい女性が好きさ。——時に、おまえ、エルネラ殿下を好きか？」

ミルイヒは嬉々として即座に答えた。

「もちろん、愛しているとも！ この一ヶ月というもの、なんとわびしかったことか！ 会いたくて、一目でも見たくて……ああ、畜生！ これから行って寝込みを襲ってやる！」

と、狂おしく情熱的に言うと、出口の方にきびきびと向かった。人々はさざ波のように退いて、ミルイヒの通路を作った。

ランディはそのあとを追った。

「この賭け、吉と出るか、凶と出るか……」

密かにつぶやき、ほくそ笑んだ。だが、頬が痛んですぐに顔をしかめた。

「彼もきっとショックが大きかったんだよ。だか

ら、慰めて欲しくて……」

「慰めて欲しくて手当たり次第なわけ!? どっちかっていうと、吹っ切れたんじゃないの? 本当は嫌だったのよ、わたしとの婚約なんて。ランディの奴、なーにが、『あいつは見た目よりもずっと傷つきやすいんです』よ! どうせなら、もっといじめてやればよかったわ」

と、吐き捨てるように言うと、エルネラはワイングラスになみなみと注がれた赤ワインをぐいと一気に飲んだ。それから酌を求めるように、黒髪の青年に空のグラスを向けた。

青年は眉をひそめ、ボトルに残っているワインを、後ろで飛沫を上げている噴水の池に注ぎ捨てた。

「あー!! ちょっと、何すんのよ! ……ああ」

エルネラは腰掛けていた噴水の縁から身を乗り出し、名残惜しそうに見た。

ランタンの頼りない灯と淡い月の光の下、赤い液体は波紋の渦に消えていった。ディアンを目を盗んでやっとな奪ってきたワインだったのに。

エルネラは青年を座った目でにらんだ。しかし、意に介する青年ではない。

「こんな遅くまで付き合った上に、酔っぱらって返したんじゃない、ディアンに顔向けできないよ」

「酔ってなんかいないわ！」

「そうかい。それにしてはよく絡むね。そんなに好きだったの、彼が？」

エルネラはほの赤かい顔をさらに赤くさせた。それから何とも言えぬ、困ったような顔つきをし、うつむいた。

「……ん……そうよ」

エルネラはか細い声で言った。

「ん、何？ 聞こえないな」

青年はエルネラの顔をのぞき込み、意地悪く訊き返した。

「そうよ！ わたしはミルイヒが好きなの！」

エルネラは叫ぶように言った。

その余韻は噴水の音にかき消されたが、エルネラには庭中に響き渡ったように思えて、顔が火照るのを感じた。水が水を打つ音が沈黙をさらに助長させ、ひどく長い間黙っていたような気がし、声を出すのが躊躇われた。

「……認めたくなかった」

ようやく、ぽつりと言った。

「よりによってあんな男を……根性なしで……軽薄で……頼りなさげで……わたしの理想とは対局に位置するわ。けれど、なぜなのかしら？ こんなにせつないのは。あの人の噂を聞く度に……一喜一憂し

て」

青年はため息をつき、エルネラの頭をその胸に引き寄せた。エルネラは声を押し殺して泣いた。

「バカな娘だ。――どうする？ もう一度陛下にお願いして婚約させてもらう？」

エルネラは青年の胸に顔を埋めたまま、青年のチュニツクの裾をぎゅっとつかんだ。

「いくらわたしでもそんなことはできない。もういいの。忘れるわ。忘れることにしたの。だって、わたしには……」

エルネラは肩を小刻みに震わせ、青年を見上げた。新緑の瞳はもはや涙に潤んではない。しかし、泣いているのと同じ顔をしている。

「ねえ……忘れさせてくれない？ あの人のことを」

エルネラは青年の白い頬に手を伸ばした。滑らかな肌触りだが、冷たい。白磁のようだ。小さく息を吸い込み、青年の色気のある唇に顔を近づけた。

「駄目」

青年は厳しい顔で、エルネラの口を手で塞いだ。エルネラは反発して何かを言いかけたが、口を塞がれているのでままたらななかった。

「わたしはいいけれど、君は絶対後悔するよ」

エルネラは青年の手をのけた。



「後悔なんてしないわよ！ わたし、後悔なんて嫌い」

青年はエルネラを無造作に引き離し、立ち上がった。

「それならなおさらだ。――それに、わたしがここにいることさえ、君に剣を教えることさえ、本来はいけないことなんだ。正直言って、これ以上陛下にばれたらどうなるかわからないことはしたくないな」

エルネラはうつむいた。すべては、青年の気まぐれに過ぎない厚意であることはわかっている。それなのに、自分はそれにつけ込んだ。自分が望めば何でもしてくれるに違いないと思いが上がっていた。青年の冷たさはわかっていたはずなのに。

ミルイヒに対する想いは自分でどうにかしなければならぬ。

エルネラは信じていた。いつかきっと忘れる日が来るのだ、と。他にどうすることもできない。今はただ、堪え忍ぶばかりだ。

「さあ、お帰り。わたしにもやらなければならないことがある」

月の光がところどころに射し込み、光と影を幻想的に作り出している木々の間に、青年はまるで人ならぬ者のように、不可思議な世界へ溶け込んでいく

ように見えた。

消えかけた青年に、エルネラは声をかけた。

「あなたには好きな人がいないの？」

青年は肩越しに振り返った。

「わたしが愛するのは、冷たく鋭く、こんな月夜に輝くもの——それはそれは美しいものさ」

青年の瞳は月明かりに妖しくきらめいていた。

気づいたら、下水道を歩いていた。

ミルイヒはカンテラを掲げて辺りを照らした。淀んだ川と薄汚れた石壁が鈍い光を跳ね返す。

「ここは……『後宮の庭』への下水道？」

その声は虚しく響き渡った。

何となく見覚えがあった。しかし、なぜ今ここに立っているのかがわからなかった。できれば二度と来たくはないところだったのに。

必死に記憶を探った。ランディと居酒屋にいたのは覚えている。話をしていて……

「そうだ！ あいつ、わたしにキスしたんだ」

ミルイヒは忌々しそうに唇を拭った。いったい何を考えてあんな事を……。さらに記憶を探った。思い出したくもないキスを思い出し、それから……

「何かを飲んだ。それから……」

額を押さえて考えたが、どうやってもその先が思

い出せない。

舌打ちした。

「酒を飲ませたな」

ミルイヒは酒に弱い。ほんの少し飲んだだけで前後を忘れるほどに酔ってしまう。その時何をしたかなど、覚えていようはずもない。

ミルイヒはため息をつき、来た道を引き返そうとした。しかし、踵を返したものの一步も踏み出せず、立ち尽くしてしまった。

何を迷っているんだ？

「後宮の庭」への道を肩越しに振り返って見る。

ランディは、自分がエルネラを愛しているのだと言った。その自覚はない。しかし、それは本当なのか？ なぜか否定できない自分がある。己の心さえもわからぬ自分が忌々しい。しかし、己の心を悩ませているものの正体がそれだとしたら、はっきりとさせたい。

どうしたらその答えがわかるのだろうか？ エルネラに会ってみるか？ ——と、思いかけてすぐさま首を振った。それは駄目だ。エルネラには二度と目の前に現れぬように言われた。

だが、会わずとも見るだけならどうなのだろう。それならば可能なはずだ。それだけでは到底答えなど出ないような気がするが、きっかけにはなるかも

しれない。

決心して、ミルイヒは「後宮の庭」への道を歩きだした。

ほどなく出口の縦穴にたどり着き、カンテラの灯を消して石畳に置き、昇降取っ手を上っていった。

鉄の蓋をわずかに開けると月明かりが差し込んだきた。眉間にしわを寄せて、目を細める。

水が流れ落ちる噴水の音が盛大に聞こえる意外は何の音もない。

外界の意外な明るさに目が慣れてくると、目だけを出したまま辺りを見回した。

目の前に天高く水を噴き上げている噴水、そしてそこから少し目はずすと……

——人がいた！

ミルイヒは驚いて鉄の蓋を閉めた。慌てていたものでそれは静かなものではなかった。どきどきと心臓が高鳴り、呼吸が乱れる。今の音は聞かれなかっただろうか？

しばらく息をひそめて待機していたが、人が近寄る気配はない。とりあえずほっとして、今度はかなり慎重に蓋を開けた。

もう一度、人がいた場所を確かめる。噴水の縁に二人が腰掛けていた。ミルイヒは目を見開いた。こちらに背を向けているが、彼にはわかった。月光に

きらきらと輝く美しい金髪、やわらかな背中の線、くびれた腰。今日は白いドレスを着ている。

——エルネラ殿下！

そして、エルネラの隣に座り、こちらからは横顔が見える人物——それはいつぞやミルイヒの目の前に現れた、デューと名乗る黒髪的美青年だった！

なぜ彼が？

男子禁制である後宮に？

エルネラ殿下と一緒に？

疑問が頭の中を埋め尽くし、心がハンマーで打たれているかのようなようだった。足ががくがくと震え、危うく足を踏み外しそうになった。

ミルイヒは必死に落ち着きを取り戻そうとした。待て、まだそうとは決まっていはいない。そのように思って首を傾げた。「そう」とは何だ？ この動揺は何なのだ？

二人は何やら話している。しかし、いくら耳を澄まして噴水の音でうち消され、何を言っているのかはわからない。このような行為は紳士にあるまじき事だ。しかし、ミルイヒは確かめずにはいられなかった。

青年はワインを噴水の池に注いだ。血のように赤いワインはあっという間に水の中に消えたようだった。

エルネラは噴水に身を乗り出した。その時、横顔が見えた。月光が水面に反射して、エルネラの顔を光と影の揺れ動くモザイク模様映し出した。白い顔はほんのり赤みを帯びている。相も変わらず美しかったが、心なしか愁寂がある。それに、一ヶ月前と比べてぐんと大人っぽく、色っぽくなった。秋気がなりを潜めているようなのは気のせいかな？ ミルイヒは我を忘れて見とれていた。

エルネラは再び背を向けた。青年が何かを言うとうつむき、しばらくして叫んだ。

「……好きなの！」

その言葉だけがはっきりとミルイヒの耳に突き刺さった。

どくんっと心臓が跳ね上がった。エルネラの痛切な叫びが頭の中でガンガンとこだました。ざわっと総毛立ち、血が逆流した。鉄の蓋をつかんだまま、強くひっかいた。爪が割れ、血がにじむのもかまわず。

ミルイヒの灰色の瞳には薄暗い危険な輝きがあった。ミルイヒは己が恐ろしい嫉妬の念にとらわれたことに気づかなかった。ただただ、エルネラをこの腕に抱きたい、自分のものだけにしたい、という強い願望——欲望があった。

しかし、二人の前に現れるなどということは思い

もよらない。そこまでの理性はまだある。

青年はエルネラを抱き寄せた。その瞳は限りなくやさしいものだ。

ミルイヒは狂おしく黒髪の青年をにらんだ。目で射殺さんばかりに。その役目は本来は自分であるはずだとばかりに。

エルネラは青年の頬に手を触れた。ミルイヒは息を呑んだ。

そして、エルネラは青年の唇に……

ミルイヒは目をそらし、気づかれるのもかまわず荒々しく蓋を閉じた。それから、転げ落ちるようにして縦穴を降り、真っ暗闇の下水道を闇雲に走った。

「あいつ、うまくやってるかな。帰れとは言われたものの、なんとなく不安なんだよな。なんとか、酒が切れる前に押し倒すところまで行けば……。ちょっと酒量が足りなかったかもな。四十度くらいの酒にしとけばよかったなあ。エール程度じゃいくらなんでも……」

と、ランディがぼやき始めた時、不意に鉄の蓋が開いた。ランディは驚いて立ち上がった。

「おいおい、早かったじゃないか。あんまり早いとあきれられるぞ。——って」

ランディは目を見開いた。

「どうしたんだ……？」

ミルイヒはずぶぬれだった。頭からつま先まで泥水にまみれ、うつむいたまま声を発しない。

「……下水に落ちた？ 勇みすぎたか？」

ランディは苦笑いして近寄った。

「このままじゃ、風邪を引く」

ランディは外套を脱ぎ、ミルイヒにかけてやろうとした。だが、ミルイヒはランディの手を乱暴に払いのけた。外套は地面に落ちた。

驚きに呆然とするランディに、ミルイヒはつかみかかった。押し倒さんばかりの勢いだったが、もとより体格が違う。ランディはなんとか堪えた。

「……お、い、何だよ！」

ミルイヒはランディの襟をつかんで首を締め上げた。ランディは苦しげに声を発した。ミルイヒの細い手首をつかんで放そうとするが、びくともしない。

ミルイヒは上目遣いにランディをにらんだ。

それはいまだかつて見たことのないものだった。恐ろしい憎しみが自分に向けられている。ランディは思わず手を放した。

「本当におまえは親切な奴だ。おまえのおかげでわたしは気づいた。気づいてしまった！ エルネラ殿



下を愛しているということをして！　しかし、そんなものは気づかなくて良かったんだ。あのままずっとわたしの中でくすぶっていれば、いつかは消えてしまうものだったんだ」

その声は大きなものではなかったが、はっきりとした口調だった。

ランディは気づいた。ミルイヒが涙を流しているということをして。ずぶぬれなので気づかなかったが、確かに泣いている。

「何があったんだ？　話してみろ」

ミルイヒは勢いよくかぶりを振った。

ランディは渾身の力を込めてミルイヒの手をはずし、

「話してみろよ！」

ミルイヒの頬を軽くはたいた。

すると、ミルイヒは力が抜けたようにへなへなと座り込んだ。下生えをわしづかみ、肩を震わせる。もしかしたら、声を殺して泣いているのかもしれない。

しばらくして、うつむいたまま話し出した。

「殿下は誰とも結婚しないとおっしゃっていた。…  
…心のどこかで安心していただんだ、わたしは。そんなことは出来やしないとわかっているにもかかわらず。殿下の意志の強い瞳を見たら、この方はご自分

のなさりたいようになさる方だと、ご自分の意志を曲げるようなことは許さない方だと思った」

さっきとはうって変わって、感情の欠落した声だった。

「殿下が誰のものにもならないならいいと思ったんだ。それならば、婚約なんて破棄したっていい。嫌われてたってかまわない。……けれど、恋愛をしないとは言わなかったんだ。ただ、結婚しないというだけで。殿下は誰かを愛し、愛される。もちろん、それはわたしじゃない」

声が震えた。

「わたしじゃないんだ！」

ミルイヒは夜のしじまを引き裂くように叫んだ。ランディはその声を聞いてつらくなった。

「殿下はあの男を愛している。きっとわたしと出会うずっと前から。最初から、わたしが立ち入る隙なんてこれっぽっちもなかったんだ」

その声はかすれていた。

ミルイヒはおもしろくもなさそうに肩を震わせて笑う。それはどこか気違いじみていた。

「考えてみれば似合いの二人だ。美男美女で……貧相なわたしなんかよりずっと。——わたしは、単なる道化だ」

「ちょっと待て！ 殿下はな、おまえのことを…

…！」

と、慌てて言いかけたランディの言葉をミルイヒは遮った。

「何も言うな！」

ミルイヒはさっと立ち上がり、濡れた前髪を掻き上げた。あらわになった眼光はいつにない熱を帯びている。金の髪は泥にまみれてくすみ、汚れた顔に張り付いているにもかかわらず、どこか美しさを感じさせる。

ランディは息を呑み、眉をひそめた。

「殿下は……」

「慰めなんて聞きたくもない！ そんな憐れんだ目でわたしを見るな！ おまえにそんな顔をされると虫酸が走る」

ランディは開きかけた口を閉ざし、目をしばたかせた。

「おまえは何事においてもわたしより勝っている。剣を握ればわたしを打ち負かし、同僚や後輩たちには愛され、上官の受けもよく、おまえを愛さぬ女性はいない。誰にも愛されぬ貧相なわたしを見て、さぞかし優越感に浸っていたことだろうよ。だから、なにかれとわたしに手をかける。なんてかわいそうな奴なんだってね。わたしはいつだっておまえに劣等感を抱いていた。劣等感に押しつぶされそうだった

た！」

ランディは唇をきゅっと引き締め、慎重に口を開いた。

「……おまえ、それ、本気で言ってるのか？ それとも、まだ酔っているのか？」

「わたしは素面だ」

きっぱりと言った。

冷たい風が吹き、落ち葉がかさかさと言を立てた。水の柱が出ていない噴水の池は波立ち、その上に落ちた葉がゆらゆらと揺れた。

ランディは鋭く目を細めた。

「そうかい、そうかい。わかりました。公爵閣下。閣下の御意のままに。もう何も口出し致しません」

ランディは最敬礼をすると、外套を拾い上げて「昼寝の庭」を辞した。

## 05.真実と偽りの間で

ミルイヒはふと目覚めた。

鎧戸の隙間から射し込む光はまだ弱々しい。太陽の光ではない。だが、常夜灯の明かりよりも幾分強かった。

ミルイヒは、自分の胸にもたれている薄茶色の髪の毛の女を不思議そうに見た。静かな寝息を立て、その豊かな胸をゆっくりと上下させている。

女にかまわず、寝慣れぬベッドの上で寝返りをうった。女は不服を申し立てるかのようにぶつぶつと寝言を言い、ミルイヒに背を向けた。ミルイヒは広いベッドの中の冷たい部分を求めるかのように、端の方に移動した。

唇を噛んだ。

——空虚だ。

何度抱いても、虚しさはどうしようもなくつきまとう。何度その下に組み敷く女をエルネラに見立てても、どうにも埋められない思いがある。ランディが言ったことの意味が分かった。笑うわけだ。ミルイヒは苦笑した。

ランディのことを思い出して、さらに唇を強く噛んだ。

おとといの晩は言い過ぎた——いや、言っはな

らないことを言ってしまった。どうしてあんな事を言ってしまったのだろうか？ 単なる八つ当たりだ。ひがみだ。

昨日はランディと顔を合わせることができなかった。恐ろしくて。たった一人の親友を失ってしまったという事実と向き合いたくはなかった。

激しい後悔の念に襲われたが、もはやどうすることもできない。ランディは自分を許してくれはしまい。あんなにも親身になってくれたのに、余計なお節介だと言ってしまったのだ。そんなのは嘘だ。本当はうれしくて……。

すべてのことに受け身なミルイヒには、何くれとかまってくれる存在が、何よりも心をあたたくさせ、支えとなるのだった。

ミルイヒはやわらかな掛布を握りしめた。愚かだ。なんて愚かなんだ。激情に身を任せて、心に秘めておくべき事をすべて吐露してしまうだなんて！

すべては自分に非がある。後悔しても、すべては元に戻らない。エルネラとのことも。

エルネラ——どうして、決闘するまでに気づかなかったのだろうか。彼女を愛していると。

あの不可解な感情は愛だった。しかし、それに気づくのが怖かった。恐れていた。だからこそ、不可解なままにしておきたかった。

しかし、今さら何を思っても始まらない。これ以上心を痛めないためには早く忘れるに限る。あれはすべて夢だったのだ。そう思いたい。そうなって欲しい！ でなければ、到底立ち直れそうにもなかった。

ミルイヒはため息をつき、起き上がった。こちらに背を向けたまま寝入っている女をちらりと見やり、ベッドから降りた。そして、素早く服を身につけると、静かに部屋をあとにした。

屋敷をこっそりと抜け出し、あてもなくふらふらと通りを歩き出した。

明かりなど必要のないほどに明るい夜だった。見上げると、冴え冴えとした月が中天にある。赤みがあった大きな満月。強烈な月明かりに星々はかすんで見えない。辺りはしんとして、世界には自分ひとりだけのよう気がする。

ひび割れた舗道には落ち葉がそこそこに積もり、踏むとパリパリと音がする。その音を楽しむように、落ち葉を見つけては踏んだ。

このまま、わたしはどこへ行くのだろうか？

エルネラのことがまたしても心に浮かぶ。うち消してもうち消しても浮かんでくる。そのたびにやるせない気持ちになる。

建ち並ぶ貴族たちの屋敷を眺めながら、通りの角

を曲がろうとしたとき、その角の向こうで甲高い金属音が聞こえた。

ミルイヒは我に返り、角を曲がった。しかし、その時にはすでに音は消えていた。

月明かりの下、血濡れた剣を片手にたたずむ黒衣の男がいる。その足下に体格のよい男がひとり、転がっていた。ぴくりともしない。見る間に地面が赤く染まってきた。

ミルイヒは目を見開いた。

——死んでいる!?

たたずむ男の背中にはなんとなく見覚えがあった。黒い髪が風になびいている。

——切り裂き魔だ!

息を押し殺して剣を抜いた。

そのわずかな鞘ずれの音に反応して、男は素早く振り向いた。

ミルイヒはその顔を見て息を呑んだ。月の光を正面から受けているその端正な顔は、デューと名乗った、あの、今となっては忌々しい黒髪の青年のものだった。

エルネラが愛する青年は切り裂き魔だった!?

衝撃が駆け抜け、切り裂き魔を前にして動くこと



ができなかった。

「貴殿か……」

青年はミルイヒの顔を認めると、安心したような笑みを浮かべた。そして、あろうことかこちらに背を向け、死んでいる男の外套で剣の血を拭い始めた。

——チャンスだ！

しかし、この絶対の好機を目の前にして、ミルイヒは動けなかった。剣を握る手が汗ばむ。

何を迷っているんだ!?

ここでこの男を殺せば、エルネラは悲しむだろう。だが、エルネラの愛を受けるこの男が憎らしい。だが、この男を殺したからといって、エルネラの愛はミルイヒに向けられはしないだろう。それどころか、自分を憎むに違いない。

憎まれる——その考えにミルイヒはうち震えた。それは何の関心も持たれないよりずっといいのではないのか？ エルネラが自分に強い感情を持ってくれる。それが愛であれ、憎しみであれ、何でもいいのだ。自分に関心を持ってくれるのならば。

「何だい？ 妙な顔をして」

ミルイヒは我に返った。青年はすでに血を拭い終え、剣を収めていた。

青年は死体とミルイヒを見比べた。

「そうか、こういうのに出くわしたことがなかったか。貴殿は近衛だったな」

近衛——そうだった。

ミルイヒは目が覚めた。わたしは近衛隊の一員。目の前の男は切り裂き魔。何を迷うことがあろう。エルネラのことはい関係ない。

だが、訊かずにはいられなかった。

ミルイヒは唇を舐めた。

「……殿下は……エルネラ殿下は知っているのですか？」

青年は怪訝な顔をした。

「何を？」

「あなたがこのような……人殺しをしていることです」

「さあて、どうだろう？ 知らないだろうな」

青年は淡々と答えた。

ミルイヒは唇を真一文字に引き締め、剣を青年に向けて構えた。月明かりに白刃が輝く。

青年は驚いたような顔をしたが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。その微笑みはミルイヒにはひどく恐ろしいもののように見えた。

「何のつもり？」

「あなたのような危険な人物に、エルネラ殿下のそばにいてもらいたくない」

青年は微笑みを浮かべたまま、目を細めた。

「危険な人物……そうかもしれないね。そう、わたしはエルネラのそばにいるべきではない。……わかっているさ。この平和な都、誰も彼もが血を望まぬこの国に、わたしの居場所なんてない。しかし、この平和と繁栄は永遠のものじゃないんだ。来る時に備える軍隊は弱体化している。かつては精鋭を誇った近衛隊といえども目を覆うばかりだ。聖騎士の称号すら、名ばかりのものとなりつつある。過去の栄光は過去のもの。いつまで他の国を欺いておけるのやら……。やはり、何かしらの刺激は必要だと思う」

それは独り言じみていた。

「だからといって、切り裂き魔をのさばらせておくわけにはいきません」

「しかし、警告にはなるだろうよ。この国の者たちは平和ぼけが過ぎる」

「剣を抜いて下さい」

ミルイヒは毅然として剣を構え直した。もはや恐れはない。

「貴殿と剣を交えるのは楽しそうだ。しかし、わたしは手加減というものを知らない。この男のようになりたくなければ、剣をひくんだ」

と、青年は死体をつま先で小突いた。

「あなたが勝つとは限らないでしょう」

「いや、勝つさ。ランディ・フェイスとの決闘は見させてもらった。貴殿の技量はわかっている。なかなかのものだが、わたしにはかなわないよ」

「過信は命取りですよ」

「過信じゃないよ。わたしは自分の技量を知っているだけだ。どうやったって、貴殿に勝ち目はない」

青年の漆黒の瞳が冷たく輝いた。ミルイヒは背筋に寒気を感じた。青年には常人にあらぬ、狂気じみた気迫がある。自分と剣を合わせることを拒否しているにもかかわらず、その気迫はどこかそれを否定しているような気がする。

喉の奥がひりつくのを感じた。額に玉のような汗が浮かぶ。知らず、呼吸が荒くなる。必死に気を落ち着けようとしたが、ことごとく失敗した。

青年の、すべてを呑み込んでしまいそうな夜空の瞳は、自分をひどく矮小なものに思わせる。この瞳の前ではまったくの無力だ。叫び出して、一目散に逃げ去りたい。しかし、ミルイヒは見つめることをやめなかった。

青年はため息をつき、ひどくやさしく微笑んだ。

「頑固だな。わたしの目を見ただけで、わたしの技量はわかっただろうに」

青年はミルイヒにゆっくりと近づいてきた。ミル

イヒは金縛りにかかったように動けなかった。空気を求めてあえぐだけだった。冷たい汗がじっとりと流れる。

青年はミルイヒをじっと見つめる。その眼差しがどこか愛しそうなのは気のせいかな？

間近で見る青年の顔は本当に美しかった。

透き通るように白い肌は女のようにきめが細かく、なめらかで、なまめかしい目を縁取る睫毛は長く、月の光を受けて輝いているように見える。

とても同じ人間であるとは思えない。月の夜が見せる、まやかしのようだ。ミルイヒは我を忘れて見とれていた。

青年はミルイヒの剣を握る手に触れ、その手を開かせて鞘に剣を戻した。それから、ミルイヒの両肩を軽く叩いた。

ミルイヒは金縛りが解けたかのように地面にくずおれた。途端、どっと汗が流れ出し、両手をついて肩で激しく息をしなければならなかった。

凄まじい圧迫感から解かれた気分である。

こんな……こんなことってあるのか？ 気迫だけでこうまで……呼吸ができなくなるようなことってあるのか？ その事実を今自ら体験しても、信じることができなかった。

「それじゃ、死体の処理、よろしく」

青年は陽気ともいえる声で言うと、静かに去っていった。月夜の散歩をしている風流な貴族といった趣で。

ミルイヒは去りゆく青年の後ろ姿を見てぶるっと震え、自分の肩をかき抱いた。震えが止まらない。

二ヶ月ほど前に剣を交えたとき、よくぞ生きていたものだ。癒えたはずの左腕がうずいた。

死体を警備隊に引き渡したあと、約一ヶ月ぶりに家に帰り着くと、ヘイデンが恐ろしい顔で待っていた。始終小言を言っていたが、ミルイヒはほとんど聞いていなかった。

あの美しい切り裂き魔のことを考えていたのである。

絶対に野放しにはしておけない。この平和な王都を乱す危険な存在だ。

ミルイヒはため息混じりに首を振った。思ってもいないことを思っている。本当は王都のことなんてどうだっていいのだ。エルネラさえ無事ならいいのだ。

エルネラに傾倒するごとに、国王への絶対的な忠誠が揺らいでいく気分だった。エルネラのためなら、国王へ叛旗を翻すことだってできそうな気がしてくるのだから恐ろしい。

しかし、エルネラは本当に無事なのであろうか？  
今はよくても、手当たり次第の切り裂き魔は、本当にエルネラへその刃を向けることはないのだろうか？

あの切り裂き魔がエルネラを愛しているとは到底思えなかった。切り裂き魔に対するひがみや妬みの感情を引いたとしてもだ。

エルネラに近づく切り裂き魔の狙いはいったい何なのだ？

さっぱりわからない。

どうも、あの切り裂き魔は愉快犯のような気がする。何の目的もなく、自己満足のためだけに人を殺している——そんな気がする。

やはり、エルネラが危険だ。しかし、あの切り裂き魔を退ける自信はまったくない。情けないことだが、あの気迫を思い出すだけでも震えが走る。

どうしたらよいのだろうか？

相談すべき友人はすでにはない。個人の問題でなくすればよいのかもしれないが、事を公にするにはすべてを話さなければならないだろう。当然、後宮へ忍び込んだこともだ。だが、それは口が裂けても言えない。

エルネラにあの青年の正体をばらすか？ だが、エルネラは信じないような気がする。それに、証拠

もない。ミルイヒの言葉より、切り裂き魔である青年の方を信じるに違いあるまい。

だが、エルネラが信じようと信じまいと、言わなければならない。そうしなければ自分の気が収まらない。

ミルイヒの心に、どす黒いものがひとしづく落ちた。最初は小さな染みであったそれは、あっという間に心を浸食し、黒一色に染め上げた。

——息苦しい。

この感情を誰かに吐き出さねばならない。そして、自分と同じように、いや、それ以上に真っ黒に染め上げなければならない。

その思いには、危険な心地よさがある。素面であるというのに、酔っているかのようだ。

愛しい青年が切り裂き魔だと知ったら、エルネラはどんな顔をするだろう？ あの美しい顔がどんな風に歪むだろう？

知らず、笑いがこみ上げてきた。

「姫様、セイデーズ公爵が面会を求めておいでです」

ディアンのその言葉に、エルネラは紅茶のカップを取り落とすところだった。

「なんですって!?!」



信じられぬ面持ちで、私室の入り口に控えるディアンを振り返った。

「いつもの控え室でお待たせしていますが」

エルネラは椅子の背を握り、考え込むようにうつむいた。その顔は青ざめている。

今さら、いったいなんだというの？

——忘れる決心をしたというのに。

なぜ、今さらわたしの前に現れようとするの？

——もう二度と会いたくはない。

なぜ、わたしの心をかき乱そうとするの？

——思い出したくもない。

「あ……会いたくないわ」

その言葉を発するには多大な努力が必要だった。

声が震えている。

わかっている。

——会いたい。

だが、会ったからといって、自分が望むようなことは何もありはしないだろう。あの凍り付いた灰色の目で見られるだけ。自分の想いが空回りするだけ。やるせなくなるくらいなら会わない方がいい。

「……姫様、本当にいいのですか？」

ディアンが気遣わしげに訊いてくる。

エルネラは目をつむり、

「会いたくないの！」

いささか<sup>ヒステリック</sup>躁病的に叫んだ。

「そのようにおっしゃると思いました」

聞こえるはずのない声を聞き、エルネラは驚いて振り向いた。

驚きを乗り越えて青ざめているディアンの後ろに、その声の主は悠然と立っていた。

「……セイデーズ公爵様!? どのようにしてこちらに？」

ミルイヒは近衛隊の隊服のまま、あろうことか後宮に乗り込んできたのだ。それも、後宮の奥深くにあるエルネラの部屋まで。

「失礼ながら、あとをつけさせていただきました、ディアン嬢」

ミルイヒは濃い紅色の絨毯の敷かれたエルネラの部屋に踏み込んだ。

エルネラは半分腰を上げて椅子の背をつかんだまま、動くことができなかった。緑の目は大きく見開かれ、小さな桃色の唇は空気を求めるかのように震えている。

ミルイヒはエルネラの顔を見て、目を細めた。無機質な目をしている。

「そのような顔をせずとも、何もしませんよ。婚約はとうの昔に破棄されました。今や、わたしはあなたの一臣下に過ぎません。許されないことですが、

直接ここに来てしまったご無礼をお許し下さい」

ミルイヒはエルネラのそばに寄ってひざまずき、その手の甲にキスをしようとした。しかし、エルネラはミルイヒの手が触れるやいなや、素早く払いのけた。

ミルイヒはさらに目を細めた。

「言ったはずよ……もう、二度と……会わないって……」

——息苦しい。

声がようやく途切れ途切れに出た。

——熱い。

ミルイヒの手が触れた部分を軽くさする。

心臓の音がやけに耳に響く。

「ええ、私的には。しかし、わたしは一臣下としてやってきたのです。わたしだとして殿下に会いたいわけではありませんでした。しかし、どうしても話さなければならないことがあるのです」

「会いたいわけではない」——その言葉が心に深く突き刺さった。

限りなく冷たい声と瞳。これが仮面であるはずなどない。ミルイヒはいつになく厳しい顔をしている。エルネラは怯えた。

「話さなければならないこと……？」

「ええ」

と、ミルイヒはエルネラの向かいにある、瀟洒な椅子を見やった。

「座っていいですか？」

戸惑うようにエルネラはうなずき、自分も座り直した。

勢い込んで我にもあらず大胆に、何とか無事に乗り込んでみたものの、いざ会ってみると言い出すことができなかった。

黒髪の青年は切り裂き魔である、ということを書いてエルネラの反応を見ても、自分がさらに惨めになるだけではないのか？　ここにきて、ミルイヒは臆病になっていた。

エルネラの部屋はほのかなレイエンの花の香に満ちていた。思ったほど大きな部屋ではない。

薪がくべられた暖炉は赤々と燃え、その上には山の中の溪流が描かれたタペストリが掛けられている。反対の壁には書棚と鏡台がある。意外と簡素な部屋の中央には、二人用の足の細い丸テーブルがあった。

ミルイヒとエルネラは互いに互いを正視できずに、黙してそのテーブルについていた。その上にはディアンが用意していった紅茶があったが、口をつけられないまま、すでに湯気は消えてしまってい

る。

エルネラは乾いた唇を舐め、恐る恐るミルイヒを見た。

「……なんなの、話って？」

その声には何かが抑制されているようだった。

ミルイヒははっと我に返り、エルネラを見つめた。エルネラはわずかに眉間にしわを寄せ、できるだけ目を合わせないようにしている。

そんなにもわたしといるのが嫌なのだろうか？ わたしの顔を見るのも嫌なのだろうか？ わかっているさ。だからこそ、危険を冒して後宮の奥深くまでやってきた。こうでもしなければエルネラとは永久に会えなかっただろう。

ミルイヒは震える唇を噛んだ。

言ってやる……ああ、言ってやる！ 黒髪の青年が切り裂き魔であることを知ってもまだ、自分を無視できるだろうか？

再び、暗い感情がわき上がり、はち切れんばかりに心を満たした。これを抑えつけているのは苦しい。つらい。解放してしまいたい。すべてを吐き出したあと、どれだけ心地よくなれるだろう。

「重要な話なんでしょ？ さっさと話したらどうなの？」

エルネラは目をそらしたまま、苛立ったようなか

すれた声を出した。

ミルイヒは目を細め、唇を舐めた。

早く帰って欲しいというわけか。そうしよう。わたしもあなたがどんな顔をするか、早く見たい。その美しい顔がどんな顔になるのか……。

「……ええ」

ミルイヒは渴いた喉を潤すために、紅茶のカップを取り、一息に飲んだ。ひと呼吸置き、決心して口を開いたとき――

「ひっく」

エルネラは、空のカップをソーサーに戻すミルイヒを、せつない気持ちで見ている。

ついに何かを言おうとしている。「話さなければならぬこと」を話してしまったら、彼はさっさとこの部屋を出て行ってしまふ。

ああ、どうして、それを促すようなことを言ってしまったのだろうか？　しかし、何かを話さなければ、あの重苦しい沈黙に押しつぶされそうだった。

エルネラは恐る恐るミルイヒの瞳を見た。今まで怖くて見ることができなかった。だが、氷の矢で射るようなその瞳を、これが最後とばかりに見ておこうと思ったのだ。

エルネラは息を呑んだ。

これはどうしたことだろう？ ミルイヒはせつない、熱っぽい瞳で自分を見ている。今までこんな目をした彼を見たことがない！ ——いや、一度だけこれに似たようなものを見たことがある。ランディとの決闘の前だ。

あれでわたしは勘違いしたのよね。この人はまたしてもわたしを惑わそうというのかしら？

しかし、それが嘘だろうと本当だろうと、エルネラは目が離せなかった。

ミルイヒは丸テーブルを蹴って払いのけた。丸テーブルは横倒しになり、紅茶のカップとソーサーは絨毯に白い破片と液体を飛び散らせた。しかし、厚い絨毯に吸収されて、その音はさほどのものではなかった。

エルネラはミルイヒのその乱暴ぶりに驚かされ、怖くなったが、それでもまだ目が離せなかった。椅子に縛り付けられたように、身体が動かなかった。

ミルイヒは身を乗り出すと、荒々しくエルネラの腕をつかんで引き寄せた。エルネラは呆然としてされるがままに、絨毯に膝をついていた。

ミルイヒはエルネラを見下ろした。その瞳はエルネラをひどく不安がらせた。いつもの彼ではない。しかし、目を離すことのできぬ不思議な引力を持っていた。

「愛してる」

「!？」

エルネラは目を大きく見開き、息を呑んだ。その半開きになった唇に、ミルイヒは己のそれを吸い付くように重ねてきた。

思いがけぬ事の連続で、エルネラの頭の中は混乱していた。しばらくして、唇を奪われているという驚くべき事実に気づいて抵抗を試みるも、ミルイヒはびくともしない。それどころか、ミルイヒの甘く熱い口づけに力が抜け、袖口をつかんでいるのがやっとの状態になってしまった。そして、いつの間にやら押し倒されていた。

されるがままに、エルネラはミルイヒに身をゆだねた。

ひどく心地よい夢を見ていた気がする。どんな夢かは思い出せないが、すがすがしく、満ち足りた気分だった。最近では珍しいことだ。特に、婚約の破棄からこっちは。

ミルイヒは薄く目を開いた。鎧戸の隙間から光が漏れ、部屋の中をぼんやりと照らし出している。常夜灯はなく、それだけが唯一の光だった。小鳥たちの声が、その光が一日の始まりのそれであることを告げている。



ようやく慣れてきた目に見えるのは見知らぬ白い天井。また、どこかの貴族娘の家だろうか？ ……思い出せない。

右半身に人肌のぬくもりを感じる。あたたかく、気持ちいい。

ふと見やると、薄暗闇に輝く金髪の小さな頭があった。ほのかにレイエンの花の香がする——ミルイヒは寝ぼけ眼をぱっちり開いた。

なんだって!? レイエンの花!?

胸にもたれかかっている女を、起こしてしまわぬよう静かに引き離す。そして、その顔を見るやいなや、青ざめた。

エルネラ殿下……!!

目をこれ以上もないくらい見開いて、健やかな寝息を立てているエルネラの白い顔を見た。間違いなくエルネラだ。

ミルイヒはあえいだ。そんなバカな！ どうして……いったい何が……!?

何も思い出せない。エルネラに、青年が切り裂き魔であるということを話そうとしたところまでしか覚えていない。

男女が一糸まとわぬ姿で並んで寝ているならば、

やはり、それなりのことがあったのは間違いないだろう。

額を押さえて息を整えつつ、起きあがった。そして、掛布だと思っていたのが自分の近衛の外套であることに気づいた。

周りを見回すと、衣類が散乱し、すぐ横に見覚えのある丸テーブルと椅子が転がっている。暖炉の火はほとんど消えかけている。ここはエルネラと向かい合って話をしようとしていた部屋だった。

ため息をついた。最悪だ。床の上でだなんて…  
…。

ミルイヒはのろのろとした動作で服を着始めた。思考は完全に停止している。頭の中は空っぽだった。

最後に外套を取り上げようとしたとき、決定的な証拠を発見してしまった。息を呑んだ。

純白の外套に赤茶色い染みがぽつりとあった。

それはエルネラが純潔だった証。エルネラはまだ誰にも奪われてはいなかったのだ。

ミルイヒは震え、外套を取り落とした。それは元通り、エルネラの上に覆い被さった。それでエルネラを起こしてしまったらしい。うっすらとその新緑の瞳を開けた。ミルイヒは後ずさった。

エルネラは軽く眉をひそめてからぱっちりと目を

開けた。不安な面持ちで見下ろすミルイヒの顔を見つけると、恥ずかしそうにほんのり頬を染めた。

今までに一度も向けられたことのないやさしい顔にどきりとして、思わず抱きしめたくなった。しかし、そのような思いに駆られたことを恥じ、エルネラから目をそらした。

エルネラは片肘をついて、ゆっくりと身を起こそうとした。

「いたっ……」

柳眉をひそめ、己の身体をいたわるように抱きしめた。

ミルイヒは身に覚えのない罪悪感に唇を噛んだ。初めてだというのに、乱暴に抱いてしまったらしい。だが、何一つ覚えていないのが一番もどかしかった。

何と言っていいのかわからない。唾を飲み込み、恐る恐る口を開いた。

「あ……あの、殿下……その……」

声はかすれ、震えていた。言葉が出てこず、あえぐように口を動かすだけだった。

「何も言わなくていいわ」

エルネラはすがすがしい微笑みを浮かべた。今までとは違う、ずいぶん大人びた微笑みだった。

ミルイヒはその笑顔に驚くと同時に不安になっ

た。殿下はわたしを許して下さるというのだろうか？

エルネラは笑みをさっと消し、啞然とするミルイヒを毅然とした瞳でまっすぐに見つめた。何かを決意している目である。

つややかな唇がゆっくりと動く。

「さよなら」

その言葉はずしりと響いた。暗い谷底に突き落とされた気分だ。

「あ……」

声が出なかった。ミルイヒは蒼白になり、大きくあえいだ。許して下さるだなんてとんでもない！これは決して許されない罪だ。ミルイヒはよろめいた。

エルネラはそんなミルイヒを無視し、ミルイヒの外套を身体に巻き付け、よろめきながら続きの部屋へと消えていった。

ミルイヒはひとり、部屋に取り残され、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

## 06.悔悟

朝靄の煙る早朝の下町。

人々が動き出すにはまだ早い時間だった。

ふと気づくと、下町にはやけに不似合いな、かといって貴族的な豪奢さがあるかといえはそうでもない、豪邸の前に立っていた。古いだけを取り柄の自分の家とは違う、当世風の洒落た感じの三階建ての建物を見上げ、門の鉄柵の前でミルイヒはうろついていた。

ミルイヒは難しい顔でため息をついた。ここに来て何をするつもりなんだ、わたしは？ またランディを頼るのか？ 結局のところ、わたしはランディを利用しているのではないのか？ ランディがわたしで優越感を満足させているだなんて……そんなこと、言えたものじゃない。

「あら、もしかして……ミルイヒ？」

その声に驚かされて、周りを見回した。すると、柵越しにこちらに歩いてくる女性が見えた。茶色い髪をきれいに頭の上にまとめた、気の強そうな顔つきをした美人だ。

「お姉さん……」

ミルイヒは気まずい顔で微笑んだ。よりもよって、この人に会ってしまうとは……。

「久しぶりね、うちに来るなんて。……なんだか、見ないうちに男を上げたようね」

と、品定めするように見てから言うと、ランディの姉――シェリーはにやりと笑った。ランディの笑い方とひどく似ている。

その言葉に、ミルイヒははにかんだだけだった。

シェリーは鉄柵の錠を開け、ミルイヒを手招いた。

「あ、いえ、違うんです……わたしはただ……」

ミルイヒは入ることを拒むように手を振った。

「なーに？　うちの愚弟に会いに来たんじゃないの？　それともあたしにプロポーズでも？　それは大歓迎ね」

シェリーはからかうように言った。

ミルイヒは、はにかんでその言葉を流した。

「……あの、ランディはいるんですか？」

「そうね。いても邪魔なだけなんだけど、いるにはいるみたいよ。珍しく」

「そうですか……」

ミルイヒはうつむいた。

シェリーは目をしばたいて、ミルイヒの顔をのぞき込んだ。

「何？　喧嘩でもしてるわけ？」

「ええ、まあ……いいんです。それでは」

ミルイヒは会釈をして、その場をそそくさと去ろうとした。

「ちょっと、待ちなさいよ」

シェリーは背を向けたミルイヒの腕をつかんだ。

「うちの愚弟が何をしたんだか知らないけど、ちょっと上がっていきなさいよ。朝食ぐらい出すよ」

と、シェリーは片目をつぶって笑った。

ミルイヒは少しだけ頬を染め、密かにため息をついた。この人の前では何の隠し事もできない。

「ランディ！ ランディ！」

大声と扉を叩く音に、ランディは不機嫌に目を覚ました。無視してそのまま眠ろうにも、そうさせてはくれなかった。音は徐々に高くなるばかりなのである。

「起きてるんでしょ!? さっさと開けなさいよ！」

堪えきれず、ランディは掛布を蹴飛ばして起きあがった。たまに家に帰ってくるとこれだ。久しぶりにゆっくり寝ているのに、姉の横暴ぶりにはほとんど嫌気が差す。しかし、長年の習性で逆らえはしなかった。

着の身着のまま、ランディは扉を開けた。すると、シェリーはすかさず部屋に押し入ってきた。

「な、なんだよ、姉貴！」

ランディは驚いて後ずさった。シェリーは後ろ手に勢いよく扉を閉めた。

シェリーの顔を見て、ランディは引きつった。眉間に一本しわを入れ、口を真一文字に引き締めている。恐ろしいことが起こる前触れだ。

シェリーは腰に手をあて、厳しい顔で近寄ってきた。ランディは後ずさり、ついには壁に追いつめられた。シェリーは、ランディのあらわになっている胸に指を突きつけた。

「あんた、ミルイヒに何をしたのさっ！」

ランディは戸惑った。

「ミルイヒい？ 何で奴の話が……」

「今来てるのよ。傷心に疲れたような顔をして」

シェリーはため息をついた。

「ああ、可哀想なミルイヒ……。あんたのことよ、ミルイヒにひどいことでも言ったんでしょ？ それとも彼女でも奪ったの？」

ランディは目をしばたいた。

「何で俺がそんなことを……俺は何にも悪くないぞ。傷つけられたのはこっちの方だ！」

「いっぱしの男が、傷つけられたただなんて言うんじゃないよ！」

ランディは気圧されて口をつぐんだ。それから、



恐る恐るシェリーの顔をうかがいながら、口を開いた。

「姉貴には関係ないことだ。これはミルイヒと俺とのことであって……」

その声はいささか力ない。

シェリーは鼻を鳴らした。

「そりゃあね、あんたたちの間に入って、どうこうするようなつもりはないよ」

シェリーはランディをにらむように見た。いつもの癖で、ランディは怯えるように目をそらした。

「あたしはただね、あの子がかわいいだけなの。あの子のいたいけな瞳を見るとダメなのよねえ。何かしてあげたくなっちゃうの」

シェリーはランディの存在を無視して遠くを見つめ、ほうっとため息をついた。

その言葉に、ランディは思わずうなずきかけた。確かに、ミルイヒの頼りない感じはそういう気分させる。よくよく身に覚えのあることだ。

おそらく、ミルイヒと関係を持った女たちもそうだったのだろう。それは本来、鉄仮面の下に隠されているはずだが、取り繕うことができないほどに精神が参っているのだ。

「それで、俺にどうしろと？ 姉貴がなんかしてあげたいなら、してやればいいじゃないか」

シェリーは思い切りランディの素足を踏んだ。

「いって——っ！」

あまりの痛さにランディは涙目になった。

「あんたは友達でしょうが！ あたしじゃどうしようもないの。あたしにはこうやってこうするしかないの！」

追い打ちをかけるように、シェリーはさらに力を込めて踏みにじる。ランディは声なき叫び声をあげた。

「……っかったよ……姉上様……っ」

脂汗を流しながら、ようやくその言葉が出た。

ミルイヒは供された朝食を食べ終えた。自分の家の朝食よりはるかに豪華なもので、少し食べ過ぎた感がある。食後のお茶を飲み、ため息をついた。殿下にあんなひどいことをしても、いつものようにお腹は減るものなのだな……。

フェイス家の食堂は広い。そこにたったひとりであるものだから、さらに広く感じられた。しかし、庶民的なあたたかみがある。フェイス家の家族団欒の光景が目に浮かぶようで、ミルイヒはせつない気分になった。

ミルイヒの家——セイデーズ家の食卓はいつもひんやりとしている。

両親が生きていたときは、常に言いしれぬ緊張感が漂っていたし、両親とも亡くなり、ミルイヒが公爵となってからは、たったひとりで食事をとっている。執事のヘイデンは、いくらミルイヒが相伴をお願いしても、決して首を縦に振ることはない。主従の間ははっきりさせておかねばなりません、とかなんとか、堅苦しいことを述べるのだ。そんな風であるから、人恋しさに、士官食堂で食事を取りがちになる。

後ろで、人が入ってくる気配がした。ミルイヒは緊張した。おそらくランディだ。

寝起きの格好のランディは何も言わず、長テーブルの一番端の席に着いた。ミルイヒから一番離れている席である。

ミルイヒは恐る恐る、首を動かさずに目だけをランディに向けた。ランディは無表情で、まっすぐに壁を見つめているようだった。何を考えているのかはさっぱり読みとれない。まだ、怒っているのだろうか？ 当然そうだろうな……。

ミルイヒはテーブルクロスをぎゅっとつかんだ。何か言わなければ……しかし、何を言っているかわからない。

唇を噛んだ。なぜ、何も言えないんだ？ ただ一言、謝ればいいだけの話じゃないか。それだけのこ

となのに、死んだ貝のように口が動かない。わたしは何を恐れているんだ？ もはや失うものなんて何もないのに……。

沈黙と苦悩のうちに時が流れていくと思われたとき、それをうち破ったのはランディの方だった。

「……気づかない方がよかったか？」

「え？」

ミルイヒは驚いて、ランディを振り返った。

ランディは壁の方を見つめたままである。いや、壁を見ているのではなく、その向こうを透かし見ているかのようだ。

しばらくして、躊躇うように再び口を開いた。

「おまえが俺にあんなこと言うのは、初めてだったな……。結構長い付き合いだけど、喧嘩なんて今が初めてじゃないけど」

そこはかたなく、うれしさがにじんんでいる口調である。

ミルイヒは目を見開き、ランディを見つめた。まだ、こちらを向かない。

「初めて……本音を聞いた気がした」

また、ぽつりと言った。

ミルイヒは目をしばたいた。ランディはうつむいた。

「……おい、まだ言わせる気か？」

ミルイヒは首を傾げる。

「え？」

「……」

「何？」

ランディはうつむいたまま、寝癖頭を搔く。

「もしかして、俺をいじめてんの？」

ミルイヒは目をしばたく。

「何で？」

ランディはようやくこちらを見た。が、すぐに目をそらした。

「ちょっと……うれしかったんだよ」

ミルイヒは目をしばたく。

「あんなこと言われて？」

「おい……それじゃまるで、いじめられるのが好きみたいじゃないか」

ランディは眉をひそめてミルイヒを見た。

「なら……はっきり言えよ」

ミルイヒはわずかに苛立ちを含んだ口調で言った。

ランディはミルイヒから目をそらし、何度も口を開きかけては唇を舐めていたが、大きく空気を吸い込んで、意を決したようにミルイヒを見つめた。ミルイヒは息を吞んで、真摯な瞳を受け止めた。

「おまえがようやく心を開いてくれたようで、うれ

しかったんだ」

ミルイヒは大きく目を見開いた。

ランディはかまわず続ける。

「そりゃあ、あんな風に思われていただなんてショックだったけど、本音をぶつけられて、ああ、俺はやっと本当の友人として認められたのかなあつて。……誰しも他人に対して少なからず不満はあるわけであって、それはもう人と付き合っている限り、どうしようもないことなんだと思う。それを吐露することによって相手も自分も何かが変わる。それは大きな結びつきになるかもしれないし、永久的な破局になるかもしれない。しかし、何も言わなければ無難なままの関係だ。俺はそういうのが嫌なんだ……」

と言うと、顔を真っ赤にして、うつむいてしまった。

「本当の友人」という言葉が、ゆっくりとミルイヒに近づいてきて、ミルイヒの心に溶け込むように収まった。しばらくして、ほのかなあたたかみがじんわりと心に広がる。

ミルイヒは目を細めて、いとおしむようにランディを見、

「おまえ……」

おもむろに口を開き、

「おまえ、素面でよくそんな恥ずかしいことが言えるなあ」

ランディは勢いよく顔を上げた。その顔はさらに紅潮している。

「バカ！ おまえが言えって言ったから、言ったんじゃないか。ちょっとは察しろよ。あんなこと……女にも言ったことないぞ。それなのに、おまえってば、顔色ひとつ変えずに聞いているんだからな。俺だけが恥ずかしいじゃないか」

「顔を赤らめ合っている男同士というのは、それこそ端から見たら恥ずかしいぞ？ まあ、女を口説いて狼狽するおまえじゃないものな。ありがたい言葉を拝聴した」

と、ミルイヒはからかい調子で微笑んだ。ランディはミルイヒのその様子を見て、口を尖らせた。

「……おい、なんかちょっと違うんじゃないか？なんで俺があんなこっぴどいことまで言って、おまえの機嫌を取らなければならないんだ？ ん？おまえも何か言えよ。言うことがあって来たんだろう？」

ミルイヒは目をしばたき、まだ謝罪していなかったことに気づいた。

「……すまない。わたしが悪かった。あれがわたしの本心でなかったとは否定しない。しかし、言うべ

きことではなかった……。どうかしていたんだ。——  
——こんなわたしでも許してくれるか？」

驚くほどに、すらすらと言葉が出た。

「許すも何も……はなから何もなかったさ。俺はおまえに優越感なんて持っていない。単なるおまえの被害妄想さ」

と、ふてくされたようにランディは言う。

「俺は……俺の方こそ、おまえに劣等感があるかもしれない」

ミルイヒは目をしばたかせた。わたしに劣等感だって!?

「俺には無意識的に女を落とすなんて芸当、できないからな」

その言葉に戸惑うミルイヒを見て、ランディは面白がるように笑った。

ミルイヒは眉をひそめた。また、わたしをからかって……。しかし、不快なものではない。

「おまえって、いい奴だなあ……」

ミルイヒはまぶしそうにランディを見た。

「バカ。何言ってんだよ。おまえこそ、恥ずかしいことを真顔で言うなよ」

ランディは頬を赤く染めた。ミルイヒは微笑んだ。

ランディは本当にいい奴だ。自分にはもったいな



いくらいの奴だ。ランディの潔さ、寛容さが自分にもあったらどんなにいいだろうか。

やはり、この劣等感はやさしい。しかし、それは今まで持っていたものとは違うもののような気がする。「劣等感」という言葉が合わないような気がする。

「ところで、こんな朝っぱらからどうしたんだ？ わざわざ俺をからかいに来ただけって事はないんだろ？」

ランディはあくびをしながら言った。

ミルイヒは我に返り、顔を青くさせた。そうだった。もっと重大なことがあったのだ。

ミルイヒは唇を舐めた。

「実は、エルネラ殿下と寝てしまったらしい……」

ランディはすっかり目が覚めたような顔をし、口をだらしなくぽかんと開けた。それから口の中でその事実を小さく反芻し、顔をぱっと輝かせた。

「遂にやったか！ おまえも思いきったなあ。うんうん……ん？ 『らしい』ってのはなんだ？」

ミルイヒは蒼白な顔に気まずさを加え、躊躇いがちに言った。

「覚えて……いないんだ」

ランディは目をしばたかせ、引きつった笑みを浮かべた。

「何？ 例によって……」

ミルイヒはうなずき、遠くを見るような目をした。

「おそらく……紅茶の中にブランデーか何か入っていたのだろうな。気づかずに飲んでしまった」

まなうら  
眼裏に光景が浮かび上がってくる……。

薄い水の膜が張られた碧玉——怯えに潤んだ瞳は鮮やかに輝き、やけに大きく見えた。エルネラは終始ミルイヒを避け、ほっそりとした身体を小さく震わせていた。その姿には剣を合わせたときの勇ましさは微塵もなく、張りつめた空気に押しつぶされそうな、はかなさしかなかった。

——それを無理矢理……。

ミルイヒは頭を抱え、テーブルに突っ伏した。停止していた思考が怒濤のようにあふれてきた。目眩がする。吐き気がする。凄まじい自己嫌悪の波にさらわれ、なぶられる。

「ああ、なんてことだ！ わたしはもうおしまいだ！ 嫌がる殿下を無理強いするなんて……！ この浅ましい想いを抑えつけておくことができなかったなんて……！ こんな騎士がするようなことじゃない。もう陛下に顔向けできない。ああ……」

それは痛切な叫びだった。

ランディは、後悔に苛まれるミルイヒを哀れむよ

うに見た。それが己がことであるとばかりに、痛みを堪えるような顔をしている。

「おい、なんだよ。殿下は本当に嫌がっていたのか？ おまえ、本当に抱いたかどうか覚えていないんだろう？」

ミルイヒはごくりと唾を呑み、ゆっくりと、だが明確にうなずいた。

何も覚えてはいない。誰かの企みで、あの紅茶に睡眠薬が入っていて、何もないままエルネラの隣に転がされていた、というのならどれだけよいだろう。

しかし……

「確かな証拠がある」

ミルイヒは袖を肩までめくりあげた。

ランディは息を呑んだ。ミルイヒの二の腕には、無惨な引っ掻き傷がみみず腫れとなっていくつもあったのだ。

「服を着るときには、動転していて気づかなかったのだが、落ち着いたら痛み出して……背中はずっとひどいようだ。どうだ？ これでもまだ、無理強いで抱いてないと言えるか？」

泣き笑いにも似た顔で言った。

ランディは眉をひそめながら、考え込むようにその傷跡を見た。

「……ふーむ。無理強い、ね。しかし、殿下はおまえを好いているんだぞ？」

「何をバカな。そんなの、慰めにもならないぞ」

ミルイヒは吐き捨てるように言い、素早く袖を元に戻した。

「いや、本当の話だ。殿下はおまえが好きなんだ」

至極真面目な顔で言うランディに、ミルイヒは吹き出してしまいそうだった。だが、かすかな笑いを含んだため息がもれたただけだった。

「それならば、どうして婚約の破棄を？ 決闘までして」

「そこら辺が微妙な乙女心というやつさ。決闘に関しては、おまえは何も言えないはずだぞ？ あんな手抜きをしてからに」

ミルイヒは唇を噛んで笑みを消した。その点は今、重々反省している。

しかし、エルネラは明らかに自分を嫌っている素振りをしてきたのだ。勝つわけにはいかなかった。力でねじ伏せるようなことは好きではない。

——わたしを好きなわけなんて、ないんだから…  
…。

百歩譲って、エルネラが自分のことを好きだとしたら、抱かれてこのような傷を自分に与えるわけがないではないか。そのあとに、別れの言葉を使うは

ずがないではないか。

「殿下を抱いてしまったという事実は事実だ。そこから辺の貴族娘とは違うんだ。これは大罪だ。不義密通だ」

舌先から滑り出ているような言葉である。自分が言っているとは思えない。

エルネラを抱いたことに、最初に奪ったのは自分だということに、満足する自分が心の奥に潜んでいる。素面であつたらどれだけよかつただろう、などと思う自分がある。

ミルイヒは愕然となった。どうしてそんなことを思うのだろう？ ひどく自分が恐ろしくなった。それがきつとあのような汚らわしい行動へと走らせたに違いない。

ランディはミルイヒの深刻ぶりにあきれたようにため息をついた。

「そう思い悩むなって。陛下に知られたとしても怒らないだろうよ。むしろ喜ぶかもしれないぞ」

「陛下はそうだとしても、殿下はどうなんだ？ 絶対にわたしを許さないさ。そういう顔をしていた。わたしのために守っていた操みさおじゃない。……そうだ、あの男のためだ！」

ミルイヒはヒステリックに叫んだ。またぞろ、燃えるような嫉妬がわき起こった。エルネラの身体を

奪っても、心はあの黒髪の青年のものなのだ。

ランディはミルイヒの顔と声調に驚き、眉をひそめた。

「前にも言っていたな。『あの男』って誰だ？」

ミルイヒは眉間にしわを寄せ、一瞬躊躇い、忌々しげに言った。

「……切り裂き魔」

「切り裂き魔あ!？」

ランディは身を乗り出し、裏返った声を出した。

「そうだ。殿下はお気づきになってないらしいが、殿下が愛する男は切り裂き魔なんだ。わたしはあの夜……見てしまったんだ。『後宮の庭』で語らう二人を」

ランディは大きく息を吸い込み、口をぱくぱくとさせてから、

「……おまえ、それを殿下に言ったのか？」

ミルイヒは弱々しく首を振った。

「そのことを言うために殿下に会いに行ったんだが……逆にわたしの方が危険な存在になってしまったわけだ」

ふっと自嘲気味に笑った。

「それじゃあ、まだ言ってないんだな？」

ミルイヒは暗い顔でうなずいた。

ランディはうつむいているミルイヒの顔を無理矢

理上げさせた。ミルイヒは不安そうに目をしばたかせた。ランディは厳しい顔をしている。

「なぜ早く言わなかったんだ!? これは殿下一人の問題じゃないぞ。切り裂き魔が王城の最奥にある『後宮の庭』に出入りしてるって事は一大事だ。いつ陛下の身が危険にさらされるかわからんぞ!？」

ミルイヒははっと目を見開いた。

なんてことだ！ なぜそのことに気づかなかったんだろう。嫉妬にとらわれ、エルネラに心奪われ、自分の本当の職務を忘れていた。どうしてこうも愚かさが続くのだろう。

ミルイヒは気まずい顔で、震える唇をきつく噛んだ。ランディの顔をまともに見れない。消えてしまいたい。どうしてこうまで親友を失望させなければならぬのだ？

「わたしは近衛失格だ……」

ランディはため息をついた。ミルイヒの自己嫌悪ぶりに辟易した様子である。

「まだ……まだ、間に合う。すぐに登城しよう！」

「ちょっと待て！」

ミルイヒはさらに青くなり、立ち上がりかけたランディの腕をつかんだ。

「陛下になんて言うつもりなんだ？ わたしが『後宮の庭』で見た、なんて言う気じゃないだろうな？

陛下より先に殿下だ」

「おいおい。おまえの話では殿下はその切り裂き魔を好きなんだろ？ そんな話を信じるとでも思っているのか？」

ミルイヒは唇を噛んだ。血がにじむ。

「おそらく……信じないだろうな。わたしだとてそれはわかっている。だからこそ、言い出しにくかったんだ」

「しかし……」

「言わなければならない。殿下の口から、王城に切り裂き魔が入り込んでいるということをおっしゃってもらわなければ」

口を真一文字に引き結んで、ミルイヒはランディを見つめた。

「わたしの代わりに殿下に言ってくれ」

ランディの顔が引きつった。

「な、なんで俺が!?!」

「あんな事のあとで、殿下に会えるわけがないじゃないか。それに、殿下は……」

——さよなら。

と、何も映していないかのような瞳で言った。あんなことを言われて、臆面もなく会えるはずがない。

ランディは腕を組んでうなった。何かに葛藤して



いるようである。おそらく、国王に忍び寄る危機への不安と、エルネラと顔を合わせることへの嫌悪とにだ。

しかし、どちらがより重いか、明白なはずだった。

ランディはこれ見よがしに大きくため息をついた。

「わかったよ。会ってくるよ。これは貸しだぞ！」

ミルイヒは落ち着かぬ様子で、「昼寝の庭」の噴水のそばにある鉄蓋を眺めていた。

太陽はだいぶ高くなり、そろそろ出仕の時間になるろうとしている。

遅すぎる。

話し合いは難航しているのだろうか？ そうかもしれない。にわかには信じがたい話だ。

しかし、黒髪の青年が切り裂き魔であることは事実だ。エルネラも王女の端くれならば、斬り殺された無辜の民のこと、月夜もおちおち歩けぬと怯える王都の人々のことを考えてくれるだろう。また、ランディならば、うまく説得できるはずだ。

噴水の縁に腰掛けて、噴水の池の濁った水を眺めながらため息をついたとき、鉄蓋が勢いよく開いた。ミルイヒは立ち上がった。

「どうだった？」

身軽に穴から這い出たランディの顔は、心なしか青ざめている。ランディはミルイヒに相對し、不意にミルイヒの両肩を揺さぶるようにつかんだ。ミルイヒはその強さに眉をひそめた。

「いいか、気を確かに聞けよ」

ランディの氣迫に氣圧されつつ、ミルイヒは戸惑い顔でうなずいた。

「エルネラ殿下が……失踪した」

ミルイヒは一瞬、その言葉を理解することができなかった。強ばった顔で聞き返す。

「え……？」

「ディアンが今朝、殿下の私室に行ったらもぬけの殻で、置き手紙があったそうだ。それにはこう書かれていた。『もう二度と帰らない』と」

ミルイヒは血の氣が引けるのを感じた。膝ががくがくと震え、ランディに支えてもらっていなければ立ってられない。

「それって……わたしが……」

か細い、途切れ途切れの声しか出ない。

なんてことだ！ 殿下が失踪されるなんて！ ああ、わたしはそれほどのことをしてしまったのだ。何一つ覚えていないが、わたしがしてしまったことには違いない。

——わたしのせいだ！

ミルイヒを現世へと引き戻すかのように、ランディはミルイヒの肩を強く揺すった。

「おまえのせいとは決まっていない！」

ミルイヒは大きく息を吸い込んだ。

「だがっ！ 現に殿下は消えてしまった。わたしと寝たそのすぐあとに！ どうしてわたしのせいではないと言い切れるんだ!?!」

肩からランディの手をはずし、うつむいて首を振った。

「好きでもない男に処女を奪われたんだ。普通の女ならば泣き叫んでいるところだ。それなのに殿下は毅然としてわたしから去っていった——もっとも、泣き叫び疲れて吹っ切れたのかもしれないが。そのまま自殺してしまうことだってあり得る」

ランディはうんざりしたようにため息をついた。

「また変な方向に考える。殿下はそんなことで自殺するような気の弱い人じゃないよ。だいいち、あの人はおまえを愛していたんだ」

ミルイヒは激しく首を振った。

何をバカな！ もっと気の利いたことが言えないのか？

「信じられないか？ そうかもな。俺がこんな事を言ってもおまえは信じないだろう。だから俺は今ま

で何も言わなかったんだ。恋人同士でさえ、相手が本当に自分を愛しているのか不安なものさ」

「……」

「自分で確かめてみる」

「確か……める？」

ミルイヒはかすれた声で言った。

ランディはうなずいた。

「おまえの本心をエルネラ殿下に言うんだ」

ミルイヒは目を見開き、恐ろしいものでも見るようにランディを見、

「そんなこと……できない。わたしにはそんな資格がない」

と、弱々しく首を振った。

今さら、愛の告白をしてどうなるというのだ。あんなことをしておいて、愛の告白をするだなんて、おかしい話だ。自制心のない男だと思われるのが落ちである。

だが、そのように臆病になっている自分が嫌でもあった。男らしくないと思う。覚悟が足りないと思う。

あそこまでしたら、開き直るべきだったのだ。ふんじばって、さらってしまえばよかった。失踪されるよりずっとましである。猿ぐつわを噛ませ、縛り上げたエルネラを担いで家に帰ったら、ヘイデンは

いったいどんな顔をしたんだろうか。

ミルイヒは密かに失笑した。

できないとわかっているから、そんなことを考えられる。

今、考えるべきことは、そのようなことではない。今、考えるべきこと……今、なすべきこと……。

ランディはため息をついた。

「……わかった。おまえがそう言うのなら仕方ない。しかし、自分を責めるのはやめろ。それよりも殿下を捜すことに全力をあげるんだ！ ——俺は陛下に直接このことを言ってくる。安心しろ。おまえのことは何も言わない。王女が家出なんて、これほど対面の悪い話はないからな。殿下の名誉のために俺は嘘をつく。つまり、切り裂き魔が殿下を誘拐したとでっち上げる」

「それは……変じゃないのか？ 切り裂き魔が誘拐だなんて」

「俺もそう思うが仕方ない。殿下を捜し、なおかつ王城の警備を固めるにはこれしか手がない」

「陛下にだけは本当のことを話した方がいいんじゃないのか？」

「う、む……」

「わたしが陛下に言ってこよう」

ランディは驚いた様子でミルイヒを見た。ミルイヒの目には、強い光が宿り始めていた。

「洗いざらい全部話す——後宮に入り込んだことはうまく除いてな」

「全部って……殿下と寝たこともか!？」

ミルイヒはうなずいた。

「切り裂き魔のことはどうするんだ？」

「その点は殿下と切り離す。王城内で偶然出くわしたという感じで言おう。シナリオはこうだ。殿下と寝たあと、未明、王城を去ろうとしたとき、切り裂き魔と会う。逃げる切り裂き魔を追いかけるが見失ってしまう。とりあえず、王城内に切り裂き魔が入り込んだことを報告しようと王城に戻ると、ディアンから殿下失踪の知らせを受ける——という感じでどうだ？」

ランディは、驚いたような、感心したような顔でうなずいた。

「よし、俺はディアンと口裏を合わせよう。ディアンには、まだ何も騒ぎ立てるなと言ってある」

「出仕になる前に行動開始だ！」

ランディはすぐさま鉄蓋の中へ戻っていった。

ミルイヒはすばやく身を翻し、国王の私室へと急いだ。

エルネラを見つけること——それが償いになり得

るのなら……。

エルネラ失踪は瞬く間に城内の人々に伝わった。しかし、それは事実とはかけ離れたものだった。

ランディの予想通り、エルネラの家出は国王をひどく憤慨させた。しかし、これもまた予想通りというか、尋常でないと言うべきか、ミルイヒが責められることはなかった。責めてもらった方がどれだけ気が楽かと、ミルイヒは思った。

結局、エルネラは誘拐されたということになった。なんの要求もないので、身代金目当てではなくエルネラ自身を狙ったもの、となった。しかし、切り裂き魔が王城内に入り込んだことはそのまま伝えられた。

王都の四大門からエルネラと思しき人物が出ていったという報告はない。エルネラはまだ市中にいる。昼を前にして、エルネラの搜索が始まり、王城の警備は一層強化された。

そして、緊張感だけが高ぶったままなんの進展もなく、夜を迎えたのだった。

澄み切った空気の中、冴え冴えとした月はほんの少しだけ欠けている己を恥じる風もなく、今夜も我が物顔で夜の空を支配していた。

しかし、世界を皓々と照らすその淡い光をもってしても、下町の混み込みとした一帯のすべてをさらけ出すことはできなかった。そこは下町の中でも特に治安が悪く、切り裂き魔などさして特異な存在ではないという、忌まわしい場所である。

切り裂き魔と、そこに住みつく不穏な者たちの大きな違いといえは、その行動範囲と存在であった。切り裂き魔は神出鬼没だが、その者たちにはそこに行けば必ず会えるのだ。

「殿下がこんなところに来るわけがないじゃないか」

「俺だってそう思うさ。しかし、誘拐の線だとここが怪しいってことになったんだから、仕方あるまい。俺たちは平の近衛隊員。上官の命令には逆らえやしない。まったく、こんなところは王都警備隊の管轄だろうに」

「いや、管轄外だろう。警備隊では手が出ない。しかし、ここにいる者たちはここから出ようとはしない。自分たちの戦いに明け暮れている」

「ああ。しかし、侵入する者がいれば徹底的に排除しようとする。現に俺たちだって危ない。さっきからねっちこい視線が背中に刺さってる」

「多勢に無勢だ」

「ふん。怖いのか？」



「そんなに自信があるというのなら、すべておまえに任せることにして、わたしは高みの見物をしていよう」

「おまえって、時々すごおく意地悪だよな……」

ミルイヒとランディはふたりきりで暗い路地を歩いていた。カンテラが必要なほど真っ暗ではない。建物と建物のわずかな隙間から洩れる月明かりが、辛うじて助けとなっている。

月明かりを遮って乱雑にそびえる建物群は、旧市街の遺物である。かつての賑わいが嘘のように、寂寞と不穏が漂って幾久しい。ここではいったい、どれほどの血が流されてきたことだろう？ ミルイヒは我知らず、寒そうに腕をさすっていた。

こんなところにエルネラがいるとは到底思えなかった。ここを抜け出して、エルネラを捜して走り回りたい。しかし、ミルイヒの身は一つであり、任務は任務だ。これ以上、愚かな姿をさらしたくはない。

「ミルイヒ！」

ランディに言われずとも、ミルイヒにもわかっていた。ミルイヒはすばやく剣を抜いた。

闇と隔たりを作る月明かりの中に入ったとき、ふたりは八人に囲まれた。八人の方は完全に光の影に入っていて、その姿ははっきりとはわからない。し

かし、この地区の人間であることは確かだ。

八人は無言のまま動き出した。彼らに話し合いという言葉はない。力による排除しかない。彼らはそれぞれの得物を振りかざして、ふたりに肉薄した。

ミルイヒとランディは背中合わせになり、襲いかかる者たちに応えた。多勢に無勢とはいえ、その力量には歴然とした差があった。

ランディは剣を合わせるまもなく二人を斬り伏せた。ミルイヒは左手の短剣で第一陣の剣を受け、相手がひるんでいる隙に第二陣としてやってきた男の首を右手の剣で斬った。そして、返す刃で最初の男を斬り伏せた。

ミルイヒとランディの真っ白な隊服は、あっという間に血に染まった。月光にぬらぬらと光っている。

残る四人はこれはできると見たのか、闇雲に襲いかかってきはしなかった。少し間合いを取り、慎重に回り込もうとじりじりと横歩きを始めた。

ランディは鼻を鳴らした。

「来ないならこっちからいくぜ！」

ランディは四人のうちの一に斬りかかった。

同じくミルイヒもそうしようと一歩踏み出しかけた——その時、ミルイヒの視界に人影が入ってきた。

ミルイヒは息を呑んだ。

もう一つ向こうの月明かりの帯の中に入ってきた人物——見間違えようはずもなかった。

——黒髪の青年。

青年はこちらにちらりと目を向けると、さっと身を翻して暗い路地の中へと消えていった。

ミルイヒは目の前の襲撃者たちには目もくれず、青年の消えた方に走り出していた。

しかし、ランディの相手をしていないふたりの襲撃者は、ミルイヒのあとを追った。ミルイヒは舌打ち一つ、そのふたりを迎え撃った。あっという間に斬り伏せると、すぐさま路地の中に入った。

三十歩ほど向こうに青年の後ろ姿が見えた。ミルイヒは叫んだ。

「待ってくれ！ デュー殿」

と言ってから、犯罪者に対して「殿」を付けるのはいかななものかと思われた。しかし、青年には侵しがたい神秘性と気高さがあり、それが青年に対して敬語を使わせていたのである。

青年は肩越しに妖艶な笑みをミルイヒに送ると、かまわず右の路地に消えた。

ミルイヒはすぐさまあとを追った。路地を曲がると、青年はすでに五十歩先を歩いていた。走った風はないというのに。

「待て！」

青年はようやく足を止め、物静かに振り返った。

「貴殿もしつこいね」

青年はため息混じりに微笑んだ。月明かりに照らし出されるその顔には、この血塗られた地と、王都を震撼させている切り裂き魔に似つかわしくない優しさに満ちている。

ミルイヒは何も考えずに青年を追ってきてしまったが、驚いたことに、以前のような恐怖感はまったくなかった。威圧的な目に魅入られることも、怯えさせられることもない。

だが、冷静ではなかった。煮えたぎるような血が身体中を巡り、心はどす黒く甘美な炎に包まれていた。

「エルネラを捜さなくていいの？」

青年は首をわずかに傾げて訊いた。

「心配しなくとも、他の兵士が殿下を見つけてくれることでしょう」

ミルイヒは剣の血糊を純白のマントで拭き取った。剣は再び輝きを取り戻す。

「しかし、あなたと剣を交えるのはこのわたしです。それは誰にも譲れない」

ミルイヒは剣を構えた。

青年は肩をすくめた。

「前にも言ったはずだ。貴殿とは剣を交える気はない、と」

「ならば、抜かせるのみ」

ミルイヒは斬りかかった。その剣を青年はさっとよける。まるで空気のように。

「乱暴だな。……仕方がない」

青年は鞘を抜き払わずに剣を構えた。

ミルイヒの顔にかっと血の気が上った。

「わたしを愚弄するのですか!?!」

青年は困ったような笑みを浮かべた。

「そう言われてもね……いくらわたしでもエルネラを悲しませるようなことはしたくない」

その言葉は優しく響いた。その響きに猛烈な感情がかき立てられ、ミルイヒは再び斬りかかった。青年はそれを軽くいなした。

「感情的になったら負けだよ。わたしに勝ちたいと思うのなら、心の中を空っぽにすることだ」

ミルイヒはその言葉にもかっとなり、奥歯を噛みしめた。青年の言うとおりである。しかし、その指摘も忌々しいことであった。

どうしてもこの男が憎いのである。その感情は抑えつけられない。それに、もし抑えることができたとしたら、たちまち青年の魔力に囚われることは間違いない。

ミルイヒは剣を繰り出した。しかし、ことごとく受け流された。その流しは実に巧みで、打ち込みをしているような気がしなかった。

「そんなことはわかっていますとも！　しかし、あなたが憎いんです。殿下に愛されるあなたが！　怒濤のようにあふれ出るこの感情を、どうして抑えつけることができるというのです!?!」

ミルイヒは感情の高ぶりのままに、心の内を吐露していた。

青年はふっと吹き出し、顔をほころばせた。

「なんだ。貴殿はわたしに嫉妬していたのかい？　それはお門違いというものさ。……冷静な男かと思っていたが、わたしの見込み違いだったか。これだから恋というものは……」

ミルイヒはその言葉を遮るように剣を繰り出した。青年は優雅なまでに軽々と受ける。受けるだけで、攻撃してこようとはしない。

わたしだって知らなかった。こんなにも自分が感情的になれるなんて。ランディとの喧嘩の時もそう。わたしはどうしてしまったのだろう？　こんなにも心をかき乱すなんて！　わたしはもっと冷静な人間だったはずだ。

青年の美しい顔には汗一つないというのに、ミルイヒは肩で息をしていた。

「またしても失望したな。貴殿はもっとできる男かと思っていた。この程度なのかい？」

ミルイヒはきしむほどに歯を食いしばり、渾身の突きを入れた。青年は難なく受け流し、しまいには剣をからめ取った。剣は涼しげな音を立てて石畳に落ちた。

「こんな乱暴なことは好きじゃないんだけど……」

落ちた剣を素早く拾おうとするミルイヒの脇腹に、青年は鋭い蹴りを入れた。その衝撃に一瞬呼吸が止まり、ミルイヒはうめいて地面に突っ伏した。起きあがる間もなく、青年はミルイヒの背中に片膝をつき、左腕を背中に回した。ミルイヒは眉間にしわを寄せて、うめき声を出した。

「やれやれ……これでゆっくりと話ができる」

## 07.解き明かされる魂

エルネラは走った。

暗い路地をひたすら走った。

その手には、真ん中からぽっきりと折れた血刀が握られている。動悸は激しく、足は徐々に重くなり、その重さに堪えかねて、ついには歩いてきた。

汗まみれの顔を包む髪は肩ほどの長さしかなく、輝く金髪はくすんだ褐色になっている。エルネラは王城を出たあと、旅の準備を整えるために美しいその髪を切って売り、見つけられぬように染めたのだった。

足を止め、薄汚い壁に身をもたれた。大きく深呼吸をし、青ざめた顔で、今初めて見るかのように剣を握る手を見た。堅く握りしめられ、血管がうっすらと浮き出ている。心なしか震えている。

——人を殺してしまった。

肉を断つ感触を覚えている。あの刹那、振るった剣が己の身体の一部であるかのように、剣を通して肉体の悲鳴が聞こえた。

——おぞましい悲鳴。

それをかき消したくて、無我夢中に剣を振るっ



た。その度に悲鳴は大きくなる。それでも、剣を振るわずにはいられなかった。

何も聞こえなくなったとき、闇雲に走っている己がいた。

静かすぎて、耳が痛かった。だが、ひどく心地よかった。

——怖かったのだ。

人を殺してしまったことが、ではない。

それには驚くほど感慨がない。空虚である。いや、考えたくないのだ。頭の片隅でわめき声をあげている黒い影を凝視しようとする、吐き気がこみ上げてくるから。

——怖かったのだ。

嵐のような悲鳴の渦にさらわれて、己を見失ってしまうのが。

そうになったら、おしまいだと思った。どうなるかはわからないが、直観的にそう思っていた。

左手を使って、ようやく剣から手を引き離した。乾いた音を立てて、剣は地面に落ちた。静寂に満ちているあたりに、その音はさほどの影響も与えなかったように思える。

乾いた唇を舐め、軽蔑するような眼差しでその剣を見た。安いだけあって、なまくらである。

黒髪の青年は木剣しか保持させてくれなかった。

だから、エルネラは髪を売ったなけなしのお金で、安い剣を買うしかなかったのである。しかし、その剣ももう使いものにならない。

エルネラはほんの少し、後悔し始めていた。あまりにも考えなしに、勢いのままにいつもの練習着を着ただけで城を飛び出してしまった。そして、右も左もわからぬまま、得体の知れぬ場所に紛れ込んでしまった。

王都にこんな場所があったなんて……。さきほど、無言で襲いかかってきた者たちのことを思い出し、身震いした。

エルネラは周りを見回した。辺りは薄暗い闇に包まれている。夜空の方がずっと明るく見えた。無人の建物が威圧するように建ち並んでいる。時折風が吹いて、落ち葉がかさかさと言を立てる以外の音はしない。

とりあえず、襲撃者たちから逃れることはできたようだった。しかし、またいつ襲われるかわかったものではない。しかも、今度は迎え撃つことなどできはしない。

渴きにひりつく喉を押さえ、歩き出した。

——早くこの場所から出なければ！

しかし、どこが出口なのかは皆目わからない。闇雲に歩き回るしかない。

ああ、神よ、あの呪われた輩に会いませんように。エルネラはいつにない信心深さを心にのぼらせた。

紺の外套を引き寄せ、息を押し殺して早歩きをする。できるだけ月明かりをさけ、暗いところを歩く。

路地の角にたどり着いたとき、その角の陰から一人の男が勢いよく現れた。驚くまもなく、エルネラはその男にぶつかって尻餅をついた。

素早く立ち上がろうとしたが、足に力が入らない。すくんでいるのだ。息が止まる。目をつぶる。

だめ！ 殺される！

「すみません。大丈夫ですか？」

エルネラは息を呑んだ。その声には聞き覚えがある。

恐る恐る目だけを男に向け、男を認めるやいなや、さっとうつむいた。無言の襲撃者たちよりも、ある意味質が悪かった。にもかかわらず、安堵に涙が出そうだった。

エルネラに手をさしのべている男は、ランディだったのである。

躊躇いがちにその手を取る。

——あたたかい。

その手のひらのあたたかさは、じんわりとエルネ

ラを包み込み、瞳を潤ませた。エルネラは嗚咽しそうになるのをぐっと堪え、己の弱さを呪った。

エルネラ、この程度の覚悟だったの？ やっぱりあなた、所詮「お姫様」なのね。

自問自答のような言葉がふっと胸の内に浮かび、安堵の涙は悔し涙に変わった。

――戻りたくない。

それには、「今さら戻れない」という気持ちが含まれている。

ランディはまだ自分に気づいてはいない。気づかれる前に離れるのだ。

「どこかお怪我は？」

エルネラは素早く首を振り、さっと身を翻した。しかし、ランディの手が行くことを許さない。立ち上がるときに手を取ったまま、ランディは手を放さなかったのだ。

「どこへ行こうというんです？ あなたが帰る場所はそちらではないでしょう？ エルネラ殿下」

エルネラは息を吞んで振り返った。

「どうして……？」

ランディはため息混じりに微笑んだ。

「たとえわたしが殿下のことをにが……いえ、殿下のような方は、どのような姿をしていてもわかりますよ。しかし、あの美しい御髪おぐしをこんなにしてしま

うなんて……感心しませんね」

ランディの顔には、困惑とたじろぎがない混ざっていた。

「放しなさい！」

エルネラはぐいと腕を引っ張った。しかし、ランディは放そうとはしない。

「だめです」

きっぱりと言った。

「なぜこんなまねをしたんですか？ よもや、ミルイヒのせいとは言わないでしょうね？」

エルネラは腕に力を込めることをやめた。

ミルイヒの名を聞いて、身体が熱くなるのを感じた。昨夜のあの夢のような出来事を思い出したのである。

そうね、あれはすばらしい夢とも、悪夢とも言えたわ。

「そうだとしたら？」

意地悪く訊いてみた。

「訳がわかりません。望んでいたことのように」

エルネラは眉をつり上げ、ランディをきつくにらんだ。ランディは一瞬ひるんだようだったが、唇を引き締めてエルネラを見返した。

「わたしが望んでいたですって!？ 冗談じゃないわ！ 無礼を言うにもほどがあるわ」

エルネラはかすれ声で叫んだ。ランディは怯えるような顔で目をそらしかけたが、再びエルネラの燃える瞳をまっすぐに見た。

「……す、すみません。無礼は承知です。しかし、このままではあまりにもミルイヒが哀れでならないんです。あいつを見るに堪えないんです」

「ミルイヒが後悔してるとでも言いたげな口振りね。だけど、わたしがどれだけ傷ついたと思っているの？　どれだけ忘れようと努力したと思っているの？　ようやく立ち直れるところだったの。それなのに、あの人はわたしの心を無理矢理踏みにじったのよ！　それなのに……」

涙が浮かんだ。奥歯をぎりっと噛みしめる。

何を言っているのかしら、わたしは。本当はうれしかったのよ。嘘でもうれしかったのよ！

ランディはその涙にさらにひるみ、慌てて付け加えた。

「違うんです！　勘違いしないで下さい。殿下を抱いたミルイヒは、ミルイヒであってそうじゃないんです」

「どういうこと？」

エルネラの顔は泣き笑いに近かった。

「紅茶にお酒が入っていたでしょう？」

「ええ。いつもディアンにそうしてもらっている

わ」

ランディは唾を一呑みした。

「ミルイヒは……ミルイヒは極端にお酒に弱いんです」

エルネラは眉をひそめた。

「お酒を少しでも飲むと、仮面がはずれるんです」

エルネラは目を見開き、息を呑んだ。

「あれは……あれは本心だったというの？」

ランディは力強くうなずいた。

エルネラは青ざめ、弱々しく首を振った。かすれた声が出た。

「う……そよ。そんなはずないわ。あれはあの人のいつもの手なのよ。ああやって女を籠絡するのよ。わたしはずっと騙されていたのよ。わたしを愛しているんだと、ずっと騙され続けていたのよ。わたしを抱いたのだって、快樂のためだけ。そうでなければ、あんな……あんなひどい抱き方をするものですか！ わたし……初めてだったのに……！」

ついには涙声となり、一筋の涙が伝い落ちた。あれはまさしく悪夢のようだった。ミルイヒは、つらさに涙を流すエルネラにはお構いなしだった。

わたしを愛しているならば、もっといたわるはずよ。

エルネラは凄惨な笑みを浮かべた。

「だから、わたしも仕返しに引っ掻いてやったわ。当分、治らないでしょうね。当分、他の女を抱けないわ。ふふ……」

ランディは痛みを堪えるかのように眉間に深いしわを寄せ、小さく首を振った。そんなランディを、エルネラは面白がるように見た。

仕返し——あの時は全くそんなつもりはなかった。ただ、今組み敷いている女を自分だと認めて欲しかった。十把ひとからげに抱いた女たちと一緒にして欲しくなかった。忘れて欲しくなかった。しかし、今思うと仕返しという言葉はぴたりと合うような気がする。

あの傷をさらして他の女を抱くことなんてできないもの。

ランディはエルネラから目をそらして頭を掻いた。どう弁解したものか、悩んでいるように見えた。

「えーと……あいつはその……そう！ 愛情表現が下手なんです。

あいつの母親はひどい癩癩持ちだったらしく、母親に関する記憶はつらいものしか持ち合わせていないようで……なにしろ、幼いときに亡くなっていますから。それに、父親はひどく厳しい人でして——あいつはそうは思っていないようですが——満足に



愛情を受けていなかったのです。

甘えたい盛りに誰にも甘えることができなかった。だから、十になる前に子供らしいところはほとんどなかったようです。

俺が士官学校で初めて会ったときも、ひどく感情をあらわにしない奴でした。友達もいなかった。徹底的にすべてから距離を取っていた。愛に応えてもらえないのじゃないかという疑念が常にあって、ひどく臆病でした。裏切られて傷つくよりも、孤独を選んだんです。

そして、父親が倒れて、公爵代理となった頃からでしょうか。いつしかそれは諦観に変わっていったんです。おそらく、社交界での歪んだ愛にうんざりしたのでしょう。

——しかし、あいつは変わりました。

殿下によって」

エルネラは目を見開いた。

「——ですが、あいつは戸惑いました。忘れてしまったその感情がいったいどういうものであるのか、知りたくなかったのです。知ってしまえば、絶対に傷つくと思っていました。そして、自分の心がわからぬまま、婚約破棄となった。

しかし、そのまま消え去るような想いではありませんでした。その想いをどうにか鎮めようとして、慰めてくれる相手を手当たり次第に求めたんです」

ランディはため息をついた。

「あいつはある日、殿下と他の男が一緒にいるところを目撃してしまいました」

エルネラはそれが誰であるのか気づいた。

「それがすべての枷を解き放つ鍵でした。……男の嫉妬とは見苦しいものです」

ランディは苦々しい顔をした。

「あいつは感情に翻弄されています。お酒を飲んだことで、それは増長したのでしょうか」

エルネラは含み笑った。

「それじゃあ、わたしが悪かったとでも言うの？ わたしが愛してるとでも言えばよかったの？」

「有り体に言えば、そうですね」

「まっぴらごめんよ！」

エルネラは声の限りに叫んだ。唇がわなわなと震える。

「愛してないと言いきれるんですか？」

再び涙がこみ上げてきた。

「愛してるわ！　ずっと愛してたわ！　けれど、嫌なの！　わたしを愛しているならそう言えばいいわ。それを素面で言えないあの人が嫌なの！」

ランディはあきれたようにため息をついた。

「それではいつまで経っても平行線ですね。あいつからは絶対に言いませんよ」

「それならば、それでもいいわ」

エルネラはうつむいた。ランディは眉をひそめて、その顔をのぞき込むように身を乗り出した。

「いいんですか？」

「いいの……よ！」

エルネラはランディの股間を思い切り蹴り上げた。

「……！」

ランディはエルネラから手を放し、声を出すこともできずに地面にくずおれた。肩を小刻みに震わせている。想像以上の効果だった。

エルネラは素早くランディの剣を奪い、暗い路地の奥へと消えていった。

ランディは為すすべもなく、脂汗を流してうずくまるしかなかった。

「わたしには話すことなんて何もありませんっ！」

ミルイヒは左腕をひねりあげられている痛みと、背中的一点に体重をかけられている痛みに堪えながら、ようよう声を出した。

「わたしにはあるんだ。どうやら貴殿は大きな勘違

いをしているようだ」

「勘違い？」

ミルイヒは吐き捨てるように言った。自分は切り裂き魔ではない、とでも言うのだろうか？

「エルネラはわたしを、貴殿が思っているような意味で愛してなんかいないよ」

「何を……！」

ミルイヒは歯を食いしばり、青年の下から抜け出ようと必死にもがいた。しかし、己より頼りなげな身体つきをしているのに、青年はびくともしない。まるで、石像がミルイヒの腕を取り、上にのっかっているかのようだ。いったいどこからこんな力が出ているのだろうか？

ミルイヒは辛うじて視野に入っている青年をにらんだ。青年はそれに微笑みをもって応えた。

「そう怖い顔をしないでくれよ。本当の本当に、エルネラとわたしの間には何もないのだから」

「……嘘だ。わたしは見たんだ。あなたと殿下が『後宮の庭』で会っているところを。……抱き合っ  
て……その、キ、キスを……」

ミルイヒは顔をしかめ、唇を噛んだ。思い出すに腹立たしい。

そこには、密通であるとか、男子禁制の場にいたとかいうことで、青年を責める思いはない。あるの

は個人的な狂おしい感情だけである。

青年は驚いたように目をしばたかせた。

「それはいつの話だい？」

「……つい最近のことです」

ミルイヒは青い顔で目をそらした。あれは、いちいち覚えていないほどいつもあることなのだろうか？

青年は目を細めた。

「ははあん、あの時か……。しかし、感心しないな、のぞき見なんて」

ミルイヒは決まり悪そうに赤面した。

「ま、別にいいけどね。やましいことはしていないから」

ミルイヒは再び青年をにらんだ。

「ぬけぬけと……！」

青年はその先を遮るように腕に力を込めた。ミルイヒは痛みに顔をしかめた。切り裂き魔自身の手による古傷が、ぴりぴりと引きつれる。

「わたしからではないよ。抱きついてきたのはエルネラだし、キスしようとしてきたのも——未遂だけど——エルネラだ。あまつさえ、貴殿のことを忘れさせてくれとまで言う」

ミルイヒは目を見開いた。わたしのことを忘れさせてくれだって!?

「わたしは応えてやってもよかったのだけれど、それはエルネラのいつものひねくれ心だということはわかっていたから、突き放してやったよ。あの娘はね、本当に困ったひねくれ屋なんだ。その上、頑固だ。本当に好きな人を前にして、好きだなんて言えない娘なんだ」

ミルイヒはひどい喉の渴きを感じた。

「あなたも……殿下がわたしを愛していると言うんですか？」

「ああ。エルネラは貴殿を愛しているよ。確かだ」

「それならば……どうして殿下はわたしに言ってくださらないのですか？」

ミルイヒは眉間にしわを寄せ、痛々しく目を伏せた。

「だから、そこがエルネラのひねくれなんだ。しかし、貴殿から一言言えば、きっと応えてくれるだろうよ。……まあ、困った応え方だろうけど」

ミルイヒは弱々しく首を振った。

——言えない。

エルネラを前にして、言うことなどできはしない。泣きたい気分だった。どうしてわたしはこうまで臆病なのだ？

ランディと青年の話——エルネラが自分を愛しているという話が本当ならば、強姦まがいにもエルネラ

を抱いて、自らそれをつぶしてしまったことになる。きっとあきれてしまったに違いない。もう愛してなどいないに違いない。最後に見たのはそういう顔だった。

自分の気持ちをさっさと告げていたのならば、こんな事にはならなかったかもしれない。だが、それはあくまでも推測の域を出ないし、もはや取り返しのつかない過去のことであった。

ミルイヒは青年を静かな瞳で見つめた。

「あなたはいったい殿下の何なのですか？」

「剣の師匠、とでもいったところかな？　気が向いたときだけだけど。わたしはエルネラに特別な感情は持ち合わせていない。エルネラが失踪しようとのたれ死のうと、かまいやしない」

ミルイヒはその言葉に嘘はない気がした。この男は切り裂き魔なのだ。エルネラでさえも眉一つ動かさずに殺すことができるだろう。

ミルイヒに卒然、寒気が襲った。青年に身体の自由を奪われていることを思い出したのである。

エルネラを悲しませるようなことはしたくないと言っていたが、それは本当なのだろうか？　このまま自分は殺されるということはないのだろうか？　何しろ相手は、手当たり次第に人を斬っている切り裂き魔である。

死ぬことは恐ろしい。しかし、このまま殺され  
たっていいと思う。エルネラにあのような手ひどい  
仕打ちをしておいて、のうのうと生きていることな  
んでできない。

ミルイヒは唾を呑み込み、恐る恐る声を発した。

「わたしを……」

殺すのですか？

——と言いかけたとき、

「ミルイヒを放せ！」

気迫のある声がミルイヒの言葉を詰まらせた。

青年の肩越しに、青年の長くほっそりとした首に  
剣を突きつけている、ランディの姿が見えた。

エルネラはあてもなく暗い路地をさまよって  
いた。その乳白色の頬は涙に濡れ、緑の瞳は焦点を結  
んでいない。

ミルイヒも自分を愛していた。

——その事実打ちのめされた。

なぜ今、それを知らなければならないの？ もう  
すべて吹っ切ったはずだったのに、なぜまた引き戻



されなければならないの？ ミルイヒを忘れ、自由を得るはずだったのに……。

苦悩と甘美がない混ざったあの夜、熱い吐息でささやかれた愛の言葉。それはまだ耳に残っている。

エルネラはぎゅっと目をつむり、熱く火照った耳朶を人差し指と中指で挟んで軽くつねった。消そうにも消せやしない。あれがすべて本心だったなんて……。

嘘であったらどれだけ気が楽だっただろう。嘘であると思っていたからこそ、王城を飛び出すことが、ミルイヒを忘れる決心をすることができたのだ。

後悔は好きではない。しかし、激しく後悔していた。

わたしが素直に告白していれば……決闘などしなければ……婚約破棄などしなければ……わたしは今頃……。だが、もし過去にさかのぼることができたとしても、自分は同じことをしたに違いないだろうし、ミルイヒを前にして愛してるなどとは死んでも言えないだろう。

エルネラは首を振った。今さら戻ることなんてできない。

王城にも。ミルイヒのところにも。

すでに一步は踏み出してしまった。踏み出したか

らには前だけを見つめるしかない。

エルネラは涙を拭い、顔を上げた。

大きな月は中天にさしかかっていた。月明かりを真っ向から浴びるエルネラの姿は、凜とした美しさと気高さに満ちている。

エルネラはランディから奪った剣を握りしめ、この一帯から抜け出すべく、きびきびと歩き出した。

どこを歩いても同じような風景が続いているように思えた。

入り組んだ狭く暗い路地。威圧的に立ちはだかる建物群。この建物の一つに入って屋上から旧市街を見下ろし、方向を定めようと一度ならず思った。だが、もしその建物の中にあの襲撃者たちが潜んでいたら？ そう思うと到底入る気にはならなかった。

エルネラは、ともかく己の足に任せて歩いた。大きな路地に出れば何とかなるかもしれない。しかし、どんどん奥深くに入っていくような気がしてならなかった。

突然、鋭い寒気を感じて立ち止まった。冷たい汗が背中を伝い、エルネラは大きくあえいだ。なんなの、この感じは？

空気がぴんと張りつめていた。皮膚の表面がぴりぴりする。唇が乾く。

なんの気配も感じられない。しかし、何かが違

う。先ほどと同じ場所であるはずなのに、まったく異なったところへ突然移されたような気分である。

エルネラは背後でわずかな鞘ずれの音を聞いた。反射的に、剣を抜き放ちながら振り向いた。

白光がエルネラの瞳に飛び込んできた。耳障りな金属音が辺りに響く。すんでの所で白刃を受け止めていた。しかし、エルネラの耳には、激しく脈を打つ己の心音が他人事のように響いていた。

少しでも遅れていたら死んでいた!!

合わせた剣越しに、月明かりに黒々と輝く目があった。エルネラは言いしれぬ恐怖に身をすくませた。その瞳には今まで現れた襲撃者たちにはない、底なしの狂気があった。

エルネラの頭の中で警鐘が鳴り響いた。

だめ、だめ！ この男と剣を交えてはだめ！ 死ぬわ!!

だが、為すすべはなかった。

男は息つくまもなく剣を繰り出してきた。これを受けぬわけにはいかない。受け損ねたら即、死が待っている。受けるのすら精一杯なのだから、攻撃して相手がひるんだ隙に逃げるなどということはできるはずがなかった。

恐怖はいや増しに増した。しかし、その心とは裏腹に身体は何とか動いているようだった。自分の身

体ではないような気がした。

活路が見えない……。どのようにここを切り抜けたものか考えを巡らすが、空回りするだけだった。

男の剣技は実に鋭いものだった。その一刀一刀に無駄がない。一刀一刀に狂気と殺意がこもっている。それを受ける度に、一時的な安堵と、次に迫る一撃への恐怖を感じた。

エルネラの呼吸は次第に荒くなり、足元もおぼつかなくなってきた。腕がしびれ始め、気力だけで剣を振るっているようなものだった。

だめなの？ やっぱりだめなの？ わたしはこんなものだったの？

絶望にとらわれたその時、白刃がその身を切り裂いた。

エルネラは目を見開いた。

——熱い……。

斬られたと思しき部分が、熱を放っているかのようだった。

手から剣が落ち、エルネラはそのまま倒れた。その動きがひどく鈍く感じられた。まるで、時間がゆっくりと流れているかのように。

エルネラは目をしばたいた。目の前に白い靄がかかってきた。何度しばたいてもそれは晴れない。徐々に徐々に世界は白くなっていく。

すべてが真っ白になったとき、ミルイヒの顔が浮かんだ。エルネラは弱々しく笑った。

あなたは最後まで無愛想なのね……。

エルネラの頬に、一筋の涙が月光に輝きながら流れ落ちた。まるで、最後の力を振り絞って燦然たる輝きをもって落ちていく、流れ星のように。

急転直下、世界は闇に包まれた。

## 08.黒髪の青年

「これはこれは、わたしとしたことが……」

剣を突きつけられているにもかかわらず、黒髪の青年の顔はほころんでいた。

「ミルイヒを放すんだ！」

ランディは威圧的に声を発し、突きつけた剣に力を込めた。

ミルイヒははっとしてその剣を見た。あれはわたしの剣……。

「ああ、すまない」

青年はミルイヒの腕をひねりあげていることを忘れていたかのように言い、あっさりと腕を放した。

ミルイヒはほっとした。

「こんなこと、するつもりはなかったんだ。けれど、彼が斬りかかってくるからしょうがなく……」

「黙れ！ 両手をあげて、ゆっくりとこちらを振り向け」

青年はため息をつき、ランディの言うとおりにした。

青年の顔を認めたランディの目が丸くなった。その手から剣が落ちた。

「ランディ、何をしてるんだ！ こいつは切り裂き魔なんだぞ!!」

ミルイヒの叫び声は、あたりに虚しく響き渡った。

青年とランディは、啞然とした顔でミルイヒを見た。

一瞬、沈黙が世界を支配した。

青年の顔が見る見るゆるみ、ついには高らかな笑いがはじけた。

ランディの顔が見る見る紅潮し、唇を震わせて口が開いた。

「ば、ば、ば……ばか———っ!! お、おまえ、なんてことを！ おまえって奴はどうして……！」

ミルイヒはランディの剣幕と声調に目をしばたいた。

ランディは一瞬で顔を青くさせ、素早く青年にひざまずいた。

「申し訳ありません！ 王族をお守りする立場でありながら、殿下に剣を向けるなんて……近衛隊の名折れです」

ようよう立ち上がりかけたミルイヒは、その言葉に啞然となった。

——「殿下」だって!?

頭の中を疑問符が埋め尽くす。

青年は朗らかに笑った。

「わたしは貴殿らに守ってもらわなければならない

ほど弱くはないよ。暗くてよくわからなかったことだろうし、友人を助けるということは大事なことさ。気にすることはない。——さ、いつまでもそうしていないで立ちなさい」

ランディは決まり悪そうに立ち上がり、ミルイヒをちらりと見た。鋭い視線だ。

「こいつが何をしたかはだいたい想像がつきませんが、悪気はないんです」

「いや、何、ちょっと遊んでもらっただけさ」

青年はミルイヒの顔を見て微笑んだ。

ミルイヒは驚きを隠せぬまま、恐る恐る声を発した。

「あ……あの……」

青年は目をしばたかせた。

「何？ まだわたしがわからない？」

青年はあきれたようにため息をついた。

「十年くらい前に、君の父親と一緒に会ったこともあったのだけれどなあ。……ま、最近はめっきり公式行事にも夜会にも参加してないからね——というか、参加させてもらえないと言った方がいいかな。忘れられて当然かもしれない。しかし、わたしは忘れがたい美男子なのにねえ」

と、あっけらかんと言う。

だが、いまだ青年が何者であるかがわからず、ミ



ルイヒは気まずげにランディを見やった。

ランディは厳しい顔をしていた。心なしか紅潮している。怒りのためか、羞恥のためか？

「バカっ！ おまえは近衛隊の恥さらしだ。王家の方のお顔も知らないでなんとする!? この方は、エデュアルド・ラン・アルヴァーノ殿下だ」

ミルイヒは目を見開いて、青年の美しい顔を今一度見た。青年は微笑んだ。

頭の中を覆っていた白い靄が一気に吹き飛んだ。

思い出した！ エデュアルド・ラン・アルヴァーノ。稀代の剣士でありながら、その奔放ぶりで聖騎士の称号を得ることができないでいるという噂の王弟だった。エルネラの叔父にあたる。

ミルイヒはかっと顔を赤らめた。耳までも赤くなった。なんてことだ！ 自分の愚かさにはほとんど頭が痛い。いったい自分はどれほどの無礼をしてしまったことだろう！

「も、申し訳ありません……なんと申したら……」

ミルイヒは膝をつき、震える声で言った。その顔は青ざめていた。

「立ってくれ。わたしも貴殿をからかいすぎた」

「はあ……」

そのような言葉をかけてもらっても、ミルイヒの消沈した心が浮上できようもない。エデュアルド殿

下を切り裂き魔と間違えるなんて……エデュアルド殿下に嫉妬するなんて……なんという愚か者なのだろう！

「どうしてまた、わたしを切り裂き魔などと？」

ミルイヒは喉がひりつくのを感じた。唇はかさかさに乾いている。しかし、ぐっと唾を呑み込み、躊躇いがちに話し出した。

「以前出会った切り裂き魔に、髪の色や背格好が似ていたんです。それに……」

青年はため息混じりに口を挟んだ。

「わたしの方がずっと美男だろうに」

ミルイヒはその言葉が聞こえなかった振りをして続けた。

「先日殿下にあったとき、殿下は……」

青年はミルイヒが話そうとする意をくんだようにうなずいた。

「あれはね、殺鬼にとり憑かれた者だったんだ」

「殺気？」

ミルイヒとランディは怪訝な顔をした。

「違う。『殺鬼』だ。凶器足りうるものには殺鬼が憑いている。それはまれに人にとり憑き、殺意を抱かせる。——と、古文書にある」

「なんですか、それは？ 聞いたことがありません」

「『憑く』だなんて、魑魅魍魎ですか？」

ミルイヒの言葉に、青年は吹き出した。

「公爵はロマンチックな御仁だねえ。いや、貴殿の場合、生き様自体がロマンチックなのか」

と、自分の言葉にまた笑い出した。

幻想世界の住人であるかのような青年にそういうことを言われると、なんとなく癪である。

ミルイヒの仏頂面に気づいたのか、青年はようやく笑いをおさめた。

「殺鬼ってというのは、ちょっとしたたとえだよ。いるじゃないの、刃物を持つと人が変わったり、我を忘れたりする輩が。そういう輩らを、我々の間では『殺鬼憑き』って言うんだ」

「我々」とはいったい、どういう人たちのことを指しているのだろうか、とミルイヒは思ったが、問い返す間もなく、青年の話は続いた。

「人を殺すことに味を覚えて、習い性になる者もいる。血塗られた世界でなら、それで功名を立てることもできよう。だが、平和な世界でなら、ただの殺人鬼だ。やっていることは同じでもね」

青年の瞳がわずかに陰った。

「人々は平和に倦怠し、何かしら刺激を求めている。禁止されている決闘——ま、『決闘』といっても遊び程度に過ぎないから、大目に見られているが

――に、こぞって集まってくるように。

この地域の者たちはその際たるものだ。行き場のない激しいものが、ここに寄り集まって澱んでいる。

知っての通り、我が国には徴兵制度がなく、ここ二百年余り、これといった紛争も起こっていない。だから、そういうものに対する耐性が皆無である者、身につけた力を試したいと思う者が、とり憑かれやすくもある」

「それは……」

と、ランディは言いかけて、一瞬躊躇したかと思うと、言い直した。

「それはまた……物騒な話ですね。平和に倦怠するだなんて……平和が一番じゃないですか。誰だって、死にたくないですよ」

「そりゃあそうだね。でもまあ、こういう考え方もある。自分さえ無事であればいい――ってね」

「……」

「ぎりぎりのところで自分に災禍は及ばないと思っている。最悪の事態は想像の埒外……いや、実際そうなるまで、何にもわからないんだよ。そして、気だるい平和の方がましだったと思い知ったとき、すべては手遅れになっているのさ」

ランディが口を開いた。

「どうすればいいんですか？」

「何を？」

「その……殺鬼憑き、です」

「なんだい？ 公爵の言葉にあてられでもしたか？

たとえだと言ったろうに」

「いえ、わたしがお訊きしたいのはそういうことではなく、処し方です」

「殺られると思ったら、殺ればいい。それだけだ。何も、特別な力を持っているってわけじゃない。ただ、凶器に……狂気にとり憑かれているだけだ」

「『落とす』ことはできないんですか？」

その問いに、青年は不敵な笑みを返した。

「ランディ卿——」

ランディは耳慣れない呼ばれ方に、むずがゆそうな顔をした。

「——貴殿は、任務とはいえ、人を殺すのが好きか？」

ランディとミルイヒは目を丸くした。

「いえ……？」

青年の妖艶な唇がゆっくりと笑みを形作った。悪魔的な様子の笑みである。

「わたしは、人を殺すのが……斬るのが好きなんだ」

——冷たい風が吹き抜けた。

ふたりと青年の間に、枯れ葉が舞い上がる。青年の黒髪が乱れ、その美しい面を隠した。

ミルイヒは息を吞もうとしたが、それすらもかなわない金縛りにあっていた。ランディも同様のようである。

青年が切り裂き魔でないだなんて嘘だと思った。月下の闇に潜む切り裂き魔——その言葉がなんて似合うんだろう。この目の前の青年には。

青年は、剣の鞘に左手をかけ、親指で柄を押し上げた。かちりという、剣が鞘から解き放たれた音とともに、ミルイヒの心音が跳ね上がった。だが、身体は動かない。妙な問いかけをしたランディを呪った。

——再び、風が吹き抜けた。

青年の黒髪が乱れ、その美しい面があらわになった——途端、青年の右手が剣の柄にかかった。

ミルイヒは息を吞んだ。

次の瞬間、かちりと音がした。

「おっといけない。こんな事をしている場合ではなかった」

剣は再び鞘に収められていた。

青年は何事もなかったようにこちらに背を向け、歩き出した。

からかわれた……のか？

釈然としない思いが、ミルイヒの心に苦々しく絡んだ。

「殿下！」

ランディが青年のあとを追っていた。青年は踵を返す。

「任務を妨害して悪かったな。さあ、エルネラ捜しに戻りたまえ。わたしにはわたしの成すべき事がある。今宵こそ、切り裂き魔を退治る」

「殿下が切り裂き魔を？」

不可解である。いかに王都警備隊の手に負えぬとも、なぜ王弟が出張ってくる必要があるのか？

ミルイヒの疑問を察してか、青年は語り出した。

「あれは……切り裂き魔はわたしの不手際なんだ。あんな男に剣を教えるとは、わたしも見る目がなかったねえ」

ミルイヒとランディは、まん丸くなった目を見合わせた。

「え、ちょ、ちょっと待って下さい。それは、殿下がくだんの切り裂き魔の師匠ってことですか？」

「平たく言えばそうだね。わたし自らが仕込んだ剣だ。わたし以外の手には負えまい。奴もそのことをわかっているんだろうな。なかなかわたしの前に現れない。が、今夜、この、王都の平和につまはじき

にされた者たちが集まるところで、奴をついに見つけたよ」

「切り裂き魔がここに!？」

ランディが常にはあらぬ素っ頓狂な声を上げた。

「ここにいる者たちすら、奴の前に立ちはだかることはできまいよ。生なかな剣力じゃない」

ミルイヒはランディを不思議そうに見た。ランディは顔を青くさせている。

「なんてことだ……。エルネラ殿下が、エルネラ殿下がここにいるんです！」

「なんだって!？」

ミルイヒはランディと勝るとも劣らぬ声を出した。ランディは唇を噛んでうなずいた。

「さっき、エルネラ殿下と会ったんだ。……だが、剣を奪われ、逃げられてしまった」

「どうして引き留めなかったんだ!？」

ミルイヒは青ざめ、ランディにつかみかからんばかりに詰め寄った。ランディはその勢いに気圧されたようにたじろいだ。

「引き留めたさ！ ……だが、その……不可抗力ってやつで……」

ランディははにかみながら、しどろもどろに言った。

「あの娘もけったいなところにいたものだね。わた



しはてつきり……」

と、青年は何か思うところがあるように言い、

「実戦経験を積みにでも来たのかねえ。ここの者たちなら、いい相手にはなるだろうよ。しかし、切り裂き魔は荷が重すぎる。もうこの世にはいないかもなあ」

と、とんでもないことを平然と言った。

ミルイヒはさらに青ざめた。

「殿下、物騒なことを言わないでくださいよ！」

声を出せぬミルイヒを代弁するかのよう、ランディが言った。

「本当の事さ。エルネラの技量では切り裂き魔にはるかに及ばないね。女にしては筋がよかったが……残念だな。なかなかおもしろい娘だったのに」

青年は悲しそうな微笑みを浮かべた。しかし、言葉以上の悲しみはないようだった。

ミルイヒは不敬にあたるとわかっていても、青年をにらまずにはいられなかった。エルネラ殿下が死ぬ、だって!? そんなバカなことがあるものか！

青年はミルイヒの鋭い視線に、意味ありげな笑みで応えた。

ミルイヒは唇を噛んで目をそらし、落ちていた剣を拾い上げ、鞘に戻した。

「ランディ、エルネラ殿下はどちらへ向かわれたん

だ!?!」

「それが……さっぱりだ。俺はエルネラ殿下を捜しておまえを見つけちゃったんだ。——って、おまえ、おい……！」

ミルイヒはランディの言葉を最後まで聞かずに走り出した。

「ちょっと待て！ おまえが呼び子を持ってるだろ！ 応援を呼ぶんだ！」

ランディはミルイヒのあとを追った。しかし、ミルイヒの足は驚くほどに速く、その姿は徐々に闇の中へ消えていく。舌打ちをしたからといってどうにもならない。

「……待てたら!!」

ランディは声の限りに叫んだが、ミルイヒの姿は完全に闇に消えた。路地は入り組んでいて、どちらへ走っていったかはもうわからない。

ランディは諦めて立ち止まり、膝に手をついて肩で息をした。汗がしとどと流れ落ちる。

「彼は精神面が弱いね。感情に流されやすい」

ランディはその声にひどく驚かされ、振り返った。そこには、落ち着いたたたずまいで黒髪を掻き上げる青年がいた。ランディは目を見開き、しばたいた。

しかし、ランディが発した言葉は、青年がどのようにしてここまでやってきたか、ということではなかった。それを訊くにはなにかしら恐ろしいものがあった。躊躇われたのだ。

「……だ、誰だって、あのようなことを聞いたら心静かではありませんよ。なぜあのようなことを？」

「理由なんてないよ。思ったことを口にしたまでだ」

青年は静かな面持ちで言った。そこに何らかの真意を読みとるのは困難だ。

ランディは唾を呑み込み、わずかに眉間にしわを寄せた。身体中に張り付いている汗が一気に冷たくなったように感じられた。

「あのまま――激情に駆られたまま切り裂き魔に会おうものなら、彼は確実に死ぬだろう。勢いだけで討てる相手ではない――貴殿と決闘したときの彼ならば、もしやということもあるかもしれないが。しかし、ここで彼を死なせるのは惜しい。さほど見込みがあるようには思えないのだが、何か……何かが……」

と、遠くを見ながら独り言のように言うと、青年はランディに微笑んだ。

「――さて、どうやら死にたがりが集まってきたようだね」

ランディは遠巻きに周りを囲まれている気配を感じた。その数は十近い。

「哀れな者たちだ。無法者でありながら、自分たちの世界と外の世界を隔て、それを壊すことをよしとしない不文律に縛られている。自己保身が強いにもかかわらず、戦いに身を投じなければ気が済まない。殺伐とした世界に生きる彼らの目に、切り裂き魔はいったいどのように映るのか……」

青年は腰に佩いた剣をさっと抜いた。月光を跳ね返す剣身の残影が青白くあとに引いた。その様は実に優美であり、これから人を斬ろうとしている者には見えなかった。しかし、冷たく冴え渡るものが芯にある。

「殿下……俺はその……」

ランディは決まり悪そうな顔で、躊躇いがちに言った。

「わかっている。今度からは短剣くらい持っていたまえ」

ランディは辺りに注意を払いながら、軽く頭を下げた。

「申し訳ありません。すぐに加勢致します」

ランディは、青年が討った者の剣を奪うつもりだった。

「その必要はないと思うがね」

## 09.切り裂き魔

薄闇に沈んでいる通り。

冷たい風が落ち葉と共に吹き抜けた。落ち葉はひらひらと空高く舞い上げられたが、突然やんだ風にほっとしたように再び石畳の上に落ち着こうとした。しかし、折り悪く、軍靴によって蹴散らされた。

軍靴の音が辺りの建物に反響していた。荒い呼吸がそれに不協和音を加える。しかし、その発信者たるミルイヒには、早鐘を打つ己の心臓の音さえも耳に入っていない。

汗で張り付き、重くなった服が暑苦しく、鬱陶しかった。マントはすでに投げ捨てている。

幾度となくエルネラの名を呼ばわったが、返ってくるのは静寂だけだった。喉は涸れ果て、もはや唾すら出ない。

あてもなく走り続けてもエルネラを見つけることはできない。十分承知している。しかし、エルネラはこの一帯のどこかにいる。切り裂き魔がいるこの一帯に！ それだけで、いてもたってもいられようはずがない。

青年の話信じているわけではない——信じていないからこそ、一刻も早くエルネラを捜し出さねば

ならない。エルネラが死んでしまうなんて、あの、  
気高く汚れなき瞳で——そこに秘められる想いがな  
んであれ——見つめられることがなくなってしまう  
なんて、考えられないことだ。

ああ、殿下！ エルネラ殿下！ どこにいらっ  
しゃるんです？ 幾百、幾千の神よ、どうかエルネ  
ラ殿下にご加護を！

——と、建物の陰から姿を現した月に祈ったと  
き、ミルイヒは何かにつまずいて転んだ。完全に不  
意をつかれ、受け身をとる暇もなく、ひび割れた石  
畳に突っ伏していた。

急に動きを止めた身体は、猛烈な熱と汗を発した  
ように感じられた。地面の冷たさは心地よく体温を  
奪う。立ち上がらなければならないという意思に反  
して、身体は気だるく、身動きを許さない。

新鮮な空気を求めてあえぐ口をぐっと引き締め、  
かさかさに乾いた唇を舐めた。鼻から大きく息を吸  
い、静かに口から吐き出す。それを何回か繰り返す  
ことで、ミルイヒはようやく身体を動かすことがで  
きた。

鉛のように重い身体を叱咤して、立ち上がるところ  
まではいかなくとも、上体を起こした。そして、  
つまずいたものを見ようと振り返った。

ミルイヒのかすみを帯びた目が、くっきりと焦点

を結んだ。そこにあったものは――ミルイヒがつま  
ずいたものは、断末魔の表情を浮かべた死体だっ  
た。

ミルイヒは息を呑んだ。しかし、それだけだっ  
た。見ず知らずの死体に感慨など持ちようはずもな  
い。おそらく、同僚が斬ったものだろう。

ミルイヒは立ち上がった。もはやその死体に目も  
くれない。エルネラを捜すのが何よりも大事なの  
だ。

気は急くが、身体はまだままならなかった。走る  
ことができそうにもない重さが足にある。一步踏み  
出そうとして、足を止めた。そして、大きく目を見  
開いた。恐るべき光景が目の中に入ってきたのであ  
る。

月明かりに不気味な青白さをもって映し出された  
死体が、通りのそこここに転がっている。その数は  
八体。石畳は血にまみれ、赤黒く月明かりを反射し  
ている。

今までまったく気づかなかった。エルネラのこと  
しか考えずに走り続けていたミルイヒには、その惨  
憺たる光景は目の外だったのだ。

死体には同僚の姿もいくつかある。白い隊服はす  
ぐに目に付く。しかし、今は吊っている暇はない。  
エルネラを捜さねばならない。

ミルイヒは死体の間を通り抜けようとしたが、なぜか死体から目が離せなかった。何かが違う。何かが引っかかる。

ここで大きな斬り合いがあったのは確かだろう。だが……

ひらめきがミルイヒの目を見開かせた。

死体が握る剣のいずれにも血糊がない！ ——いや、あることにはあるが、それは人を斬った剣の血糊ではない。おそらく、己の返り血だろう。

ということは、互いを斬り合ったというわけではなさそうだ。襲撃者たちの技量はどうあれ、近衛隊の一員たる技量を持つ者が誰ひとり、一太刀も浴びせることができなかったなどということがあり得るだろうか？

あるとしたらそれは……

——切り裂き魔しかいない。

その考えに確信の寒気を感じた。と同時に、激しい動悸に襲われた。左腕がうずく。

切り裂き魔がこの近くにいる!?

静かに剣を抜く。その手はねっとりと汗ばんでいる。

ミルイヒは辺りを注視しながら歩き始めた。



先へと導くように連なる死体を通り抜けた先に、通りのど真ん中に横たわる死体があった。それは先ほどのどの死体よりも、ずいぶん小柄なようだった。

——女だ。

それはいわれなき確信。しかし、それを認めたくはなかった。そんなはずがない！

近づいてその顔を見れば明らかである。だが、ミルイヒにはその勇気がなかった。

一歩も動くことができない。動悸は否応もなく高鳴り、冷たい汗が背中を流れるばかりである。剣を握る手が心なしか震える。

奥歯を噛みしめ、必死に己に言い聞かせた。あれがエルネラ殿下であるはずがない。殿下はどこか他にいらっしゃるはずだ。生きているはずだ！ 絶対に!!

意を決し、その小柄な死体のそばに近寄った。唾を呑み込み、恐る恐るその顔を見る……安堵の深いため息を吐いた。

——エルネラではなかった。

三十代半ばくらいの女である。襲撃者の一味に違いない。

恐ろしい脱力を覚えたが、すぐに気を引き締めた。まだ楽観できない。切り裂き魔がいることには違いないのだから。

再び先を急いだ。足はまだ少し重いが、小走りはできた。

しばらく走ると、またぞろ切り裂き魔の手によると思しき死体の連なりに出会った。切り裂き魔は今夜、いったいどれだけの人を斬ろうとしているのだろうか？ 一人二人で収まるような殺鬼ではないのだろうか？

その死体も通り過ぎて、小さな路地に入り込んだ。その瞬間、いいしれぬ寒気に襲われた。汗が急速に冷え、震えが全身に走る。肌がちりちりと総毛立つ。まるで凍り付けにされた気分だ。

息苦しさを感じ、ようよう息を呑んだ。なぜか入ってはならない場所に思えた。

見開いた目は乾きを訴えるが、瞬きできなかった。薄暗いその路地には、そこかしこに深い闇が漂っている。目に見えぬ、深い闇が。目を閉じてしまえば、あっという間にそれに取り込まれてしまいそうな雰囲気があった。

その闇の一部に、死体が一つ転がっていた。またしてもどきりとさせられた。それは小柄だった。

しかし、今度は気後れしなかった。うつぶせに転

がっている死体の髪は短く、褐色である。エルネラではない。

すぐに興味を失ってその死体から目を離し、ぐっと剣を握り直した瞬間、首筋にちくりと針が刺さったような感覚があった。覚えのある感覚だ。切り裂き魔の刃を受けた左腕が痛む。

振り向きざま、迫りくる白刃を受けた。甲高い、耳障りな音を立てて、二つの白刃はこすれあった。

その一瞬、今度ははっきりと相手の顔が見えた。げっそりとした顔に漆黒の眼窩があった。その瞳は何も映していないかのように虚ろであるが、底知れぬ狂気を秘めているように思えた。その視線を通して、刺し貫かれるような殺気が伝わってくる。腕に自信のない者ならば、それだけで失禁しかねない。

——これこそが間違いなく切り裂き魔だ！

ミルイヒはその視線を驚くほど静かに受け止めた。冷静だった。切り裂き魔の殺気は、エルネラへの熱を消し去るに十分な冷たさを持っている。

ミルイヒは剣を払いのけ、後ろに跳びすさって間合いを取った。しかし、切り裂き魔は瞬時に間合いを詰め、剣をひらめかせた。

その剣速は目を見張るものがあった。辛うじて、逆手持ちの左の短剣で受ける。しかし、うまくその

力を殺すことができず、剣身は折れ飛ぶ。腕がしびれた。

折れた短剣を切り裂き魔に投げつける。切り裂き魔は難なく弾く。その間にミルイヒは大きく間合いを取った。今度は容易に近づけさせはしない。足にはいまだ疲労が残っているが、無視できるほどの状態である。

ミルイヒは青眼に構え、切り裂き魔の様子を窺った。切り裂き魔に隙はない。斬り込む余地がつかぬ。

ミルイヒは闇雲に打ち込むような勇気を持ち合わせてはいなかった。構えを少しでも解いたら、隙を見せてしまいそうである。切り裂き魔がその隙を見逃すはずがない。

切り裂き魔は右上段に構えたまま、じりじりと、だが、滑らかに歩を進めた。ミルイヒはそれに伴い、すり足で後退した。すぐ後ろには壁がある。

切り裂き魔は、ミルイヒを完全に壁に追いつめる前に足を止めた。

「その手は二度も通用せんぞ」

驚くべきことに、切り裂き魔から声が発せられた。ミルイヒより十くらい年上に見えたが、その声は老成したようにしわがれていた。

ミルイヒは息を呑んだ。しかし、それを表面には

表さなかった。隙を見せては駄目だ！

「二ヶ月ほど前、俺の左肩を突いた者だろう？」

切り裂き魔は上段に構えた剣をゆっくりと降ろした。

「……そうだ」

ミルイヒは緊張を解かぬまま、慎重に答える。

切り裂き魔は薄い唇に、社交的とは言い難い楽しいな笑みを浮かべた。

「おまえで二人目だな。俺と剣を交えて生きていた者は。……いや、一人目と言った方がいいかもしれないな。師匠は別格だ」

師匠——エデュアルド殿下のことか……？

「……誰も彼も骨のない奴らばかりだ。刃を見せつけるだけで、ある者は悲鳴を上げ、ある者は腰を抜かす。王都警備隊だとて変わりはしない。ちょっとばかり剣が使えるだけだ。近衛隊なんて、それよりも話にならない。名前だけだ。『決闘ごっこ』の技術だけを磨いている、プライドだけは高い腰抜けども。ここの連中も威勢がいいだけだな。ガキの反抗期みたいなもんだ」

切り裂き魔は盛大に笑った。聞く者をうそ寒くさせる、狂った笑いである。

ミルイヒは眉をひそめ、剣を握る手に我知らず力を入れた。

「他国をして『眠れる獅子』と言わしめているこの国が、本当は猫であることを知ったら、皆、どうするだろうな？」

切り裂き魔は楽しそうに喉の奥で笑った。

「おまえは……間者か？」

「いいや。血は生粋じゃないが、アルヴァ生まれのアルヴァ育ちさ。国同士のことなんぞ、俺にとってはどうでもいいこと」

「ならば、なぜこのようなことを？」

それは言い得て妙だった。だが、殺鬼にとり憑かれているとはいえ、この男には明確な意思があるように思えてならなかった。負の感情が殺鬼を招き寄せるとしたら、それは……。

切り裂き魔の瞳が暗い輝きを帯びたように思えた。しかし、熱があるわけではない。突き刺さるような視線は相変わらず冷え冷えとしている。

「……憎かったのさ。俺の力を認めようとしぬ奴らが。俺は……強い。精鋭と名高い——」

切り裂き魔は嘲るように鼻で笑った。

「——近衛隊の誰よりも。俺は辺境警備で終わるような男じゃない。誰の口の端にも上ることなく死ぬような存在じゃない。それだけの技量、度胸を持っている。それを活かす機会、地位が必ず巡ってくると思っていた。ずっと！」

——だが、現実はどうだ？ 天下は泰平で、大きな出世が望めるような機会はまるでない。それならば、こつこつ真面目に勤めていればいつかは……なんてことは絶対にない。実力なんて関係ないんだ。必要なのは、金とコネ！ それだけなんだ！」

切り裂き魔の言葉に、驚きを禁じ得なかった。周りに流されるままに生きてきたミルイヒにとって、それは思いもよらない、考えたことすらないことである。

近衛隊に所属しているのだから、いつの間にかそこにいたという感覚でしかない。別に、どこに所属していようと関係なかった。どうでもいいことだった。

しかし、ある者にとってはそれは大きな羨望と怨恨だったのだ。それをして、このような行動に走らせるほどの。

切り裂き魔はミルイヒをにらんだ。

「おまえもさぞかしいいところのボンボンなのだろうな——その割には骨がある。俺の剣を生身の腕で受け止める奴なんて初めてだ」

ミルイヒは息を呑み、恐る恐る声を出した。

「……見返すためだというのなら、なぜ……なぜ、無辜の民にまでその手を伸ばす？」

切り裂き魔は静かに笑った。

「最初は、おまえの言うとおりに、見返すためだった。威張り散らしながら街を闊歩している騎士たちの本当の姿を、皆に知らしめてやりたかった。——だが、もうどうでもよくなった」

切り裂き魔の瞳に尋常ならざる光がきらめいた。ほのかに頬が紅潮している。

「人を斬るという快感を知った今、相手は誰だっていいんだ。怯える者を斬るのも、逃げまどう者を斬るのも、おまえのように腕の立つ者と剣を合わせるのも、皆、楽しいことには変わらない。そうそう、俺を捕まえようと奔走する警備隊をからかうのも楽しいな。

……刺激、刺激が欲しいんだ。世の中、刺激がなさ過ぎる。名ばかりの決闘なんて見たくも、やりたくもない。あんなのは子供の遊びだ。真の決闘はもっと刺激的なはずだ。愚かだ。皆、なぜそのことに気づかないんだ？」

ミルイヒは眉をひそめた。狂ってる……殺鬼にとり憑かれているのであれ、なんであれ、この男は狂ってる！

切り裂き魔は再び剣を構えた。ミルイヒに緊張が走った。

月がわずかに建物の陰から姿を現し、切り裂き魔の姿を縁取った。影の濃くなった顔に、双眼だけが



浮かび上がっているように見えた。

「さあ、おしゃべりはここまでだ。どうだ、だいぶ疲労も回復しただろう？」

ミルイヒは目を見開いた。切り裂き魔はわたしが回復するのを待っていた……？

「本来の力を出してくれた方が、より楽しい」

切り裂き魔はミルイヒの意を汲んだように言った。

ミルイヒは静かに息を呑んだ。

「……それが自分の身を危険にさらすようなことでも？」

「ああ。危険なほど楽しいものさっ！」

切り裂き魔は素早く踏み込み、ミルイヒに斬りかかった。ミルイヒはそれを受け流しながら、背にした壁から抜け出した。

ほんの少しの間の休息でも、足が心なしか軽くなったように感じられた。

剣を構え直すのも束の間、切り裂き魔は息も尽かせぬ勢いで打ち込んできた。一刀一刀が鋭く、切り返しが速い。また、それは正式な剣術を身につけた者のそれであり、つけ込む隙がなかった。

ミルイヒはそれをすべて受けた。しかし、それは辛うじてのものである。

切り裂き魔の動きを読んでいるわけでも、完全に

見切っているわけでもない。切り裂き魔の次の動きを見ることのできるぎりぎりの間合いをとり、その微妙な見切りで反応しているに過ぎなかった。

しかし、ミルイヒは受け身一方というわけではなかった。切り裂き魔の攻めに押されて後退すると、途端に切り裂き魔は剣をひいた。まるで、ミルイヒを挑発するかのよう。

ミルイヒはそれと知りながら、ここぞとばかりに剣をひらめかせた。この機会をものにしなければ、勝ち目はない。

だが、すべては見切られていた。ミルイヒが打ち込む前に、すでに受けの体勢が整えられているのだ。

切り裂き魔は遊んでいる。すべてに余裕があった。剣にも、表情にも。

ミルイヒは切り裂き魔の掌の上で踊らされているに過ぎなかった。勝敗を、生死を――すべてを決めるのは切り裂き魔なのだ。

ミルイヒは言いしれぬ焦りを感じた。切り裂き魔と自分との間には、これほどまでの距離があったのだろうか？

今まで、己は腕が立つ、という意識はミルイヒの中にはさほどなかった。しかし、ちょっとしたおごり――それは、自信とは紙一重のものだ――が生ま

れつつあったのだ。二ヶ月前、切り裂き魔の左肩を突いたのは他ならぬ自分だった。

また、ミルイヒの心の奥底には、黒髪の青年に対する対抗意識がいまだくすぶっているようだった。エルネラの青年に対する好意は、身内ならではもののだということは今も十分承知している。しかし、自分だけが切り裂き魔を討てる、などということを知ったら、そんなことはない、わたしにだってできる、と張り合ってしまうものなのだ。なまじ、エルネラが関わっているだけあって、その思いは一層強い。

だが、切り裂き魔は二ヶ月前の切り裂き魔ではなかった。確実に腕を上げている。

その間に自分は何をしていたらうか？ 惚れた腫れたと心を惑わせ、毎夜、女性に慰めを求めるだけだった。そのような時こそ、無心に剣に打ち込むべきだったのではないか？

ミルイヒは己の迂闊さを悔いた。しかし、実らぬ恋などしなければよかった、などとは思わない。

わたしが切り裂き魔の凶刃に倒れたら、エルネラ殿下は悲しんで下さるだろうか？ それとも……—それ以上は考えたくなかった。

黒髪の青年に押さえつけられたときとは違う感情が浮かび上がってきた。あの時は死んでもいい——

むしろ、死にたいと思った。しかし、今は俄然、逆だった。

——生きていたい！

生きてエルネラの元へ帰り着きたい。嫌われていてもいい。自分が死んだあと、エルネラがどうするのかなんて知りたくもない！

ミルイヒの背に冷たい汗がいくつも張りついていた。新鮮な空気を求める喉の奥に、冷たい夜風は意思に反して流れ込んでこない。ひどく気持ちが悪い。

せわしなく剣と剣がぶつかる音がやけに大きく響いた。それには恐怖が伴い始めた。剣を合わせるたびに、ミルイヒは恐ろしい圧迫感を感じた。永遠に続くかのように思える剣戟——しかし、終わらぬということはない。さっさと決着をつけたいという思いと、このままいつまでも続いていて欲しいという思いが交錯する。

ミルイヒと切り裂き魔の技量の差は、絶望的なまでに歴然だった。何度剣を合わせてもそれは変わらない。むしろ、確信が強まるばかりだった。

……死は、そこにある。

気迫までも負けては駄目だと思っけていても、否応もなく引きずられていく……焦燥、恐怖、諦観……

切り裂き魔は目を細め、唇の片端を釣り上げた。  
この世にあらぬ凶悪な表情だった。

ミルイヒは青ざめ、一瞬、剣を持つ手が痙攣し、  
足がすくんだ。

切り裂き魔は踏む込みざま、下段から袈裟懸けに  
斬り上げた。ミルイヒの見開かれた目には、それは  
青白い残影にしか映らなかった。

——その光景はひどく美しかった。

斬り上げられた白刃が鮮やかな血をまとわりつか  
せて、月光に輝いた。滴り落ちる血が、きらめきな  
がらゆっくりと地上に降り注ぐ。ミルイヒはその光  
景を陶然と見ていた。

ああ……わたしは斬られたのだ……。

その思いに達したのは、右脇腹が焼けつくような  
熱を発しているのに気づいてからだだった。おもむろ  
に手をやると、熱いぬめりを感じる。

しかし、焦燥も恐怖もなかった。何も考えられな  
かった。これから死ぬのだという思いも浮かばな  
かった。——そして、エルネラのことも。

剣戟の音と、何者かの叫び声が遠くに聞こえる。  
しかし、ミルイヒにとっては些細なことだった。な  
ぜ、切り裂き魔はとどめを刺さないのだろうか？  
それだけが辛うじて頭の片隅にあった。

透徹がミルイヒを覆いつくす。

月光に明るく照らされた夜空が、すべてを吸い込んでしまいそうに見えた。ミルイヒは何かは抜け出ていくような感覚を覚えた。その感覚に身を任せ、目を閉じかけたとき、すべての感覚を蘇らせる、衝撃的な匂いが鼻をくすぐった。

甘酸っぱく、さわやかな香り——レイエンの花の香。

春の花であるレイエンが今、咲いているわけがない。

ミルイヒは大きく目を見開き、喘いだ。今までなかった右脇腹の痛みが、非情なまでに刺激を訴える。ミルイヒは歯を食いしばってそれに耐え、身を起こしてレイエンの花の香の元を探った。

それはすぐそばにあった。倒れたミルイヒの頭の上に。そこには、先ほど見た褐色の髪の女が転がっていた。

単なる偶然——しかし、心の琴線に引っかかるものがある。

単なる偶然で済ませたい。

偶然に決まっているじゃないか！ 現に、ここに横たわる死体の髪は褐色で、短い。エルネラとは似ても似つかない。

右脇腹がどくんどくと大きく脈打った。血はいまだ止まらない。だが、どうでもよかった。今はこ

の目の前の死体から目を離すことができなかった。

死体から流れ出た血は、まだ冷え固まりきってはいない。触れるとべっとり手に付く。

ミルイヒは恐る恐る死体の腕に触れた。思いのほか生あたたかい。しかし、急速に熱は失われつつある。

——単なる偶然だ！

ミルイヒは再び己に言い聞かせた。だが、なぜ、身体に震えが走るのだろうか？ なぜ、息もできぬほどに胸が苦しいのだろうか？

ミルイヒは唾を呑み込み、褐色の髪をおもむろに掻き上げた。青白い横顔があらわになる。金の長い睫毛が滑らかな頬に影を落としている。まるで、眠っているかのようだ。

震える手で、その頬に触れた。吸い付くような感覚があった。

わからぬわけがなかった。最初からわかっているはずだった。しかし、すべてを否定したかった。すべては夢で、なにもかもが嘘なのだ。

……この世は現実じゃない。

だが、右脇腹の痛みがすべてを肯定する。すべては現実で、何もかもが本当なのだ。そして、目の前の死体はエルネラなのだ。それは動かしがたい事実である。

凍り付いたミルイヒの背に、語りかける声があった。

「やれやれだ。ここの連中は本当に頭が悪い。わざわざ斬られにやってくるのだからな。己の技量もわきまえず、滑稽なことだ。——余計な邪魔が入ったが、まだやれるんだらう？ 傷はそれほど深くないはずだ。もっと俺を楽しませてくれ」

「……」

ミルイヒはつぶやいた。それは切り裂き魔への応えではない。ミルイヒの耳には切り裂き魔の言葉など入っていない。

ミルイヒの唇が小刻みに震えた。

「……さない」

ミルイヒは剣を握りしめた。その手にはうっすらと血管が浮き出ている。

「許さない!!」

夜陰を切り裂く悲痛な叫び声を上げ、振り向きざま剣を振るった。

切り裂き魔はその剣勢に驚いて跳びすさった。おどけたように口笛を鳴らす。

「やる気十分か……」

ミルイヒの瞳には、もはや恐れはなかった。悲愴な憎悪だけが燃えさかっている。何かにとり憑かれた者のようである。



切り裂き魔は歪んだ笑みを浮かべた。

「そうこなくてはな」

ミルイヒは切り裂き魔に襲いかかった。右脇腹の痛みは感じなかった。それ以上の痛みがミルイヒを苛み、駆り立てていた。

嘘だ！ 嘘だ!!

エルネラ殿下が死んでしまっただなんて嘘だ!!

この男がエルネラ殿下を殺したに違いない。この男を殺せば、エルネラ殿下は……

——どうなるというわけではない。死んでしまっただけならそれまでだ。理性ではわかっていても、認めたくなかった。切り裂き魔を殺さずにはいられなかった。

これもまた、一種の「殺鬼にとり憑かれた」状態であるのかもしれない。憎悪と悲しみがミルイヒの心を覆い尽くしていた。もはや、切り裂き魔を殺すことしか考えられない。

ミルイヒの剣技は先ほどまでのものとはまるで違っていた。手負いでありながら、気迫、剣速、足捌き共に、尋常ならざる鋭さがあった。

ミルイヒはひどく感情的だった。しかし、その感情があまりにも純粹でまっすぐであるが故に、理性によって抑制されていた部分が解放されたのだ。

——これがミルイヒの真の実力であった。

ミルイヒは容赦なく切り裂き魔を追いつめていった。主導権は完全に逆転していた。

それでありながら、切り裂き魔はまだ楽しんでる風だった。しかし、余裕はつゆもない。かといって強がりでもない。

突如として剣戟の音がやみ、辺りは静寂に包まれた。

切り裂き魔の目が大きく見開かれていた。口の端から鮮血が流れ出た。その手から剣が滑り落ち、涼やかな音が響き渡った。

その音で、ミルイヒは我に返った。ミルイヒの目に理性の光が戻る。

ミルイヒの剣は切り裂き魔の心臓を正確に貫いていた。血が剣身を伝い落ち、地面に赤黒い血だまりを作った。剣から手を放すと、切り裂き魔の身体はそのまま仰向けに倒れた。

ミルイヒはくずおれた。息は荒く、額からは脂汗が流れる。右脇腹の痛みは想像を絶するものだった。激しい動きで傷口が大きく開いたのだ。

極度の失血により、目が回り始めた。しかし、ミルイヒは気絶するまいと唇を噛んだ。唇に血がにじむ。

ミルイヒは渾身の力を振り絞って、エルネラのところまで這っていった。

息も絶え絶えに、エルネラの身体を仰向けにして抱き起こす。エルネラの顔が、月の優しい光に照らし出される。美しい人形のような——いや、その目を開けることがなければ人形と同じだ。

ミルイヒはエルネラの冷たい頬に触れた。白い頬が血に汚れる。その上に涙がぽつりぽつりと滴り、血と涙が混じり合って流れ落ちた。

ミルイヒはエルネラの耳に唇を這わせた。

「……殿下……エルネラ……殿下」

かすれた声しか出なかった。

言いたいことは山ほどある。

言えなかったことも山ほどある。

しかし、この一言ですべては十分だった。

「愛しています……」

## 10.別離

「静粛に！」

木槌の音が法廷に響き渡り、傍聴者たちの声は静まった。しかし、それは一時的なもので、すぐにひそひそ声がそこここから上がる。裁判長は再び木槌を叩くことを余儀なくされた。

「被告人は罪を認めると言うのか？」

「はい。わたしはグレンダール男爵夫人アレーナと私通していました。ですが――」

証言台にいるミルイヒは、右の被告席に座るアレーナをちらりと見やった。アレーナは毅然とした面持ちをしている。

「――男爵夫人に罪はありません。わたしが無理矢理迫ったまでです。男爵夫人は無力でした」

「しかし、密通というものは双方の同意がなければ成立しないものです」

左の原告席にいる代理人が言った。原告席にはグレンダール男爵と、彼に告げ口をしたワイズ伯爵グラディスが座っている。

「そうでない場合もあります。わたしは男爵夫人をあることで脅していました。それで、男爵夫人は仕方なしにわたしを受け入れたのです」

傍聴席がざわめいた。

裁判長は木槌を叩いた。

裁判長より一段低いところに居並ぶ、六人の陪審員のひとり——ロッケム侯爵が口を開いた。

「被告人ミルイヒは被告人アレーナを脅迫していたと？ それはどのような内容なのだ？」

「それは……言えません」

「なぜだ？」

「グレンダール男爵の名誉に関わることです」

グレンダール男爵は丸くなった目でミルイヒを見た。

「裁判長、当法廷において審議されるのはわたしと男爵夫人の関係の有無であるはずです。脅迫も罪の一つなれど、グレンダール男爵の名誉を傷つけるまでもないと思いますが」

裁判長は厳かにうなずいた。

「被告人の意見を受理する。被告人ミルイヒは被告席へ戻りなさい。続いて、被告人アレーナ、証言台へ上りなさい」

アレーナは多くを語らなかった。裁判官、陪審員の問いに是非を言うだけだった。その答えはミルイヒの答えに添うものである。

そして、ついに判決の時が来た。

裁判長はざわめく法廷を木槌の音で鎮めた。

「被告人アレーナは有罪だと思う陪審員は手を挙げ

なさい」

二人の陪審員が手を挙げた。アレーナの無罪は確定した。

「被告人ミルイヒは有罪だと思う陪審員は手を挙げなさい」

六人の陪審員全員が手を挙げた。ミルイヒの有罪は確定した。

法廷は再びざわめいた。甲高い木槌の音がそれを打ち消す。

「判決を下す。被告人アレーナ・グレンダールは無罪。被告人ミルイヒ・セイデーズは有罪。罪人ミルイヒには、姦通、並びに脅迫の罪にて、近衛隊解任、禁固三年の刑を求刑する。だが、罪人は切り裂き魔事件において多大なる功績があるため、近衛隊解任にとどめおく。閉廷！」

「いやー、セリム將軍……いやさ、ドラクーン公爵が裁判長でよかったなあ。これがヒリエン公爵あたりだったら、減刑どころか、禁固十年は堅いぜ」

「ああ。かもな」

「しかし、ワイズの奴には頭に来るな」

「決闘代理人になったくせに」

「なんだよ、まだ気にしてるのか？ 俺だって不本意だったんだぞ。おまえとやるためとはいえ、あい

つと手を組むなんてさあ。負けたから前金返せなんて言いやがるし。金持ちのくせしてケチだねえ。あいつもたいがいしつこいよな。エルネラ殿下に嫌われて当然だ」

ランディは鼻から荒い息を吐いた。

「今回のことだってそうさ。アレーナ夫人がああなのは周知の事実で、男爵だって目をつぶっていた———というか、諦めてたって感じかな。それなのに、おまえがエルネラ殿下を助け出したのが妬ましいもんだから、なんとかして引きずり落としてやろうと裁判沙汰にしたに違いない。見たか？ 男爵のあのいたたまれない顔！」

ミルイヒはグレンダール男爵の顔を思い出した。ありがた迷惑そうな顔をしていた。

「どうしてそうまでわたしを目の敵にするのかな？———しかし、今回の件はわたしの不注意だった」

ランディはため息をつき、

「不注意とかいう問題ではなかりょうに……。人妻に手を出すなんて、それこそ死刑覚悟でないと」

と、自分のことを棚に上げて言う。

「言っておくが、手を出したのはあちらだ」

「だが、ワイズすら知っているくらいだ。一度だけじゃないんだろ？」

「ん、まあ、五、六度……人生相談というやつを…

…」

ミルイヒはしどろもどろに言った。

ランディは目をしばたかせ、

「五、六度!? おまえもなかなかやるもんだなあ」

と、感心したようにうなずいた。

ミルイヒは少しだけ頬を紅潮させた。

「言っとくが、人妻はあの人だけだ」

ランディは鼻を鳴らした。

「それにぶちあたってたら世話ないな。どうして、密通してたって認めちまったんだよ！ 知らぬ存ぜぬを通しておけば、無罪になったかもしれないのに。下手な嘘までつきやがって……」

「元陪審員としては認めないわけにはいかないだろう？ あの嘘だってあながちじゃあない」

「なんだよ。本当に脅迫してたのか？」

「いや、そういうことじゃなく、内容のことさ。貴族ならば、叩けば埃の十や二十は出てくる。もっともらしくは聞こえただろう？ 裁判ってのは駆け引きなんだよ、駆け引き」

ランディは眉をひそめた。

「駆け引き？ 厳正中立なものじゃないのか？」

「ばかな」

ミルイヒは吐き捨てるように言った。

「裁判長を始め、陪審員、廷吏が皆、貴族なんだ



ぞ？ 裏で何かがないわけないだろう？ 貴族対庶民の裁判で、庶民側が勝ったためしがあるか？」

ランディは大きくため息をついた。それにはうんざりした様子があった。ランディには、妙に堅くて、正義漢ぶっているところがあるから、このようなことは本当に許せないに違いない。

「貴族って、本当にろくでもないな。——それじゃあ、貴族の端くれたるおまえからも、埃の十や二十は出てくるのか？」

「十や二十もないけれど、エルネラ殿下を強姦したっていう大きな埃はあるな。婦女暴行、並びに不敬、並びに後宮侵入につき、鞭打ち千回、市中引き回し、国外追放ってとこかな」

ミルイヒは他人事のように淡々とやってのけた。

ランディは眉間にしわを寄せた。

「何度も言うようだけど——」

ミルイヒはランディの言葉を遮った。

「何度も返すようだけど、何も聞きたくない」

ランディは唇を尖らせたが、それ以上は何も言わなかった。

「あ、そうそう！ アレーナ夫人から手紙を預かってきていたんだ」

ランディは懐から手紙を取り出し、ミルイヒに渡した。ミルイヒはランディをにらみながら受け取っ

た。

「こういうのは早く出して欲しいな。前置きが長いから、重要なことを忘れるんだぞ」

「まあまあ」

ランディは苦笑いした。

ミルイヒはバラの封蝋印を破り、手紙を取り出した。

「ミルイヒ・セイデーズ公爵様

晩秋の候、いかがお過ごしでしょうか。

この度のことは本当に申し訳ありませんでした。まさか裁判沙汰になってしまうだなんて、思いもよらないことでした。

また、ミルイヒ様だけに罪をかぶせるようなことになり、お詫びの言葉もございません。ですが、法廷においてのミルイヒ様の態度には、なにかしら、わたくしを庇うということ以外の意図的なものを感じました。わたくしを庇うということならば、断固として拒否するところですが、失礼ながらそのような態度をとらせていただきました。

王都を離れてしまわれるそうですね。このようなことになって、もはや私的に会うことはないとはいえ、寂しい限りです。

どうか、お身体にはお気をつけ下さい。切り裂き魔事件での傷はまだ癒えていないとお聞きします。あれからまだ二週間ですものね。ご無理をなさらぬように。

アレーナ

追伸

わたくし、ミルイヒ様と関係を持てたことを後悔などしておりませんわ」

ミルイヒは微笑み、手紙を懐へ入れた。

「いい女性だ」

「なあなあ、なんて書いてきたんだ？」

「駆け落ちして欲しい」

ランディは目を丸くした。ミルイヒはその様子に笑った。

「——なあんて書いてあったら、思わず駆け落ちしてしまいそうだな」

「エルネラ殿下をほっぽって？」

ミルイヒの顔が急に真剣になった。どこか暗さがある。

ランディはきまり悪そうに、目を空にさまよわせた。

「えーと、ところでおまえ、どこへ行くところなん

だ？」

王城の大廊下でミルイヒと会ったランディは、ミルイヒのあとを追いながら話をしている。ミルイヒは軍事府へと足を向けていた。

「解任の挨拶をしに、班長と近衛隊長のところへ。それから、セリム將軍のところへ、辞任願いを届けに」

「辞任!？」

ランディは驚いて、足を止めた。

「辞任って、まさか、騎士をやめる気でののか？」

「いや、着任したばかりのギルディア騎士団の、さ。騎士をやめる気はないよ」

「ふむ、ギルディアは王都から結構離れてるからなあ。近場なら、フィエムあたりがいいんじゃないか？」

ミルイヒは首を振った。

「いや、もっと遠く——ギルディアなんかより遠くさ。そう、ニジェリあたりだ」

「ニジェリ!？」

ランディは目をむき、素っ頓狂な声を上げた。

「辺境じゃないか！　なんでまたそんなところに？」

ミルイヒは遠くを見るような目をした。

「……なんとなく。——エルネラ殿下がいないのなら、どこだってかまわないんだがな」

ランディは目を細め、眉間に手を当てた。沈痛な面持ちだ。しかし、首を一振りしてそれを打ち消した。

「おまえがいいならいいさ。時に——」

ランディの眼差しが急に疑い深くなった。

「おまえ、セリム・ドラクーン公爵将軍に賄賂を送っていやしなかったらどうな？」

「そんなもの、どこにあるって言うんだ？」

木枯らしが寒風に舞う。わずかに暖かみのある弱光が、開け放しの窓から差し込んでくる。

窓の外には中庭がある。エルネラは人気のほとんどないその庭を見下ろした。五階に位置するこの部屋まで、枝を伸ばす木はない。

エルネラはため息をついた。その息はわずかに白い。

籠の中の鳥ね……。

なけなしの自由さえも奪われた。もう一月半も剣を振るっていない。筋肉は急速に衰えつつある。

王城からの脱走はもはや不可能である。部屋の外には常に衛兵がおり、中庭の散歩でさえも衛兵が付く。面会に来る人間は嚴重に調べられる。

表向きはエルネラの身辺警護だ。しかし、それを命じた国王は、エルネラが自主的に王城を出奔したということを知っている。エルネラの拘束が本来の目的なのだ。

あれが最初で最後のチャンスだったのだ。王城から、お姫様という肩書きから逃れられる、最後のチャンス。しかし、それは失敗した。なんのために、今までおとなしいお姫様を演じてきたのかわからない。

エルネラは身震いし、鎧戸を閉めた。光は採光窓と暖炉の火だけとなり、部屋の中は少々薄暗くなった。

扉をノックする音が響いた。いらえを返すと、ディアンが顔を出した。

「エデュアルド殿下がお見えになりました」

エルネラはうなずいた。

「やあ、久しぶり。あれ以来だね」

「そうね。……珍しいわね、そんな格好をしているのは」

黒髪の青年はいつもの簡素な服装ではなく、王族らしい、きらびやかな服装をしていた。金糸銀糸の刺繍のある上着の襟は高く、青年は窮屈そうにホックをはずした。

「こんな窮屈な格好なんてしたくないよ。でも、主<sup>こ</sup>都<sup>こ</sup>にいることがばれては仕方ない。表向きは、領地に引きこもっていることになっていたんだから。また陛下に怒られちゃったよ。遊び回ってないで少しは落ち付けって、見合い話を持ちかけてくるし」

「悪かったわね、手間をおかけしまして。あのままわたしを放っておいてくれれば、近衛隊員にみつからなかったのにね」

意地悪く言ってやった。

「でもさ、ほら、君を見捨てるわけにはいかないじゃない？」

青年は思い出し笑いをした。

「しかし、あれは滑稽だったなあ。ミルイヒってば、君を抱きしめて放さないんだもん。あとからやってきたわたしたちに向ける目は、鬼気迫るものがあったねえ。——笑い話にはいいね」

エルネラはむっとして頬を膨らませた。

「どうして笑い話になるのよ！」

「いいじゃないの、笑い話になって。あのままにしておいたら、君は本当に死んでいたんだよ？」

エルネラはドレスの裾をぎゅっと握りしめた。

「……情けないわ。斬られたショックで仮死状態なんて。それもこんな浅い傷で」

エルネラは脇腹を軽く押さえた。痛みはもうな

い。しかし、浅いとはいえ、傷跡は残るだろう。

切り裂き魔との斬り合いを思い出す度におぞけが走る。今でもあの狂気を鮮明に思い出すことができた。

世の中には自分の知り得ぬことが多々あるのだと、改めて思い知らされた。所詮、世間知らずの「お姫様」なのね……。密かに自嘲した。

あのまま王都から抜け出すことができたとしても、そのあと、どのようにしてやっていくつもりだったのだろうか？ 今、冷静に振り返ってみると、ひどく愚かで子供じみた行為だった。今となっては……。

エルネラは脇腹に触れていた手を、下腹部へと移動させた。

「初めて斬られたんだ。ショックに浅い深いは関係ない。これでショックでも起こしてなかったら、わたしは君をお姫様とは認めないよ」

「認めてもらわなくとも結構よ」

青年は紅茶を一口飲み、ため息をついた。

「……言うておくけど、わたしは何もできないよ」

「何が？」

「君がわたしを呼んだ訳はわかっているさ」

「それなら話が早くて助か……」

エルネラは急に青ざめ、手で口を覆った。



青年は驚き、立ち上がってエルネラの肩を優しく抱いた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

エルネラはわずかにうなずいた。

「……もう大丈夫。おさまったわ」

「あのさ……」

青年は幾分青ざめた顔で訊いた。

「妙に顔が紅潮してるな、とさっきから思ってたんだけど……もしかして……まさか……」

「そのまさかよ」

エルネラは至極きっぱりと言った。

青年は目をまん丸くし、口をぽかんと開けた。エルネラは、青年がこれほど動揺する様子をついぞ見たことがなかった。笑いがこみ上げてくる。

青年は大きく深呼吸をし、ようやく言葉を発したが、その声はかすれ気味だ。

「相手がいなくてことはないよね？」

「もちろん」

「訊くまでもないかもしれないけど……相手は『彼』なの？」

エルネラは当然のようにならずいた。

「『彼』以外の男性ひとと関係を持ったことはないわよ。『彼』が何人もの女性と関係を持っていてもね」

その言葉には刺がある。

「いったい、いつの間にそういうことになったわけ？」

「あなたのいない間に」

「どうしてまたそういう展開になったわけ？」

「なんとなく」

「なんとなくでそうなるの？」

エルネラは、笑いを堪えるようにしてうなずいた。

青年は大きくため息をつきながら、首を振った。

「わからない……まったくもって、君たちってわからないよ」

「あなたもね」

青年はエルネラから離れ、部屋の中をうろうろと歩き回った。そして、サイドボードに寄りかかり、神経質にボードの上を指で叩いた。

「ミルイヒは知っているの？」

「知らないわ。だって、気づいたときにはすでに王都にいなかったんですもの。ニジェリなんて<sup>へんぴ</sup>辺鄙なところに飛ばされたのよ。いい気味だわ。身から出た錆よね。知っているのはわたしとディアンだけよ」

青年は頭をかいた。

「ニジェリか……。行って帰ってくるだけで一ヶ月

……。早急に手配しないと……」

エルネラは目をしばたかせた。

「何を手配するの？」

「決まっているじゃないか。結婚式だよ」

「結婚式ですって？ わたし、結婚なんてしないわよ」

青年は目を見開いた。

「何を言ってるんだ。君はお姫様なんだよ。結婚しないで子供を持つだなんて、とんでもない！ 体面が悪いじゃないか」

「あなたから体面なんて言葉が出るとは思わなかったわ」

「それは悪かったね」

「あなたは意外と常識にとらわれる人だったのね」

「別に、一般論を述べているまでだよ。わたしのように陛下を悩ませてはいけないよ」

「一人が二人になったって、大した差はないわよ」

青年はうつむき、額に手を当てた。

「君と付き合っただけではなかったな……。個人的におもしろくはあるけど。——わたしを呼んだのは、この現状をどうにかしろってことだったの？ この、狭苦しい籠から出してくれというのではなく？」

「両方よ」

「両方？」

「いい考えがあるわ。わたしがこの籠から逃れ、この子を人知れず育てる方法」

エルネラは青年を手招き、その耳にささやいた。

「ふむ、いい案のような気がしないでもない。しかし、わたしは手伝わないよ」

エルネラは予想していたとばかりに微笑んだ。

「あらそう。なかなかいい場所だと思うのだけれど」

「それはどこなんだい？」

「ミシノア」

青年は真剣な面持ちでエルネラを見た。

「そこがどういう場所か、わかって言っているの？」

エルネラは意味深な微笑みを浮かべた。

「もちろん。同盟国リュシェラとの国境にほど近い、静養にはもってこいの場所。いいところだと思わない？」

青年は微笑んだ。しかし、目は笑っていない。

「君はそういうことから逃れたいんじゃないの？」

「そうね、もううんざりよ。表では愛想が良くて、裏では何を考えているのかわからない人々と話をするのも、『お姫様』の振りをするのも。けれど、こ

れとそれとはだいぶ違うと思うわ。とりあえず、身の安全が保証されてないあたり」

「子供を育てるなら、身の安全が保障されていた方がいいだろうに……」

青年は諦めたように軽く肩をすくめた。

「わかったよ。協力しようじゃないか。——ところで、どこからそんな話を聞いてきたんだ？ 後宮の奥深くにいながら」

「ヴァルア兄上はわたしに弱いのよ」

青年は舌打ちし、ひとりごちた。

「ヴァルアの奴め、エルネラのことをわかってないな」

青年は紅茶を一口飲んだ。

「ところで、ミルイヒはどうするんだい？ 君の親衛隊ということで、セリム将軍に転属の話をつけておくつもりだけど」

「ミルイヒには教えてあげない」

「教えてあげないって……一応、父親なんだし……ねえ、やっぱり結婚した方がいいよ」

「いやよ。一度婚約破棄になったのに結婚だなんて、それこそ体面が悪いわ」

「君の体面の基準って、いったい何なの？ ——それはともかく、産まれてくる子供によくはないよ、父親がいないってのはさ」

「あなたがなればいいじゃない、父親に」

青年は目をまん丸くし、口を引きつらせた。

「な、な、何を言ってるの——!? わたしは独身主義だって何度も言ってるじゃないか！」

「いいじゃない、独身主義のまま。何もわたしと結婚しろとは言っていないわよ。父親代わりよ。父親代わり」

青年は懐から絹のハンカチを取り出し、額の汗を拭った。

「いいの？ わたしなんかで。どんな子に育つかわからないよ？」

「なによ。まんざらでもないみたいじゃない」

「子供は好きだよ。けれど、結婚だけは、ね。恋愛は幻想のままが一番なんだ」

と、遠くを見るような目で立ち上がり、窓辺へと足を向けた。

エルネラは眉をひそめた。なにか苦い過去でもあったのかしら？

「見てよ。どうりで寒いわけだ」

開け放された鎧戸の外に、白いものがちらつき始めた。

青年は窓の外に手を差し出した。小さな雪が掌にふわりと落ち、じんわりと姿を消した。青年はその様子を目を細めて見ていた。

「真白き雪の迷うがごとく  
吐息の凍れるがごとく  
君の瞳は閉ざされる  
しこうして  
愛せし人は還らず」

## ∞.エピローグ――再会

「転属……ですか？」

ニジェリ警備隊長は苦い顔でうなずいた。

「転属といってもな、王都へ帰還というわけではない。君がここに来てもう七年だ。わたしは常日頃、君はここに置いておくような人物ではないとおってあった。今回の転属をわたしは喜ばしく思っていたのだが、転属先を見ると……ふむ……下手をしたらここよりも……」

警備隊長は痛ましい顔でミルイヒを見た。いったいどんなことをやらかしたんだ？ と言っているように見えた。

「どこなんですか？」

「ミシノアのレイ親衛隊。エルネラ・レイ・アルヴァーノ王女殿下の親衛隊だ」

ミルイヒはわずかに目を見開いた。

「君も噂には聞いているだろう？ エルネラ殿下は……その……お気が触れているということ。ま、そのような方の身辺警護だからねえ」

「辞令ならば致し方ないでしょう」

「うん、まあ、そうだな」

警備隊長は転属辞令の書状をミルイヒに手渡した。



「エルネラ殿下はそれはそれは美しい方だと聞く。  
……こんなのは慰めにならんかな？　そういえば、  
君は以前、近衛隊にいたな。エルネラ殿下を見たこ  
とがあるんじゃないか？」

ミルイヒは目を細めた。

「……いえ。わたしには遠い存在でした」

朧月が満天を弱々しく照らしていた。春風に過ぎ  
ゆく雲は、時折、いたずらに月を覆い隠しては行く  
手を見失わせる。

寂れた白亜の屋敷を前に、ミルイヒは馬を下り  
た。

驚くほどに人気を感じられない。親衛隊員はいっ  
たい何をしているのだろうか？　門番さえいなかった。

ミルイヒは急に不安に駆られた。屋敷が不気味な  
青白さを放っているように思えた。

紺のマントを翻し、剣の柄に手を置きながら、屋  
敷に踏み込んだ。

月明かりだけが中を照らしている。なんの気配もし  
ない——いや、わずかにレイエンの花の香がする。

足元を見ると、レイエンの花が一つ落ちていた。  
五枚の花びらのある、白く可憐な花。よく見ると、  
どこかへ向かって点々と落ちている。ミルイヒはそ

のあとを追った。

屋敷の中に軍靴の音だけが虚しく響く。いたずらな風が迷い込み、ミルイヒの金髪をわずかに揺らした。

花は閉ざされた扉のところまで続いていた。言いしれぬ、威圧感のある扉だ。

唾を呑み込み、一気に扉を開けた。

その瞬間、白い花びらを乗せた疾風が吹き込み、ミルイヒは目をつぶった。風がやんだと感じると、ゆっくりと目を開けた。

その瞳に飛び込んできたのは、中庭じゅうに咲き乱れるレイエンの花だった。それは若葉の上に降り積もった雪のように見えた。むせ返るような甘酸っぱい香りが満ちている。

その中央に、こちらに背を向けている、白いドレスの女がいた。腰まである金髪が風になぶられ、きらきらと月光を反射している。

女はミルイヒに気づいたかのように、不意に振り返った。

ミルイヒは我が目を疑った。夢なのではないかと思った。

——エルネラ。

変わらぬ美しさがそこにあった。七年の時を経て、あどけなさは消え、落ち着いた雰囲気にも包まれ

ている——まるで、母親のような。

しかし、その瞳は虚ろにかけっっている。どこか、違うところを見ているようだ。気がおかしくなった話は本当なのだろうか？

ミルイヒは、今までずっとなりをひそめていた想いが奔流となって蘇ってくるのを感じた。それは七年前と変わらぬ想い。

ひどく驚かされた。まだ、殿下を想う心があったなんて……。とうの昔に消えてしまったのだと思っていたのに……。

心に満ちる想いのままに、エルネラに抱きついてキスしたかった。しかし、彼がとった行動は、至極常識的なものだった。

エルネラは目の前の事実を信じることができず、陶然となった。

七年の時を経てそこに立つのは、精悍な顔つきをしたミルイヒだった。しかし、顔色が悪そうで、無愛想なのは相変わらずだ。

エルネラは感激にうち震えそうになるのをこらえた。知らず、涙がこみ上げてくる。

強がってみても、いざ会ってみるとこれだ。己の不甲斐なさを忌々しく思った。

今なら言えそうな気がする。七年前は、子供じみ

た思いがそれを阻んでいた。

子供ができた、なんて言ったら、ミルイヒは何も言わずに自分と結婚しただろう。しかし、それが嫌でたまらなかった。子供ができてしまったのだから仕方なく結婚する、という風に思えてならなかった。たとえミルイヒがそれを否定しても、純粹な気持ちで考えることができなかった。

でも、あの子のことを考えるなら、言わなくては！　まして、あの子が……

エルネラが口を開きかけたとき、ミルイヒは彼女の元におもむろに寄り、片膝をついてこうべを垂れていた。

「……エルネラ殿下、この度レイ親衛隊に配属されました、ミルイヒ・セイデーズと申します。殿下の身边を警護させていただく任につけましたことを、恐悦至極に存じます」

エルネラは開きかけた口を閉ざし、残念そうな顔つきをした。ああ、この人はわたしの気がおかしいと思っているのよね。

ミルイヒはエルネラの様子に気づいた風もなく、続けた。

「殿下……配属されたばかりだというのに申し上げるのも難なのですが、このようなことは通例なので、はばかりながらも申し上げます」

ミルイヒは息を吸い込んだ。

「そろそろ身を固めようかと思えます」

エルネラは目を大きく見開いた。唇がかすかに震える。次の言葉を期待して、頬を紅潮させた。

「……つきましては、どなたかわたしにふさわしい方をご紹介願えませんか？」

——目の前が真っ暗になった。

この人はいったい何を言っているのかしら……？  
わたしにあなたと結婚する女を選べと言うの？

仕える人間に結婚の許可を得るのは、この国に古来からある風習である。

エルネラはドレスの裾を握りしめ、唇を噛んだ。  
そうよね。もう七年も経つのだものね。ずっと同じ気持ちであるはずなんてないんだわ。……いいでしょう。

エルネラは青ざめた顔で瞳を閉じた。

ミルイヒは答えが返ってこないのを当然のごとく納得した。やはり、お気が触れているというのは本当だったのか。

諦めて立ち上がりかけたとき、不意にあたりが陰った。月が雲に隠れたのだ。互いの位置が何とな

くわかる程度の明るさしかない。

「あなたにふさわしい女なんていないわ」

いらえがあったことにミルイヒは驚いた。

「殿下……正気ですか？」

「今だけは正気よ。だって、闇の中では何も隠す必要はないもの」

「狂言なのですか？」

「……」

「わたしのせいなんですか？」

「……勘違いしないことね。あなたがわたしの中でどれほどの存在だと思うの？」

「小さくはないと思いますよ。殿下の初めての男なのですから」

エルネラは身じろいだようだった。

「そんなの、ちっぽけな思い出に過ぎないわ」

声が幾分震えている。言い過ぎたか？

「そうですね。ちっぽけなものかもしれません。なにしろ、わたしたちは若かった」

「『若い』ですべてを片づけてしまおうというの？」

「事実です。若かりし日の思い出は胸の内にしまっておくべきものです。それは幻想に過ぎません。人は現実の中で生きなければならないんです」

「それでは、今、このときは何なのかしら」

「幻想と現実の狭間といったところでしょうか？  
殿下が今、偽っていないというのなら。闇の中では、幻想と現実の区別が付きません」

エルネラの手がミルイヒの腕に触れた。そのぬくもりに、ミルイヒは驚きと共に懐かしさを感じた。

——駄目だ！

ミルイヒは、情に傾きそうになる己の心を戒めた。自分とエルネラはもはや一介の主従に過ぎない。再び過ちを犯してはならない。

「それなら……」

エルネラは躊躇いがちに言った。

「キスぐらいは罰が当たらないでしょうね？」

ミルイヒは目を見開き、エルネラの表情を読みとろうと必死に目を凝らした。しかし、輪郭がわずかにわかるだけで、それには至らなかった。

「……ええ、ここは現実ではなく、誰も見ることのできない闇の中なのですから」

ミルイヒは、割れ物にでも触るかのようにエルネラをそっと抱き寄せ、刹那の躊躇いのあと、優しく口づけた。それは、甘く、苦い、懐かしい味がした。若き日の思い出が、走馬燈のように浮かんでは消える。このまま永遠に時間が止まってしまえばいいと思った。

しかし、現実はすぐにやってきた。月が雲間から

姿を現し、世界を再び照らし出した。

二人は名残惜しげに離れたが、その瞳に後悔はない。何かしらの決意がある。

ミルイヒは軽く会釈をすると、やってきた扉へ向かって颯爽と歩いた。

エルネラはミルイヒに背を向け、毅然と歩き出した。

二人の間に風が巻き起こり、白い花びらが空高く舞った。舞い上げられた花びらは月の光でほのかに輝き、白い軌跡を描くように地上に舞い降りた。

それはあたかも、月のかけらの残影のようだった。

朧の月の光のごとく  
草木の萌ゆるのごとく  
君の微笑みは温かい  
そして  
愛する人は振り向く

夏の日差しのごとく  
蒼海を渡る風のごとく  
君の眼差しはまぶしい  
しこうして



愛する人は消えゆく

秋の陽の落ちるがごとく

草木のしおれるがごとく

君の顔は憂い

そして

愛せし人の名を呼ぶ

真白き雪の迷うがごとく

吐息の凍れるがごとく

君の瞳は閉ざされる

しこうして

愛せし人は還らず

また春来たりなば

共に月を見上げんことを望まん

ああ

君の愛せし人はいまいずこ

ジャーニー・バーゼル

『君を想いて』

了

## 奥付

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などとは、一切関係ありません。

※この作品を、個人的に楽しむ範囲を越えて、無断で、複製、転載、配布、改変、販売等を行うことを禁じます。

=====

=====

■作品名：月下残影

■著作者：琴乃つむぎ / WordsWeaver

■初版：1999-08-07

    改版：2000-11-01

■ 掲 載 サ イ ト       :   WordsWeaver

<http://wordsweaver.com/>

=====

=====